
ISの世界に地球連邦をぶち込んでみた。

地球連邦バンザーーーーイ！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISの世界に地球連邦をぶち込んでみた。

【コード】

N0489V

【作者名】

地球連邦バンザーイー！！

【あらすじ】

あの、地球連邦軍がISの世界にもしあつたら。

ひよんな事から転生させられた主人公は、「IS!?!?.....宇宙にも出ない機動兵器なんて価値無し。」とのたまってチート能力を使って地球連邦を創設。

赤道を境にISを覇権する各国と睨み合いを行うことに!?

「まあいいや。他所が重力に魂を捉われている間に宇宙開発おこなっちゃうもん。」と、真つ向から無視して宇宙開発を行う主人公。

果たして、いったいどんな結末になるのか。

ISの世界って西暦何年？（前書き）

始めまして、私 r a h o t u と申します。

この作品は、極めて実験的要素が強いです。文章力皆無です。

それでもご覧になってくださる方がいれば幸いです。

それとこの作品は「流行のISは嫌いかね？」と少しだけコラボします。

ISの世界って西暦何年？

ありのままに今起こった事を……………。

このネタも飽きたな。

……………知らない天井……………。

ダメだ、鬱エンドしか思い浮かばない。

それじゃあ、こうしよう。

人類が、文明を生み出してはや幾千年。

人々は、文明の光を地球の隅々まで行き渡らせ、子を産み、育て、そして死んでいった……………。

この蒼く美しい、銀河の片隅にあるちっぽけな惑星で、生まれた生命は何処に向かっていくのだろうか？

何度も、何度も、互いに傷つけ、殺し合い、奪い合い、犯し、その度に復興する。

人類とはいったいなんなのだろう？

この、広大な銀河に羽ばたこうともせず、小さな小さな矮小な美しい星に捉われる彼らは、いったい何を目指すのだろうか。

これは、とある転生した男が、「原作なんか知ったこんじゃねえ！

」!

と、のたまって宇宙への果て無き夢を目指す、原作フルボッコ？ス
トーリーである。

やあ、俺の名前はヨハン・イブラヒム・ゴツプ。

無能と有能が合わさって凡人に見えること請け合いなしだ。

さてさて、騙して悪いがここはガンダムの世界ではない

え？どこかって。

ソレは、あれですよ、二組なんてなかったんやゝのあのISSですI
S。

インフィニット・ストラトスの世界に今現在私はいます。

まあ、此処までいえば判ると思いますが、はい実は私所謂転生者と
いうものです。

朝起きたら、とかではなく、普通にハーツオブアイアンで一年戦争
が舞台のMODで調子こいて連邦で遊んでたら、夜中に突然画面に

飲み込まれて現在に至る。

最初は慌てたが、直に胸の所に違和感を感じて、ポケットを探ったら手紙が出てきて、読んで見ると。

『俺オレおれ神。天界つて暇、世紀末早く来ないかな？なんて考えてたらもう過ぎてたorz。という事で次の世紀末まで暇つぶしの為に適当に見繕った人間で遊んでみた。ISとかいう普通じゃない世界だから、一応本来ではあり得ない能力と装備を神様補正で与えているので後は適当に頑張つてね。 P・S・この手紙は最後まで読むと自動的に焼却される、火傷するから注意せよ。』

と、読み進めていくうちに手紙の端のほうから煙が出始め、慌てて最後まで読んで手を離すと、あつと言つ間に燃え尽きてしまった。

「あつぶねえなあ。まったくクソ神様が、何が暇つぶしだ、ああやだよ。 もう寝よ。」

そんな感じで最初は現実逃避をしていたんだが、いい加減腹も減りこれが否応無く現実であると認めざる終えなくなった。

「はあ、まったくオレは清き善良なる一般市民様だぜ。なんだってこんな目にあわにゃあいけないんだ。」

オレは愚痴を言いつつも、あの神（笑）が言っていた能力を装備とやらを確認しようか。

つて、どうやって確認するんだ？

うん？足元にバスケットボール程の大きさの物体が転がってきて思

わず手で持ち上げてみると、

『ハロハロ、元気がゴツプ、ハロハロ情報確認するか？』

．．．．ハロですか。本当に有難う御座います。

取り合えず、こいつがなんだか知ってそうなので、使ってみることにした。

．．．．．主人公現状確認中
．．．。

．．．．．これは無い。

名前：ヨハン・イブラヒム・ゴツプ、はデフォで変更不可か。

まあ、これはいい、だが問題は次だ。

能力、ギレン閣下並みの頭脳（IQ240越え）、演説の才能、レビルのカリスマ、軍事的天才、人身掌握術、卓越した戦術戦略眼、先見性、etcまだまだあるがこの次のゴツプが問題だ。

ゴツプの裏工作の達人、先天的政治センス、交渉の達人、補給兵站業務の神様、政治的社会的抹殺不可、地球圏規模の人脈、他人の弱みを掴み利用する才能、執念深いしぶとさで寿命以外で死なない．．

．．．e t c。

ゴツプだけの能力で寿命以外で死ぬ事が無くなりました、本当に有難う御座います。

まあ、上二人は戦争では役には立つが、はっきり言って平時ならゴツプの能力だけで十分すぎるほどだ。

．．．まあ、この時はそう思っていたんだけどね。

「ええと、次はハ口、自分の事はわかったから、次はこの世界のことと今のオレの現状を知りたい。出来るか？」

『ハ口、ハ口、．．．．．情報の検索完了、モニターにダスヨ。』

ハ口の目から光が出て、俺の目の前に立体的な地球地図が現われる。

いやはや、便利なもんだ。

オレは、顎に手を当てながら覗き込んでいると、ハ口が説明してくれた。

『現在西暦2×××年。世界の勢力区分を大きく分けるところなります。』

そういつて画像に色がつき、丁度赤道を境に色分けがなされた。

北半球の国々は、大まかに俺が覚えている通りの国々があったが、南半球に目を通すと途端に地図上の大陸や島々全てが青色で塗りつ

ぶされていた。

「ハロ、この青色で塗りつぶされている所は？」

オレが何気なく聞いてみると驚くべき答えが返ってきた。

『ハロハロ、青色の部分は地球連邦の支配領域、これらは全て貴方が管理することになっています。現在複数の国家と領土、領海権、貿易、移民問題が発生しています。』

「はあ、なんだそりゃ。」

地球連邦がISの世界にあるって、それはオカシイだろjk

．．．．．まあいい。あの神（笑）のせいだろうがオレは気にしない。

ソレよりも問題は結構他所の国と争っているらしいな。

ないなに、国境を接する全ての国と何らかの領土問題と経済問題、あちゃー米帝と赤い国と熊さんとも軍事的緊張関係か．．．．．これは酷いな。

友好国は北欧と．．．．．名前も知らないような小国ばかりか。

日本と韓国と台湾も入っているがどれもこれも微妙だな。

「ハロ他には何か重要なことは無いか？」

その後、IS白騎士が現われるまでの時間と、国家運営に関わる様

々な事を知らされたが、思いの他簡単に頭に入っていた。

「流石に一国の総帥と世界最強軍団の長だな、まあ連邦議長になっちまうような怪物さんもいることだし、これくらい出来なきや何も始まらないがな。」

「最後に、地球連邦の創立と目的を説明いたします。地球連邦は二十世紀の終わりに設立され、以後人類の宇宙開発の中心となっていきました、しかし各国間の不均衡と性急過ぎる開発とで分裂、今現在の形になるまで大小様々な紛争とテロが起こり結局連邦は解体、しかし比較的戦火やテロとは遠かったオーストラリアを中心とした国々が経済的協定を結ぶことにより連邦は存続、以後比較的経済が安定した国々を中心に連合が組まれ現代のような状況になりました。」

「成程な、まあ人類の統一は流石に早すぎたって事か。」

「流石にテロの世紀と呼ばれる二十一世紀を乗り切れるほど人類は成熟していないしな、そうなると史実の連邦ってどれだけ偉いんだか。」

「最後になつたが連邦の目的というのは？」

「全人類の再度の統合、及び人類を宇宙へと進出させその管理運営を行うこと。連邦による全人類に対する管理体制の確立が連邦の目的であり貴方の果たすべき義務です。」

「もし俺がソレを断つたら？」

「無理です。貴方の体内には数十のナノマシンにより常に監視され

ています。貴方が連邦に対して反意や不利益を被ると判断された場合自動的に貴方の脳髓を焼きます。』

「おお怖。判ったよ、精々気合入れて頑張らせてもらいますよ。」

オレは手を上げて首を横に振りながらため息をついた。

「兎に角現状は把握出来た。まあ、リアル戦略ゲーを見たいなもんだな。精々こき使われるとしますか。」

地球連邦首都ダーウィン。

この地に置かれる地球連邦議会では、新首相の就任演説が行われていた。

「．．．．であるからして、今後とも連邦の自由と平等と秩序の維持と発展を望むしだいであります。」

万雷を思わせる拍手の中締めくくられた演説を、オレは演説台の中で何処か他人事のように眺めていた。

あの後、早速仕事に取り掛かったオレは、まず首相として地球連邦を指導していく立場らしい。

因みに支持率は余裕の八十パーセント越え。

どっかの十二パーセントの首相とは大違いだ。

まあ、最初の支持率なんて当てにはならんな。

結局民衆なんて熱しやすく冷めやすいもの、ブームが終われば誰にでも不平不満は言う。

それでもこれだけ期待しているということは、前任者がよっぽど酷かったか、それともオレの能力のおかげか……。

まあいい。

オレは演説が終わり、関係閣僚や各党派との会談をとマスコミ向けの話を終えると、執務室の革張りの高級椅子に、ドカツと座り込んだ。

執務室はホワイトハウスを意識してか、全体的に高級感に溢れ、見掛け以上に広々としていた。

コンコン

部屋をノックする音に、オレは背筋を正し、ネクタイが曲がっていないかを確認してから、

「入れ。」

と、もったいぶった風に言った。

「失礼します首相閣下。私はアンリー・コーブランド。新任の大統領補佐官です。どうか宜しく。」

細身の、スーツを着た丸眼鏡の男が手を差し出しながら挨拶をした。

私は、先程手に取った関係閣僚や首相スタッフのメンバーのプロファイルを思い出しつつ、彼の手を取りこちらも挨拶をした。

「ああ、ゴツプだ。宜しくこれから頼むよアンリ君。」

彼のプロフィールの中にあつた愛称を言うと、アンリは少しはにかみながら小さく

「光荣です閣下。」

と、言った。

「ううん、それでは閣下、早速ですが今日の重要案件です。それとこれが資料と現在連邦の状況、各国との関係とその詳細な資料です。」

流石に云百年も技術が進歩すれば紙はいらないのか、執務室の机の上に、空中投影ディスプレイが幾つものモニターを開き、そこに解決すべき今日の書類と今後のスケジュールが乗っていた。

「ありがとうございます、もう下がっていいぞ。」

彼にそういって、私は最初の書類に取り掛かった……。

アンリが気を利かせて、黙って出て行くと、私は眼鏡を取り出しつつ一言。

「……普通に庶民ライフは無理か。まあ、精々世界大戦を起ささないよう気をつけないな。」

眼鏡をかけた後、私は驚くべきスピードで決済しつつも、今後の世界でどうやって目的を果たすのかと、考えて耽っていた。

ハフマン島

私は今、飛行機の窓から流れ行く雲の間に見えるハフマン島に目を奪われていた。

蒼く美しい海と、深緑のエメラルドを思わせる密林、三つの山々にかかる白い雪と南部の砂漠地帯。

その全てが美しく、この島がいったい何であったのかをしばし忘れさせた。

ポーン、

アナウンスが鳴り、着陸準備に入った飛行機は高度を落とし、ゆっくりとハフマン島に近づいていった。

フライトアテンダントがシートベルトの確認に来て、シートベルトを締めている間にも、私はずっとハフマン島を眺め続けていた。

飛行機を降りてまず最初に私を出迎えたのは、眩しい太陽の日差しと、各国報道関係者が焚くフラッシュの光、そして一目連邦の首相を見ようと集まってきた支持者達と野次馬の集団の歓声であった。

にこやかに手を振りながらマスコミや民衆に答えつつも私はタラッ

プを降りていった。

「ようこそハフマン島へ、歓迎いたしますゴツプ首相。」

出迎えに来た州知事と握手をしながらにこやかに肩を組み、マスコミ受けをした後私は州知事とボディガードと共に迎えに来た車に乗り込んでいった。

空港を抜け、交通規制され、前後を左右を固める護衛車両と私たちが乗る黒塗りのリムジン以外走るものない道路で、やっと私は息をつく事が出来た。

「ゴツプ閣下、お疲れのようでしたらこのままホテルの方に向かいますか？」

車内で向かい合うように座る州知事のアレクセイ・スミノルフスキー君が、そう言うってくれるが、私は固辞して言った。

「なに、それには及ばんよ。このまま官舎のほうに向かってくれ。」

「判りました。っとそうそう、実は……………」

防音の車の中で、彼と会談をしつつ私はふと、窓の外に見えるビルの上目に目を奪われた。

「知事あれは。」

「ああ、あれですか。いやお恥ずかしい、連邦の統治の下比較的平和を保ってはいますが、まあ未だにハフマン島は戦時というわけですよ。」

一定の高さのビルの上に見える高射砲陣地の群れを見ながら、私は何時かこの島に真の統一と平和をもたらそうと強く思った。

官舎に着き、車を降りて表敬訪問を受けた私は、その後州知事や地元の名士等と共に昼食をし有意義な時間を過ごした。

滞在は一週間を予定しており、その間に様々な人間が私の泊まるホテルに訪れた。

いやはや、政治家先生は本当に大変だな。

漸く今日の訪問が終わり、持ち込まれた政務も粗方済ませた私は、ホテルのスイートでゆっくりと寛いでいた。

．．．．．明日は確かペセタの農業視察か．．．．．。

最近フリーダム郊外で不穏な空気が漂い始めていたな．．．．。

なにもなければよいのだが．．．．。

ハイウェイから望むペセタの耕作地帯は、常夏の日差しに青々と茂った米や野菜が何処までも続いていた。

車を降り、地元で一番の土地を持つ地主の家に招かれての昼食会に参加しつつ、のどかな田園風景に心和ませていた。

「やはり米はいい、心が安らぐ。」

振舞われた家主自慢のコーヒーの豆に舌鼓を打ちつつ、ソーサーにカップを置いた私は、ふと気になって空を見上げた。

何処までも青く、澄んだ空に幾筋もの飛行機雲が．．．飛行機雲？
嫌な予感がする。

私は家主に席を外すといい、そのまま付近の空軍基地に付近で演習を行っているのかと問い合わせた。

答えは「否」

となるとあれは．．．いったい何だったのだろうか。

方角からするとルービディスに向かっていたが．．．急がなければ、なにか大変な事が起きたらしい。

私はズキズキと痛む頭に手を当てながら急いで州都に戻ることにした。

急いで官庁に連絡を入れるも返事はなく、私は自身の嫌な事がおきたと確信する。

後になって知ったことだが、この時みた飛行機雲の正体は、合衆国から打ち込まれたミサイルでその目標が州都であったことを。

後に幾たびも繰り返されてきた不毛な争いはこう名付けられた、

『第七次ハフマン島紛争』

ハフマン島紛争

急いで戻った州都は、見るも無残な姿に成り果てていた。

都市の彼方此方で黒煙が上がり、炎と瓦礫の下敷になった人々が怨嗟の声を上げる。

瓦礫の山と化した州都ルーピイデイスは最早嘗ての面影は残っていないかった。

私は直に現状確認の為に官舎へと向かったが、広場は死傷者で覆い尽くされ、あちらこちらで助けを呼ぶ声が鳴り響いた。

仕方なく車を降りて官舎へと護衛されながら急いだ。

途中責任者らしき人物に現状を聞いてみると、どの病院も患者の収容人数をオーバーし、こうして外で診るしかないらしい。

州軍も、消防と警察と協力して瓦礫の撤去や被害者の捜索に当たっていた。

しかし、それでも手が回らないらしい、一部で暴動も起き始め町は危険な状態らしい。

官舎の中に入った私たちは、廊下に蹲る負傷者達の間を通るようにして州知事の部屋を目指した。

「おおお、ゴッブ閣下、ご無事でしたか。いま軍のへりを迎えに出した所ですが……。お怪我やお加減は悪くありませんか？」

部屋の中は着弾の衝撃で物が散らかったままになっていたが、アレクセイ本人はいたって健康そうであった。

「いや心配には及ばんよ、それよりも現状を確認したい。いったい何が起きたんだ。」

私は半ば予想していた答えを思いながら、彼にそう尋ねざる終えなかった。

「アメリカが．．．いえ合衆国駐留軍が国境付近で発砲、国境警備隊と銃撃戦になったようですがその直後に今度は中距離ミサイルが飛来、市街数箇所に着弾し昼間ということもあり大勢の市民に死傷者が出ました。更に火災とビルの倒壊による混乱で市民が各所で孤立、現在急いで救助に向かわせているところです。」

「判った、君もよくやった。合衆国の動きは？」

「情報が錯綜して今だ判明しませんが、どうやら向こうも混乱しているようです。」

口ごもるアレクセイの言葉に、私は疑問を覚えずにはいられなかった。

国境付近での小競り合いに目を向かせている間にミサイルでの先制その後大規模な侵攻があっても可笑しくはないはずだ。

なのに何を躊躇う．．．．．もしや．．．。

「今回の行動は合衆国の総意ではないのかもしれないな。至急大使

館に連絡を、それと付近に展開中のE・E・M・F・に大統領命令で指示を出し二次攻撃への備えとヘリボーンによる救助支援を出せ。

「

「大統領、合衆国大使館のマツキンリーに繋がりました。」

私は、受話器を受け取り、少しして心を落ち着けながら電話に出た。

「マツキンリー大使、私は地球連邦首相ゴツプです、我々はいま酷く混乱しています。我々は貴方方から一方的に宣戦布告無しに攻撃を受け、大勢の市民に死傷者が出ました。これはいつたいどう言う事なのです？明確な返答がない場合、あなた方が不当に宣戦布告無しに攻撃したとして我々も報復措置を取る用意があります。」

「ゴツプ首相、こちらの情報では、先に貴方方から攻撃されたとありますが？当方にはそちらに対して攻撃を仕掛けたなどという証拠はありません。」

「なるほど、どうやらお互い現状がまだよく判ってはいないようだ。それではこうしましょう。我々連邦は合衆国に対し、今回の被害に対する賠償と遺族と負傷者への謝罪及びきちんとした説明をして頂きたい。そうでなければ、あなた方の祖先が築き上げたここ三十年の平和を無に帰す事になりかねない。その場合は、お互いに無事では済まなくなります。」

「．．．私を合衆国を脅そうというのですか。」

「いえいえ、我々はきちんとした証拠と説明と、謝罪に賠償をして頂けなければ当然の措置を取るまでです．．．いまハフマン島に展開中の海軍の艦隊と空軍は既にあなた方の返答しだいでは、こ

の悲劇を全土に広げる用意がある。」

「……判りました。少し時間を頂きたい、私の一存では決めかねます。」

「いいでしょう。しかし、あなた方が下手な時間稼ぎをするようであれば、お互いにとって大変悲劇的な事が起こるでしょう。」

そこで電話を切った私は、全軍にデフコン2を発令。

急ぎダーウィンへと空軍機に護衛されながら戻っていった。

ダーウィンに戻り、関係閣僚と専門家を集めた会議を行いつつも、私は合衆国大統領とホットラインで粘り強い交渉を続けた。

だが、両者の交渉の甲斐なく、暴発した陸軍との間で戦闘が発生、なし崩しのメーラ河を巡り両軍が合間見えることとなる。

互いに宣戦布告なしの戦闘で、混乱し、収集がつかなくなった情勢は、その後一年間余りの間、ハフマン島をかけての連邦と合衆国との紛争が繰り返される。

紛争中もゴップはその驚異的政治手腕とリーダーシップとで各党派を纏め上げ、紛争を一気に解決させる為に大規模な派兵を決定。

述べ三十万もの兵力をハフマン島へと送り込み、ハフマン島全島の制圧に乗り出した。

「首相閣下、国際社会から今回の紛争に対して非難が集まっています。このままでは連邦が孤立しかねません。」

「だからこそ、あの頑迷な大統領の頭を覚ます為に今回の作戦が必要なのだ。なに、心配はいらん。ステイツもそろそろ限界だ、国民には厭戦気分が広がり各地で反政府デモが起きてるじゃないか。」

「ソレはこちらも同じです首相閣下。お願いです派兵の件どうかご再考を……。」

「くどいぞ、君、既にこれは決定事項なのだ。なぐに、ちよつとばかり灸を据えてやるだけさ。」

陸と海と空の三者が連合してハフマン島全土で全面攻勢に打って出

たこの作戦は、当初ゴツプ首相の読み通りに進み、フリーダム市を攻略、ラークバレーをも手中に収めた連邦は一路グレイロックを目指す。

しかし、此処に来て国連が両者の間に立ち戦闘は中断、事態の解決は戦場ではなく会議場に持ち込まれた。

議会は平行線を辿りあわや再開かと危ぶまれたが、此処に来て常任理事国である中国とロシアが事態究明の為乗り出す。

この両者は、紛争前経済発展によって得たチャイナマネー及びロシアマネーをこの膨大な資源が眠るハフマン島につき込んでいた。

今回の紛争で、利権や資金の焦げ付きを懸念した両国にとって、このタイミングでの調停は是が非でも成功させる必要があったのだ。

折角優位に立った連邦ではあったが、国際社会の後押しのある常任理事国二国相手では、妥協せざる終えなかった。

今回の紛争により、多大な被害を受けたハフマン島は以後国境警備を除き軍の駐留を禁止、国境は紛争前のメール河の境に戻されるも、連邦は合衆国に対し開戦の理由となったルーピディス無差別攻撃に対する賠償金を受け取り、以後ハフマン島は国連の監視下のもとに置かれることとなった。

白騎士事件

世界各国は、拳って宇宙開発に乗り出そうとしていた。

原因は、第七次ハフマン島紛争で時の人となったゴツプ首相の演説から始まる。

「人類は、その余りある消費欲と人口によって地球を食い物にしてきた。私はこのままでは人類は遠からず滅びるだろうと、ハフマン島紛争を目にして確信した。よって今後連邦は全人類の明日の為に今後二十年をかけて宇宙への恒久的生活圏の構築と……。」
ゴツプ首相の言うとおり人類は既にその人口を九十億を突破しようとしていた。

しかし、進まぬ農業改革に大気汚染。

発展途上国の環境破壊と地球の環境の変化により、年々状況は悪化していた。

そんな中、世界最大の組織である連邦が宇宙開発へと乗り出し、その実現の為に国家を挙げて取り組むというニュースは瞬く間に世界中を駆け巡った。

各国で将来的に宇宙ビジネスを盛り込んだ計画がスタートし、より効率的な往還船の建造や研究が盛んに行われることとなった。

その内の一つに、日本が開発するISの姿があった。

IS宇宙空間での活動を目的としたマルチ・フォーマルスーツであるソレは開発当初はさして注目はされていなかった。

何故か？

当時の開発の中心は船外活動よりもいかにして効率よく人や物資を宇宙に運ぶかであった。

その為、宇宙服というのは従来よりもコンパクトな物が前提であり、それほど多機能は求められてはいなかったのだ。

そして、ISは時代を先取りしすぎた徒華として静かに消えていくかに見えた・・・が、ソレを認めない一人の天災により世界は動くこととなる。

そしてそれは突如として起こった。

北半球に存在する日本を射程に収めたミサイル計2341発が日本列島に降り注いだ。

核弾頭こそ含まれてはいないものの、着弾すれば未曾有の被害と経済的打撃、その後の全世界規模での混乱が巻き起こると予想された。

しかし、彼等の予想を意外な形で、それもある種良い意味で裏切ら

れた。

突如として日本上空に現われた一機のIS、通称「白騎士」が日本に飛来するミサイルの半数以上を撃墜。

その姿は世界中の驚愕の的となった。

各国は挙って軍を送り込み、「白騎士」の捕獲ないし破壊を目論んだ。

．．．．しかし、既存の兵器を圧倒する性能を持つISは送り込まれた大量の最新鋭の戦闘機、ヘリ、イージス、戦艦、空母、を返り討ちにし殆ど死者を出さぬという圧倒的勝利を収めた。

此処に来て、世界はISの性能を認めざる終えなくなっていた．．．
．．ただ、一人を除いて。

「やれやれ、天災君は自分とその周り以外を全く見ていないね、それでは勝てないよ。組織という圧倒的なまでの力の前には。」

ゴップは一人、「白騎士」の戦闘模様を映すテレビを見ながら、ソファーに肘をかけ、そうポツリと呟いた。

「白騎士」に撃退され、退却していく艦隊を見て漸くホツと一息を付いたのも束の間、突然全世界放送でゴツプ首相の演説が始まった。

「みなさん、こんにちは。私は地球連邦首相ヨハン・イブラヒム・ゴツプです。既に皆さんもご存知の通り現在連邦の盟友たる日本が謎の「白騎士」と呼ばれる武装勢力によって占拠されています。「白騎士」と呼ばれるテロリストは各国のミサイル基地をハッキングしこれを日本に向けています。つまりは日本に住むすべての人々が人質というわけです。これは極めて重大なテロリズムであり、我国は正義の守り手としてこれを看破できません、よって我連邦は自由と正義を守る為に断固たる態度でテロに立ち向かっていく所存であります。現在連邦の総力を挙げて海軍、空軍、海兵隊、が日本に急行中でありテロ殲滅の……。」

正直言つて又かと頭を抱えたくなった。

先程見せたであろうISの戦闘能力を彼らは知らないというのか？

いや、そうではないな。今なら疲弊しているから組し易いを見たか……私はただあの子を守ればそれでいいのに。

「白騎士」は休む間も無く、じつと南海のほうに目を凝らした。

そうするとハイパーセンサーが捉えた連邦軍艦隊の姿が……。

突如としてISのハイパーセンサーが上空から飛来する物体をキャッチした・・・あれは!?

「大陸間弾道弾・・・だと。クソ連邦め口では平和だとほざきおつて。」

ハイパーセンサーが驚くべき速さで落下中の弾道弾をロックし、荷電粒子砲のトリガーを引く。

地磁気と地軸の関係上真っ直ぐ飛ばない荷電粒子砲は、見事弾頭部を打ち抜き、弾道弾を無力化する。

しかし、ホツとするのにも束の間、今度は海中から飛来したミサイルがIS目掛けて飛び出してくる。

迫り来るミサイルを迎撃する為に、抜刀し切り伏せ、叩き割り、なぎ払う。

それでもミサイルの雨は止まない。

ハイパーセンサーが捉えた戦闘機から発射された長距離ミサイルの群れ、そして海中から迫るミサイルに、上空には多弾頭分裂弾道弾。

四方八方から迫り来るミサイルに、さしものISも溜まらず回避しようとするが、迫り来るミサイルの群れの前に回避スペースを潰され、結局何発かの着弾を許してしまう。

着弾の衝撃に機体を揺らしつつ、絶対防御があるISは搭乗者は絶対を守った。

しかし、だからと言って機体が無事なわけではない。

何発もミサイルの着弾を許せば、それだけでシールドエネルギーを減らす。

ISの能力もエネルギーがあつてこそだ。

「白騎士」は、手に持つ太刀を模した武器、雪片を握りなおし、イグニッション・ブーストを限界まで作動させ太平洋上に出る。

目的は、連邦機動艦隊旗艦、大型空母シルバーランスを撃沈する。

如何に強力な大陸弾道弾や水中発射ミサイル、長距離ミサイルがあるうとも無限ではない。

そして、そのあまりに強力なため味方、艦隊では使用が制限されるはず。

そこを付いて一気に旗艦を落し、この戦闘を終わらせる。

太平洋を音速の速さで飛ぶ「白騎士」は一つ失念していた。

ゴップ首相の言葉を。

篠ノ之束は天才だ。それゆえに他者を解せず、自らの世界に埋没す

る。

得てして天才とは常識や一般人とは違った人種だ、彼女も最初はそれで満足だった。

そう、あの時公園であの少年と会うまでは……………。

天才が外界に興味をもったその出来事は、しかし興味の対象物以外に関心を払えない天才にとって外の世界は苦痛以外の何者ではなかった。

それでも、耐えてきたのは自分の胸の鼓動を高鳴らせる少年の笑顔の正体を知りたかったからだ。

故に天才は、世界を自分に合わせる事にした。

一般人であれば常識を持っている物であれば誰しみが、世界が自分の思い通りになる筈等無く、ただ流されるままにそれに適応していくはずであった。

だが、彼女は天才だ、それも飛びっきりの。

彼女は自分の世界を創るために道具を作った、しかし誰も見向きをしなかった。

だから、天才はこのままではいけないと考えた。このままでは自分もやがて唯の人として埋もれてしまう。

凡人に墮落してしまうことに恐怖を覚えた天才は、ならば世界を変える為に自身を変えねばならなかった。

そう天才から天災に、何者も抗えぬ存在に絶対的なそう彼女は神になるうとしたのだ。

天災は行動を開始した、それこそ気まぐれに恵みを齎せば害も与える存在として。

自身の道具を世界の導き手として仕立て上げ、その舞台を整え後はただ凡人が踊るのを待つのみ。

結果として彼女は大いに満足した。

彼女の作品は世に認められ、世界は彼女の思うが俥になるはずであった。

．．．．．故に天災は困惑する。目の前の事態に、身近に迫った脅威に。

時は遡り、ミサイルの波状攻撃によって洋上に誘き寄せられた「白騎士」は、すっかり彼女の大切な友である篠ノ之束のことを失念していた。

そして、突如として九十九里浜に現われた連邦軍の揚陸艇と、空挺

師団とが政府中枢を占拠し、その魔の手を篠ノ之束にまで伸ばそうとしていた。

研究所に張られた幾重ものセキュリティを突破され、既に彼女の耳にまで銃声の音が鳴り響いていた。

研究員らが弁解する間も無く捕縛され、警備員は連邦の特殊部隊の前にたちまちの内に無力化された。

何故？如何して？如何して神である自分に逆らうのか？

天災には判らなかった。

何故なら彼女は神を語った唯の人であり、人である限り人の心や意思を知ろうともしなかった彼女には、いまの状況がまったく理解不可能であった。

故に天才は身近に迫る危機に対して、極めて原始的な対処を取った。

手元にある予備のISコアを片手に、篠ノ之束は姿を晦ます。

だが、それは彼女特有の人をはぐらかすそれではなく、ただ脅威から逃げようとする少女のそれであった。

「白騎士」は、あと艦隊まで十分と迫った距離で突如として停止した。

そして、何か慌てたように日本へと引き返していったのだ。

その姿に、多くの将兵は困惑するが、ただ提督一人が事前に情報を知らされていた。

そして、追撃は行わず洋上で待機するよう全艦に通達した。

「白騎士」が日本近海で姿を眩ませた後、地球連邦首相ヨハン・イブラヒム・ゴツプ首相は日本がテロの脅威から開放されたこととテロ首謀者及びその協力者の情報を公開。

篠ノ之束を中心に行われていたIS開発グループをテログループと特定し、今回の事件を引き起こしたのは開発主任である篠ノ之束本人とされた。

彼女は逃走し姿を眩ませたが、以後国際的テロリストとして国際指名手配され、追われる身となった。

問題のISだが、大量破壊兵器の可能性があるとして、地球連邦が嚴重にデータを保管、研究員及び研究所は連邦軍に接收された。

またゴツプ首相は日本国首相と会談を行い、今後このような事態が起きないよう地球連邦軍の日本領土常駐に関する条約を締結。

米軍再編のおり、空き地となった旧米軍基地後に連邦軍が駐留することとなった。

ゴツプ首相はISがテロリストに渡る危険性を指摘し、国際的な協力を今後求めていくと最後に締めくくった。

白騎士事件（後書き）

最後にアンケートです。

連邦にISは必要ですか？

感想のほうに皆様の考えをお寄せ下さい。

十年後の世界（前書き）

帰ってきて、感想の返信を送って何気なしに今日のランキングを覗いて見たら・・・な、ななななあああなん、なんと日刊ランキング四位になっていた！！

これまで小説書いてきた中で最高順位です、感激です、涙です。

読んでくださった皆様には本当に感謝しております。

ありがとうございます！！

十年後の世界

地球連邦軍による日本占領は、大きな反動を呼び起こしたが、一番の問題は今回のテロで連邦が得たISに関連する技術の問題だ。

ISを研究していたのは、天災篠ノ之束がいる日本だけであった、その為同じ技術を開発しようにも、天災がいない今ではISのコアを作り出すことさえ出来なかった。

無論のこと、各国諜報部は篠ノ之束を確保しようと蠢くも、ほとんどが彼女の足跡を追う事が出来なかった。

その為、今回の「白騎士」事件で多大な被害と威信を傷つけられた、アメリカ、中国、ロシア、その他を中心とする国々が連邦のIS技術独占を国連で非難。

連邦軍の即時日本からの撤退とIS技術の公開を要求した。

「やれやれ、全く負けたくせに騒ぎおつて、そんなに欲しければ自分達で取りに来ればいいものを。」

ゴツプは執務室に鳴り響くホットラインのコールに、ウンザリとしながら、片手まで政務を片付けつつ、相手をはぐらかしていた。

ですか？このままでは南海をテロリストに明け渡す事にもなりかねません。そうなれば、いったい誰が得をするのでしょうか。」

「……………!!……………?……………。」

「誤解なきように言っておきます、連邦が求めるのは世界の平和と安定です。今回のテロは世界の秩序を揺るがす重大な事件です。だからこそ、今後ともテロの脅威に対抗するために協力関係を……………」

「まあ、その為には連邦は黄海に船を浮かべる用意がありますが……………ええ無論既に大統領はご存知ですよ。大統領はとも懸命な方だ、英断を下された。はてさていったい貴国は何をしてくださるのでしょうか……………」

こうして裏で各国首脳を丸め込みながら、世間では最早ISを巡る戦争か!!と叫ばれていた。

最悪の事態を回避すべく、国連が特別にアラスカで国際会議を開き、事態の解決の糸口を探るように見えた。

だが、実際は常任理事国を手玉に取ったゴッブ首相の脚本どおりであった。

世界的にISに対する危機意識を持たせ、あわや戦争かと思わせて条約を結ぶ。

如何に世界各国が連合しようとも、ゴッブ首相の政治力の前にもろくも崩れ去っていたのだ。

会議は、紛糾するかに見えたが、恐ろしいまでに順調に進み、今後 I S に関する協定が結ばれる。

この、世界の軍事バランスを崩壊させた兵器の扱いについて、極めて穏やかに進んだそれは、「アラスカ条約」という名で全国家が加盟することとなった。

- 1、連邦及び日本が独占する I S の情報の公開
- 2、軍事利用の及び戦闘への参加の禁止。
- 3、軍事利用目的での研究の禁止、今後 I S の研究は新設した超国家機関通称「I S 委員会」に一任。
- 4、今後予想される I S によるテロに対して各国共同で殲滅に当たること。また情報の開示と共有を認めること。
- 5、如何なる理由があろうとも、I S の稼動は特別に認められた場所以外では禁止。宇宙空間への移動展開も禁止。
- 6、年に一度、I S に関する国際会議を開くこと
- 7、どのような国家、組織、機関、企業、を問わずどのような状況であれ I S の取引、譲渡、あらゆる移動行為を禁ずる。

．．．．．

天災が行動を起こす前に手を打ったゴツプ首相はこの結果に一応の満足を示した。

まあ、天災の事だから色々悪あがきしそうだが．．．．。

ゴップは一人会議場に設けられたVIPルームで各国の調印式の様子を見ながら、一人呟いた。

「これで一応IS開発の枷はつけた．．．．後は天を支える柱を作るのみ．．．．か。」

ゴップ首相は立ち上がり、そのまま会議場を後にした。

「アラスカ条約」締結より二年、IS委員会の内常任メンバーの凡そ半分を連邦が占めることで決定した。

連邦により接収された大量のコアは、「IS委員会」の手によって各国に平等に分配され、なおその際コアには所属を示すナンバリングコードが打ち込まれ、これは絶えず人工衛星によって監視され、

ISの不許可の起動や移動を見張っていた。

もし、仮に自国のISが他国に侵入したさい、その国はISを用いたテロ国家として国際社会からあらゆる制裁を受ける事となる。

その為、各国は必死で自国のISの囲い込みに走った。

次にISの本格的な国際研究が行われるが、そこで当初思いもしなかった問題が発生する。

ISは確かに素晴らしい性能を示した。また「白騎士」が実際に見せた戦闘能力はありとあらゆる従来兵器を陳腐化させたが……
しかし。

ISには「致命的」な欠点を抱えていた。

ISは”女性以外に起動できない”、故に軍部は混乱する。

女性の社会進出が果たされたからといって、軍部において同義というわけではない。

未だに多くの軍が男性優位主義というよりも、男性の数が圧倒的に多く女性軍人は極めて珍しいのだ。

また、女性ならば誰でも良いという訳ではなく、ISにも適正というものがあり、これはISコアと搭乗者たる女性との相性の問題であった。

この相性が良いほどISが高性能を発揮し、逆に悪ければ本来の出力の三分の一も出ない。

適正の問題は、年若い女性の程高く、逆に年配の軍に長年いるような女性軍人は稼動するのも一苦労する有様であった。

この結果に各国首脳は頭を抱えたが、それにさえ目を瞑れば、容易に大陸間弾道弾を無力化する戦力が手に入るのだ。

しかし、もう一つ問題があった、それはISコアに関わる問題だ。

条約でISコアは世界共通の財産と定められ、国家が独占することは禁止され、二年単位でのレンタルとされ、その度に莫大なレンタル料を「IS委員会」に支払わなければならない。

この契約は、半年後とに更新期間があり実質資金が用意できなければ折角開発したISも委員会に没収されてしまうのだ。

しかし、ISコア一つにつき、中小国のGDP二パーセント分のレンタル料は余りに高すぎた。

結局ISをレンタルしつづける為に各国は軍の縮小を決定、多くの優秀な軍人が解雇され世界中でその再就職を巡る問題が起こることとなる。

地球連邦首都ダーウィン

執務室でゴツプ首相は各国の研究機関や軍部が蒼い顔をしているのを想像しながら、手に持つ書類を読み進めていった。

「……漸く月にマストドライバーを建設する目途が立ったな。」

「はい、ゴツプ首相。しかしお見事です、まさか連邦が極秘裏に月で基地を建造中というのを悟らせない為にアラスカ条約を利用するなど……。」

傍に立つアンリー大統領補佐官は、ゴツプの手腕に驚嘆の声を上げた。

書類から目を離したゴツプは、なんでもない風に装い

「なぐに、彼等にアメをくれてやったようなものさ。それよりも軍部の問題は怎么样了？」

「はい、軍部では早くから対ISを想定した兵器の開発を進めています。また委員会よりレンタルしたISコアは仰せの通り首都圏から隔離、一切の外界との情報を遮断した極秘研究所で事に当たっています。」

「うむ、大いに結構！！まあ、ちとレンタル料はやり過ぎだったかな？」

「閣下それよりも、今後太平洋、大西洋における各国のシーレーン

の弱体化が予想されますが．．．。」

「それについては既に手を打っている。なぐに、解雇されてあぶれた軍人の困い込みは済んでいるのだろうか？．．．流石に研究者までは手放さないが。彼等には存分に世界でその腕を振るってもらいたいでしょう。」

ゴツプは椅子を動かして窓の外に目をやり、南海の強い日差しを全身に浴びながら、一人ほくそ笑んだ。

「アラスカ条約」締結から四年

ISのスポーツ利用を目的とした世界大会通称「モンド・グロツソ」

が開催される。

このオリンピックク、ワールドカップ、の並ぶ第三の世界競技大会として期待されたこの大会は、実際は研究で得た技術を用いて他国との技術競争による国際社会での発言権増大を狙った、一種の戦争ゲームであった。

ISの移動は条約で制限されていた為、この計画は頓挫するかと思えたが、公海上にメガフロートを建設し、そのドームで行うこと、大会に参加する以外にISの起動を禁止、公平をきする為に性能の制限を前提に初の大会が開催された。

この大会で総合優勝を勝ち取った日本の織斑千冬は世界チャンピオンとして「ブリュンヒルデ」の称号を与えられ、名実共に世界の頂点を極めた。

その様子をまたまたテレビで見ていたゴツプは、大変つまらなそうな顔をしていた。

自国の安全を蔑ろにして、あんなオモチャにうつつを抜かす、各国政府官僚の姿に、ゴツプはため息さえ覚えた。

今回、連邦は自国のISを参加させてはいない、いや出来なかった。表向きは公平をきする為にメガフロートを所有する連邦が本大会に参加する事はあらぬ疑いを持たれる可能性が合った。

本当はISのコアは全て解体され、出たくても出れない状態であったのだが、ゴツプ首相の工作により世界中にその秘密は漏れることはなかった。

「ゴツプ首相、そろそろ授賞式です。会場の方へどうぞ。」

接待係が、そういつてゴツプに会場に移るように慇懃な態度で言うて、ゴツプは

「ああ、もうそんな時間か。わかった直に準備するから待っていてくれ。」

とだけ言い、退屈な授賞式の為に会場に向かっていった。

「はあ、天災が消えから四年……。早く出て来い、お前のおもちゃは惨めな見世物になっているぞ。」

大会が終わり、世界に粗方ISがスポーツとして表向きには浸透した。

しかし、連邦以外の国々は軍事費の大半をISの研究につき込み、弱体化著しい。

その為、アフリカや中東地域では目に見える軍事力の低下を狙ってテロや紛争が勃発、そこにゴツプ首相が極秘裏に進めた解雇された軍人を使った治安警備企業を設立、紛争地帯や情勢が不穏な国に対して軍に変わり治安維持と警備を行うこの企業は徐々にだが、確実

に各国に根を張り始めていた。

逆に連邦は警備企業に軍事費の変わりをさせつつカーペンタリア湾にマストライバーの建設を開始。

既に月の基地と連動して、採掘した資源で新たな基地建設や技術開発などを行い順調に発展しつつ、宇宙進出を進めていった。

十年後の世界（後書き）

皆様沢山の方にアンケートにご協力頂き、ありがとうございました。

結果ISは連邦は使わないけど、一部特殊部隊で使用という結果になりました。

今後ともまたアンケートを実施するかも知れませんが、その時はまたご協力いただければありがたいです。

月面基地（前書き）

昨日消えてしまったものの再度の上げ直しです。

．．．．．はあ、もうこんなこと起きないようにデータ保存はし
っかりやっとう。

月面基地

蒼く光る地球、星星の輝きと、太陽の光を一身に浴びるこの豊かな星は、いま人類によって食い潰されようとしていた。

しかし、そんなことを感じさせないほどの宇宙の姿は、このなにものも一切の生物の生存を拒む環境であってさえ、なお美しく感じられた。

ゴップ首相は、そう往還船の窓から見える光景に目を奪われながら思った。

引力から解き放たれ、自由となったこの身は、まさに人類の最前線に立っているといえよう。

ゴップは月基地に船が収容されるまで、ずっと宇宙^{ソラ}を眺め続けていた。

船が無事基地に降り立ち、エアロックを通過して検疫を済ませたゴップ首相は、基地司令に出迎えられ、早速基地内部の視察に出た。

月の洞窟内部に作られた基地は、今までのクレーター内部に作る基地とは違い、機密性や外の有害な紫外線や放射能を防ぐといった面で優れていた。

基地内部は明るく、空気も清浄で快適であった。

従来の宇宙船のような圧迫感や息苦しさはなく、エレベーターの間からのぞく街の様子にゴップは満足していた。

エレベーターを降り、エレカに乗り込んだ一同は、基地内部や様々な場所と視察した。

この基地は、来るべき宇宙移民に備え、洞窟内部に基地関係者やその家族が住む街が広がっていた。

郊外には二酸化炭素を吸収し酸素を供給する為にグリーンパークが設けられ、住民の憩いの場として親しまれている。

エレカから市民の様子や、街の風景を隅々まで見て回り、ゴップは確かな手応えを感じた。

「上手くいつているようだな、天井がなければ地球の街の錯覚するほどだ。」

実際、基地内部は首都ダーウィンを模した為、非常に緑が多く活気にあふれていた、しかし、いくら洞窟の中とはいえ一日中日の光を浴びない生活はそれだけで体に不具合が生じる。

その為、天井には窓が設けられ、光量を調節しつつ、街に太陽の光を降り注いでいた。

ゴップの最上級のほめ言葉に、基地司令も嬉しそうに答え、

「ええ、これもみな閣下のお力あってこそです。ここ八年間で基地機能は飛躍的に向上し市民の生活もゆとりが出てきています。」

「そうか、まあここは何れ人類の宇宙進出の足がかりとなる場所だからな、市民生活の向上は喜ぶべきことだ。」

ゴツプ首相の一団は、今日の視察の最後に月に進出した国营企業「アナハイム・エレクトロニクス社」の工場に向かった。

「これはこれはゴツプ首相、ようこそ御出で下さいました。私はこの工場の責任者のマーフィン・フィルチです。」

「ああ宜しく、マーフィン君、早速だが工場の案内をしてくれないかな？」

互いに固く手を握り合ったゴツプは、そういうと、マーフィンは直ぐにでもと答え、工場内を走るロボットカーに乗り工場内部を案内していった。

アナハイムの工場はここ以外にも、月の採掘場や建設中の基地やマストライバーにも居を構え、その標語通り「スプーンからスペースシャトルまで」ありとあらゆる物資や製品を加工し、月での生活に無くてはならない存在になっていた。

また、工場製品や採掘だけでなく、ISコアの研究も連邦と共同で行っており、その恩恵が先ほどの往還船や基地内部での快適な居住を実現する疑似重力発生装置やマストライバーや採掘現場での重

機などにその技術が応用されていた。

ここでもまた、IS技術の研究が盛んに行われており、連邦が接収したIS技術と合わせて凡そコアのブラックボックスの三十%の解析が終了していた。

ロボットカーが自動的に工場内部をレールに沿って進み、マーフィンは先頭車両に乗ってゴツプに身振り手振りを交えながら説明していた。

「このブロックは、月で採掘した鉱石の加工、研究を行っており、この基地の年間必要資材の四十%を供給しています。この方法は、先ず採掘現場に加工場を設け、それをここに運び込んで用途に応じて精製し実際の製品を作っています。この方法は長らく学会の方でも……」

しかし、いささか専門的すぎるのでゴツプ以外の付いてきた官僚はチンプンカンプンであったが、ゴツプ首相本人はそんな彼らの様子を見て、小さく笑っていた。

「……ええ、最後になりましたがこの工場の最重要区画とも言っている研究施設に案内します。ここでは月で産出されたヘリウム3の研究や希土類レアメタルの加工精製技術の研究、およびその配合と合金技術の研究。より効率的な作業工程の研究を行います。」

「では、実際にここで研究されている資材をお目にかかりましょう。」

マーティンは、無重力区画が近いいため若干頭の毛が逆立つのを手で

押さえながら、研究資材を運び込むよう作業員に合図した。

しばらくして、トラクターに乗せられた様々な種類の金属が並び、配布された資料に目を通すと、そのどれもこれもが地球では精製できないような金属ばかりであった。

「ええ、まず現在アナハイムの総力を挙げて研究しているこのルナチタニウム合金ですが、月でしか取れない希土類を使用し、何層も重ね合わせるように精製加工圧力を加え、いくつかの試作品が完成しました。この合金は従来にない粘りと強度、耐熱性を兼ね揃えまさに理想の金属となっています。この研究が進めば今後基地建築用の資材や往還船の外部装甲として機能する事でしょう。」

ゴップは目の前の資料と見比べながら、目の前に並ぶ合金に感嘆の声を、内心で上げた。

やっとここまで来たか、後は恒久的基地の建設とマストドライバー、さらには宇宙軍を設立すれば今後の連邦の繁栄は約束される。

だが……問題があるとすれば……。

「質問をいいかな、この資料と君の説明を信じればこれは正に現場に蘇ったオリハルコンだろう。しかし、精製工程の複雑さ、さらには熟練の技術者をもってしても加工の難しさが一つ、それと現在産出されている希土類の量では十分な生産ができないこと、さらには以上の点を合わせて今後研究を進めるに至ってコストの問題をどうするのかだな。」

ゴップの指摘は的を射ていた。

ルナチタニウム合金は確かに素晴らしい可能性を秘めた金属だが、しかしそれゆえに宇宙空間でしか精製できない特殊性と、加工までのコスト、並びに素材の希少性からどうしても大量生産には向かなかった。

「それにつきましては．．．．その、今後とも研究を重ね、解決の方策を探っていく事になります。ああ、いえ別にこれ以上のコストダウンが難しいというわけではないのですが．．．その、やはり今後の技術発展がない限り正直量産は難しいと言わざる終えません。」

その言葉に何人かの官僚が落胆した表情を見せるが、このままでは研究を打ち切られると思ったマーティンは、

「ですが、ルナチタニウム合金を精製する際に得た技術をスピノフする事によって従来よりもより軽量でコストの安い金属を開発できました。」

次に運ばれてきた金属は、縦二メートル、横幅四十センチ、厚さ三十センチ程の金属であった。

それと軽々と手に持ったマーティンは、

「この金属は新開発の発泡金属で、低重力でしか精製できませんが、その代わり軽量性に富み、衝撃吸収素材や工程の容易さから大量生産がきき、今後のスタンダードになっていくこと間違いなしです。」

一人一人手に持って実際に確かめた重さは、確かに軽量を売りにしているだけに羽毛を手に乗せたような感じで、殆ど重さを感じなかった。

「素晴らしいな、これは。強度も十分に確保されているし、これならば宇宙艇の内部装甲や戦闘機の装甲素材としても使える。」

あちこちで感嘆の声上がるなか、ゴツプもこの成果には満足そうな笑みをたたえ、今回の工場視察は大変有意義な時間に終わった。

一週間程の視察を終えたゴツプ首相は、帰りの往還船に乗り、地球へと戻っていった。

帰りの船の中でゴツプは、一人静かに目を閉じていた。

今後の宇宙開発を思い、まず一番に解決させなければならないのは、あのテロリスト篠ノ乃束の事だ。

あの天災の頭脳をもってすれば容易に連邦の目論見に気がつくだろう。いや既に気が付いていてその恐るべき頭脳をもって何を企てていることやら……

今は闇にまぎれて見えないが、何れやつが表舞台に姿を現す時が来るだろう、その時こそあの凶悪なテロリストと決着をつける時だ。

だからこそ、今は力を蓄えなければ……。

ゴツプ首相は極秘裏に地球に帰還し、その一ヶ月後には連邦軍の大規模な増員を行う事を宣言、常備六十個師団を倍の百二十個師団に増設。

海軍の新造艦建設と艦船の改修、空軍は連邦宇宙局と連携して新型宇宙艇の開発に本格的に乗り出した。

この動きを、ISを保有する各国は嘲笑し益々IS開発にのめり込む事となる。

だが、彼らは知らない。

連邦がISさえも凌駕する力を蓄えつつある事を。

そして、それに気づいているのは天災ただ一人であった。

「……いつけないね、連邦のゴツプおじさん。口では平和とか言っておきながらバリバリ軍事国家の独裁者じゃん。ちーちゃん達をテロリスト扱いしておきながら自分はいったい何様なんだろうね? ……やっぱリムカつく。ちーちゃん達を悲しませて何よりも束さんを不快にさせた人には、お仕置きをして上げなくちゃね。」

天災篠ノ乃束は、一人薄暗い笑みを浮かべながら、頭の中で黒い陰謀を渦巻き始めさせた。

この天災の策謀が、あとあとになって現れるとき、いったい世界はどうなってしまうのか?

果たしてゴツプ首相はテロリスト篠ノ乃東の陰謀を阻止できるのか。

時代は急速に動き出そうとしていた。

織斑千冬という人間（前書き）

消えてしまったデータの続きです。

長いので二分割にしました。

織斑千冬という人間

第一回モンド・グロツソ大会から三年。

大会初の内陸ドイツでの開催となった二回目の大会には、各国が三年間の研究成果の粋を集めたISを参加させ、どの国も優勝を狙っていた。

この大会の良いところを上げるとすれば、実力さえあれば優勝し国家の発言権が上昇する可能性が誰にでも与えられているところだ。

事実前大会の覇者織斑千冬を出した日本は、連邦に事実上占領されているとはいえ、開発国の意地を見せた。

そして今回もまた、大会二連覇を狙う日本は、織斑千冬とIS暮桜を駆り大会に参加していた。

．．．．．しかし今回もまた連邦は自国のISを参加させるどころか、まるで興味ないとばかりに政府スタッフを誰一人として大会には寄こしてはいなかった。

各国の威信をかけたこの大会で、あるまじき暴挙であるが、しかし彼らはライバルが一人減ったというだけで、連邦の事など頭から消し去っていた。

大会の控室で、今しがた勝利を掴み取った日本代表、織斑千冬は、頭にタオルをかぶせ、失った水分を補給する為に手に持つチューブを口に含んだ。

長い黒髪と、抜群のプロポーションをもつ彼女が、試合後の汗に濡れてびったりと張り付くISスーツとはだけた胸元に浮かぶ丸い汗の粒が、煽情的な光景を生み出していた。

織斑千冬には大切なものが二つある。

友であり今はテロリストとして指名手配されている篠ノ乃束。

彼女の唯一とっていい肉親である弟の織斑一夏。

この、何者にも代えがたい二人を支えに、千冬はいままで生きてきた。

千冬の両親は、幼い兄弟を残し姿を消し、その無責任さに憤った千冬は、本来ならば孤児院に入るべき所を、弟と二人つきりで帰る親のいない家に住み続けた。

そうして、近所付き合いがあった篠ノ乃家に助けられながら、ある日彼女の運命を決める人と出会った。

そう、天才篠ノ乃東であった。

東は当時すでに天才の名を欲しい俤にしていたが、天才特有の人格破綻から、自分の世界に籠りがちであった。

そんな彼女が肉親以外に初めて外に関心をもったのが千冬なのであった。

彼女と出会い、一目で彼女を気に入った東は千冬と親交を深め、互いに親密になっていった。

そんな時、彼女に第二の転換期が訪れる。

そう、千冬の弟、織斑一夏との出会いだ。

会ったその時から、触れ合った瞬間から胸の鼓動が高鳴り、頬が真っ赤に染まり、息苦しくなった。

彼女は、初めての経験に混乱した。そして、その明晰な頭脳でこの正体を知った。

彼女は生まれて初めて「恋」をしたのだ。

それから、益々彼女は織斑家に入れ込み、二人を喜ばせるために、また関心を引くために様々な事をした。

東が政府の主催の研究機関を立ち上げ、そのテストパイロットとして千冬を指名したのも、どんな時でも二人と一緒にいたかったからだ。

千冬も、幼い一夏を養うために様々な苦勞を抱えていたが、政府認定の公務員という資格と何よりも東が便宜を図ってくれた為、思い切ってこの話に乗ってみた。

それ以来、昼夜を問わずの軌道実験や空中機動演習、様々な実験を重ね家に帰るのが遅くなる事が間々あった。

そんな時でも、一夏は帰ると「お帰りなさい千冬姉え」と言っ出て迎えてくれた。

一夏の笑顔を見るだけで、千冬は仕事の疲れなど直ぐに吹き飛んでしまい、恥ずかしがる弟を連れて一緒にお風呂に入ったり、一緒に布団で眠ったりした。

千冬は、この生活に満足していた。

満ち足りた生活が、このままいつまでも続けばいい、そう考えるようになっていた。

.....しかし、平穩な生活は突然音を立てて崩れ去った。

ある日、研究所での稼働実験をしていた最中に、突如として日本に幾千発ものミサイルが飛来し、日本の防衛能力では半数以上のミサイルが日本に命中し甚大な被害が出ることを東から知らされた私は.....。

ISを強制起動させ、研究所を飛び出しミサイルの迎撃に向かった。

この時気がついていればよかったんだ。

なぜ、このタイミングでミサイルが発射され、なぜ実験中のISがフル装備で待機していたのかを……束だったら私がどんな行動に出るか、容易にわかる筈だ。

だが、この時の私は、帰りを待つ一夏の姿がチラついて、そんな事など考える暇はなかった、ただ、あの子の笑顔を守りたいから、私は……。

無事にミサイルを迎撃した私は、その後逮捕されるのを覚悟で研究所に戻った。

ISの無断国内使用は、どんなに言い訳を言っても、何かしらの罰を受けなければならない。

だが、そんな私の杞憂を裏切るように、研究所で私を出迎えたのは政府の役人ではなく、歓声を上げる研究者や整備員の歓迎であった。訳も分らぬまま、困惑する私をよそに、握手し、感謝され、そのうち私は気付いた。

ああ、私が守ったのは一夏だけじゃなかったんだ。

彼らの笑顔を見ると、私の行動によってどれだけ人々が救われたか……この時の私たちは日本を守れた事を喜び、ともに笑いついてた。

しかし、事は私たちが思いもしない事になった。

各国がISの力を恐れ、連合軍を組み、日本に攻めてきたのだ。

この時の私は、混乱する研究員の中出撃の準備に追われていた。どうして、こうなったのも分らぬまま、ただただ流されているままだった。

そんな時、東が私を呼んで二人つきりになった時に、突然東が謝った、

どうしてこんな事になったのか、正直に事の真相を話し、

自分の作品が認められないのが悔しくて、ミサイルをハッキングした事、

そうして、ミサイルを世界の目の前で撃墜する事によって、ISの性能を世界に示し、ISを認めさせようとした。

計画は上手くいった、でも世界が過剰反応して軍を派遣してきたのだ、そうして私を実戦に駆り出されそうになった時、東は全てを話してくれた。

なんと愚かで、短絡的で、自分勝手な論理で大勢の人を危険にさらした東に、思わず手を上げようとして……

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「．．．．束が．．．．出ていけば．．．．いいから．．．．I
Sなんか．．．．いらぬ．．．．そうすれば、ちーちゃんが戦
わなくて済むから．．．．だから．．．．．。」

泣きじゃくりながら、目を兔のように真っ赤にして謝り続ける束の
姿を見て、この何時も人を小馬鹿にしたような姿しか見せない束が、
今は天災ではなくなただただ自らの過ちを謝り続ける一人の少女でし
かなかった。

私は、上げようとした手で束をギュッと両手で抱きしめた。

驚く束に私は耳元で囁いた。

「私が全部守るから、束も一夏も全部守ってあげるから、だから．
．今は力を貸して、篠ノ乃束!！」

両肩をつかみ、束に真正面から本気の言葉を投げかけた。

そうして、束の返事も聞かずに、ISへと駆けだしていった。

「．．．．ずるいよちーちゃん。そんなこと言われちゃった
ら、束さん本気になっちゃうよ／／／／／／」

別の意味で顔を真っ赤にして放心した束は、しばらく床にへたり込
んでしまった。

IS「白騎士」を出撃させ、迎撃に向かった私は、初めての命のやり取りに躊躇い、防戦一方だった。

しかし、途中から回復した束のサポートもあり、IS本来の性能を發揮した私は、先ほどの劣勢を覆し、次々と脅威を振り払い、

罪の意識に捉われながらも、一夏の事を信じてくれる束の顔を思い、太刀をふるいつづける。

．．．．．気がついたときには、周りに敵はいなくなり、撤退する艦隊と飛行機の姿を見たとき、ようやく私はホッと一息つけた。

束のおかげで、犠牲を出すことなく、撃退する事に成功した私は、

ああ、これでやっと家に帰れる。

と、心のうちで呟き、帰還しようとしたその時……。

「みなさんこんにちは、地球連邦首相ヨハン・イブラヒム・ゴツプです……………」

突如として全回線での放送で、ゴツプ首相の演説が始まった。

ゴツプは、私たちを一方的にテロリストと呼び、日本政府がテロの脅威に晒されていると一方的に決めつけ、テロの脅威から日本を“解放”する為に軍を派遣すると言った。

私は、大切な親友テロリスト呼ばわりされ、何よりも守ろうとした日本を人質にとっているという言葉に激怒した。

「誰が好き好んで弟を人質にするか!!」

声にならない魂の叫びをあげ、束の指示を無視して私は向かってくる連邦と戦った。

でも……………結局、私は何も守れなかった。

国会を占領され、研究所も連邦軍に制圧た私は帰る場所を失った。

束との連絡も途絶えた私は、独断で日本へと戻り、IS「白騎士」のコアを隠すと、当局に出頭した。

連邦と条約を結ばされた日本は、何が何でも束を捕らえようと私を尋問した。

だが、私は友を売り払う事など拒み、ひたすら沈黙を保ち続けた。

何日も、何日も、来る日も来る日も尋問を重ねられ、肉体精神ともに憔悴した私は、それでも話す事を拒み続けた。

このまま私は捕らえられたままなのか．．．．．そう漠然と考え
ている私に、ある日転機が訪れた。

「アラスカ条約」締結によるISの普及が、日本に優秀なIS搭乗
者を求めさせた。

ISを初期から研究に携わっていた私は、当局と司法取引をし、IS
に関する全ての情報を話す代わりに身分の保障と、一定の自由、
そして日本の代表としてモンド・グロツソ大会に出場する権利を得
た。

私は、今以上に自由を得るために必死で戦い続けた。

強くなって、今度こそ全てを守れるようになる為に。

優勝し、ISの頂点に立った私は、ふと一夏との距離を感じた。

私がISに打ち込めば打ち込むほど、一夏がいる家から離れ、たま
に帰る事さえなくなっていた。

無理をして休暇を取った私を、一夏が本当にうれしそうに迎えてく
れた事が、逆に私の胸に刺さった。

しかし、今の私の立場は自由に一夏と会う事さえままならない。

もっと、自由が、もっと力がほしい。

そう願う私に、チャンスが訪れる。

第二回モンド・グロツソの出場選手枠を見事獲得した私は、勇んで大会に出場した。

ただ、今回はもう一つの目的もあった、何かとさびしい思いをさせている一夏に少しでも気晴らしになればと一緒に開催地であるドイツに連れて行き、私の要望も叶って護衛兼監視付きで出国を許可される。

初めて乗る飛行機に興奮する一夏を微笑ましく見ながら、私は大会で順調に勝ち進んでいった。

どの相手も厳しい戦いをくぐり抜けて来ただけあって、みな折り紙つきの実力者だったが、一夏に良いところを見せようと奮起したおかげで、見事決勝戦に進出する事が出来た。

だが、思いもよらない事件が千冬を襲った。

試合を終え、次の試合までに一目一夏を見ようと一夏がいる特別室に向かいそこには……一夏の姿はなく、倒れ伏す警備員がうめき声を上げているだけだった。

この事は直ぐに戒厳令がなされ、極一部の者たちの中でとどまったが、しかし決勝戦進出が決定した矢先のこの事態は、いらぬ憶測は巻き起こした。

千冬は、何もすることができず、不甲斐ない自分を情けなく思う暇もなく、選手室に戻された。

頭垂れる彼女は、もっと一夏の事をちゃんと見ていればと、繰り返
し後悔の言葉を呟いた。

そんな彼女の前に、ドイツの情報局の者と名乗る人物が現れた。

そいつは、一夏の居場所を教えろと言い、代わりに交換条件を出し
た。

千冬には断ることなど出来なかった。

即座に決断した彼女は、条件を呑みただ一心に一夏を救い出すべく
ISを起動させた。

こうして、一夏誘拐事件は幕を閉じ、千冬はドイツに一年間の出向
をすることになったが……。

「以上が今大会で起きた事件の全容です。犯行グループは織斑千冬によつて全員捕縛されたとの事ですが、いまだその目的は判明していません。情報部が背後関係を洗った所、ファントム・タクス亡国機業と名のるテロ組織が実行を仄めかしたとの報告が上がっております。」

執務室で報告を聞いたゴツプ首相は、ただ一言

「御苦労。引き続き捜査にあたってくれ。」

と、だけいい、口を噤んだ。

．．．．．天災の暗躍は認められず、新たな組織の出現．．．．．
．．．。

ゴツプ首相は手元の受話器に手を取り、ある指示を出した。

「ああ、私だ。今回の事件は聞いているな、ならドイツに動きがある筈だ、ドイツのIS研究所関連と軍上層部を洗ってくれ。ああ、ああ、場合によつては介入も考えられる、その場合は少々手荒になつても構わん。やつらの尻尾を掴んでくれ」．．．．．
「わかった、最終的にはそちらに一任する、朗報をまっているぞ。オセロット少佐．．．．。」

「・・・ええ、もちろんです。首相閣下。」

チャ、チャ、チャ、チャチャー、スネークイーター・・・。

メガリス事変（前書き）

東さんやっけてしまいました。

今回の展開で物語りは大きく動き出します。そうして、原作は一体
どうなることやら．．．。

メガリス事変

就任三期目を迎えたゴップ首相は、オーストラリア中部に新しく建造した循環型発電施設、メガリスの始動式に出席していた。

ゴップ首相は全世界を飛び回っていて、政務を怠っているのではとの批判もあるが、それはお角違いというもの。

一年で回りきれぬほど連邦の領土は広大で、それだけ様々な問題を抱えていた。

今回のメガリス訪問も、本当ならもつと前に来る予定だったのだが、度重なる問題の連続に今まで後回しにされ、結局この日までずれ込んでしまったのだ。

屋外での式典の為、壇上が組まれ皆眩しい太陽に照らされて汗を流しながら、式典が始まるのを集まった人々は待っていた。

ゴップ首相もその一人ではあったが、壇上の遮るも屋根のない中汗一つとて浮かべずに平然と式典が始まるのを待つ。

そしてどの位経っただろう、漸く壇上に姿を現した所長から挨拶と関係者からの祝辞が述べられている時に……それは起こった。

オーストラリア上空三万メートルの地点に、全身黒塗りの首がない西洋の甲冑を纏ったような機体が、一機佇んでいた。

吹き荒ぶ大気の奔流の中、微動だにしないそれは、何かを待っているような様子だった。

地上からは米粒より小さい点にしか見えないそれは、近くで見ればまず間違いなくISであると判った。

しかし何故？こんな所にISがいるのだろう、しかも所属国籍を告げるナンバーコードの応答もなく、いやそもそもこの機体はレーダーは愚か衛星にさえ映ってはいなかった。

何者が何を目的としてこのISを送り込んだのだろう、光学迷彩を展開して足元から風景に同化する機体は、徐々に加速をかけながら高度を落としていった。

はじめそれは何だったのだろうか。

メガリスの上空で式典を見守っていた空軍の戦闘機が、目の前を通り過ぎた僅かな揺らぎに疑問を覚える暇もなく、猛烈なスピードで発生したショックウェーブに巻き込まれ錐揉みしながら墜ちていく時、彼ははつきりとその姿を見た、後に語った。

謎の黒塗りのISは、こうして誰にも悟られないまま、メガリス上空にまんまと接近し、そして最早無用と光学迷彩を解き、両腕を突き出してメガリスに向けた。

そして、手のない代わりに四つの砲口から赤色のビームが飛び出し、メガリスに突き刺さった。

崩壊するメガリスと、無表情なセンサーアイが見つめ、今度はその砲口を式典会場へと向けそして……。

『謎の武装勢力式典を強襲!?!』

そのニュースは瞬く間に全世界を駆け巡り、地球連邦のお膝元で起きたこの事件は、各国を驚愕させた。

何故なら近年軍拡著しい連邦は、それだけ絶対の哨戒ラインを持ち、どのようなルートであれ瞬く間に侵入者を発見、排除するだけの実力を持っていた。

だが、今回のテロ事件は、侵入ルートも不明なうえ目撃情報も少なく大勢の犠牲者を出したこの事件は、後に驚愕の事実が明らかとなる。

謎の墜落を遂げたパイロットからの報告により、光学迷彩を展開し

たISが事件当初、メガリス上空にいた事が分かったからだ。

「IS委員会」は直ちに事態の究明を図る為に、全世界のISの稼働状況を調べるも、事件当日のISコアは全て一機たりとも国内を出た形跡がなかったのだ。

委員会は混乱するも、ある噂が鎌首をもたげて来る。

「今回のテロは篠ノ之束が起こしたのではないか。」

最初は誰も信じようとしなかったそれは、段々と真実味を帯びて外交官スジで囁かれる様になる。

ゴップ首相は「白騎士」事件以来反ISを掲げ、ISの兵器利用に強く反発し、事実上ISにテロリストの兵器というレッテルを貼った。

それに怒った篠ノ之束が連邦に復讐したのでは？と考えられたのだ。理由としては、第一に彼女以外に誰がISを誰にも知られること無く目的地まで運び、展開して逃げる事が出来るのか？

第二にそもそも登録されていないISコアを製造する技術を持っているのは、開発者である篠ノ之束ただ一人だけであり、天災と称されるほどの彼女の能力を持ってすれば世界中のコンピューターをハックする事など容易い。

第三にこのような非合理で非常識きわまる愉快犯のような手口を世界規模で行えるのは篠ノ之束ただ一人だという結論に達する頃には、

世界中は彼女に恐怖した。

これでは公然とISを批判したり、彼女の気分を害した場合、最強の刺客が送り込まれる事と同義なのだ。

最早世界は篠ノ之束に、唯の一回の事件で膝を屈するかに見えた。
.....

P i P i P i P i

医療機器の心音を知らせる音なる中で、ゴツプ首相は真っ白で清潔なベッドに横になっていた。

あの時、余りの暑さに急遽屋根を展開した式典会場で、ゴツプは屋根を貫いたビームの後に降り注いだ破片により、頭を強打していた。急ぎ混乱する会場から救出されたゴツプ首相は、救助へりに乗せられ真っ直ぐ近隣の大学病院へと収容された。

手術は無事成功したが、ゴツプは一向に目を覚ます気配を見せなかった。

それから一週間、世界中が謎のISの話題で盛り上がっている中、

病院を移したゴッブ首相ただ一人が、時間の流れから取り残されて
いるようだった。

メガリス事変（後書き）

次回予告

テロにより世界中が篠ノ之束に恐怖する中、最後の希望はその命を消そうとしていた。

国を導き、世界を指導し、人類を新たなステージに持っていくはずであった男は、今．．．散る。

次回、「ゴツプ死す」

IF最終話「ゴツプ……死す。」（前書き）

ゴツプ亡き後の世界を、ダイジエスト風に書いてみました。

これは完全にIFストーリーです。本編とは全く関係がありません。

IF最終話「ゴツプ……死す。」

二月、地球連邦元首相ヨハン・イブラヒム・ゴツプの死亡が報ぜられた。

偉大すぎる指導者の死は、世界中に波紋を呼び、人々は暫し故人の為に黙禱を奉げた。

新首相に選出された副首相は、故人の死を嘆きその演説で

「故人は偉大だった、人類にとって彼の死は何者にも勝る損失であり痛みである。我々は彼の死を偲び、共に彼の冥福を祈って祈りを奉げ様ではないか。故人は長年にわたり世界を導き、テロに屈せずその勇氣と知恵と決断は多くの人々に感動を与えた……。今後彼亡き世界において我々は荒れ狂う波に翻弄される船の行く先を示してくれる灯台を失ったようなものだ。今後私たちは自らの力でこの荒波を乗り越えて往かねばならない……。」

彼の遺体は、連邦首都ダーウィンの国会に運ばれ、盛大な葬儀が厳かに行われ、

世界中から彼の死を悼み、十万人もの人々が彼に分かれの言葉を告げた。

世界中から強い尊敬と敬意の眼差しを受けた故人は、最早物言わぬ軀となって、首相執務室前の広場に葬られた。

新首相を抱いた連邦は、先代の遺志を継ぎ、反ISSを表明。

ゴツプ前首相を暗殺した篠ノ之束のISSによるテロの脅威に対抗するために、地球連邦特別外注組織、「ティターンズ」を結成。

ISSによるテロの鎮圧を目的としたこの部隊は、別名「首相あだ討ち部隊」の名で世界中を飛び回り、新兵器MSを駆る彼らは畏怖と恐怖の対象となった。

その後、複数回行われたISSテロは、その殆どがティターンズによって鎮圧され、その発言権を高めていく。

この頃、連邦の宇宙開発の是非を巡り、国連で富の平等と再分配を叫ぶ声が高まる。

連邦が保有する基地の明け渡しを要求する合衆国ら五大国と、地球連邦は激しく対立し、各所で激しい小競り合いが起きる。

選挙の結果、任命された新たな首相は、今までの方針を転換し、ISSの積極的な軍事利用を開始、連邦初のISS、3・5世代型汎用白兵用ISSガンダムを発表。

これを母体としたガンダムシリーズを次々と生み出していくことになる。

ISの軍事利用が高まる世界の警告を發した「IS委員会」は、各国から毎年受け取るレンタル料の不正経理を告發され、委員会は解散。

以後ISの管理は各国独自の運用に任される。

ゴップの死後から四年、日本で世界初の男のIS適正者織斑一夏が發見される。

その扱いについて、国連では意見が割れ、彼の扱いは宙ぶらりんとなる。

同年、おりしも政情不安定で合った中部アフリカコンゴで内乱が勃發、豊かな自然資源、地下資源を巡る各国と連邦の思惑により情勢は複雑化し、大勢の難民を出す。

一夏IS学園に入学。この月、国連連合食糧農業機関よりあるレポートが發表される。

来年中期より世界人口は百億人を突破し、今後十年間同じスピードで人口が増加すれば百二十億人を突破すると、

そうなれば、今後三年以内に革新的農業改革がない場合五年間で食糧不足が起こり、二十年後から三十年後には、世界的な食糧の不足による飢饉と高騰かが予想される。

このレポートにより各国で食糧の増産と、買い付けによる困い込み

が始まる。

地球連邦もこの年、月での自給自足を確立する為に食糧プラントを増設、以後月の独自性が高まる。

IS偏重より国軍を縮小した各国で傭兵による略奪が問題として浮上する。

これを鎮圧するべき、国連は軍の派遣を呼びかけるが、かえって傭兵と国連軍との間で戦闘が激化。

中東情勢は混迷を極める。

環境破壊が進む地球を離れ、宇宙に新天地を目指そうと地球連邦への移民が増加、移民者による問題で連邦に社会不安が広がる。

アメリカ合衆国、条約を破りハフマン島に軍を派遣、再三の警告を無視しハフマン島で緊張状態が続く。

北アフリカ及びアラビア半島の国家が連合を組み、共同ブロック経済圏による生き残りを図る。

この動きに刺激され、ブロック経済は不当だとしてフランス、イタリア、及びイギリスが地中海に艦隊を派遣、スエズ運河を封鎖。

アフリカ、アラビアで反欧州感情が高まる。

中国、公然とISの軍事利用目的の研究を開始し、各国で非難の的になるが、裏でISコアの取引をしたロシア連邦と繋がり、兵器研究を進めていく。

ハフマン島で第八次ハフマン島紛争勃発。

連邦の国境警備隊増員に対して反発し、極秘裏に持ち込まれたISによって連邦空軍基地を強襲、「アラスカ条約」後初のISの本格戦闘であった。

連邦軍、アメリカ軍のIS使用を非難、テロ国家として認定し国家総動員令を発令、ハフマン島に新型の小型MSを送り込む。

連邦議会、混迷する国際社会を打開する為、連邦による再度の地球統合を決議、賛成多数で可決され、以後月基地でのMS増産と新型宇宙戦艦の建造が始まる。

亡国機業、ドイツを強襲、ISコアを奪い表部隊に姿を現す。

同日篠ノ之束、ISによる人類の新管理体制提案、各国で物議を醸し出す。

連邦はこの提案に強く反発し、ティターンズを増強、全世界での無許可でのテロ鎮圧を法案で可決。

中国、ロシア、日本の尖閣諸島及び樺太に軍を派遣、占領する。

この動きに日本は反発するも、中露軍はISを占領地に派遣して日本を恫喝。

アフリカで食糧問題を起因とする暴動が発生、地球連邦南部への流入を防ぐ為国境を封鎖。

イギリス、イタリア、フランス連合艦隊がカイロに軍を派遣、世界経済を衰退させる国への制裁と称してISを共同で展開し、カイロを同日占領。

中東、北アフリカ諸国、自国のISを集めてカイロ奪還に乗り出すも、戦線は膠着、泥沼の消耗戦へと陥る。

中国、インド、ベトナムへの圧力を強める。

両国は反発し、ISを国境に展開、両軍睨み合いの状態が続く。

篠ノ之束、突如としてヴィクトリア湖のマスドライバーを強襲、システムをハッキングして宇宙へと飛び出す。

そのまま連邦宇宙ステーション、月基地を強襲、連邦が極秘裏に建造していた宇宙艦隊をあばく。

地球連邦は正式に宇宙軍の発足を宣言、軌道上に展開した宇宙艦隊による各国を牽制。

同月、地球連邦地球の再度連邦による統一を目的としたオペレーション「コスモポリタ」発動。

全軍に動員をかけ、一気に世界統一を目指す。

篠ノ之束、連邦の計画を世界の暴露、各国に連合して連邦に立ち向

かうように仕向ける。

地球連邦、初の宇宙軍を投入した作戦で北米大陸東海岸を占領、ホワイトハウスで大統領以下関係スタッフを捕らえ連邦に併合。

各国が対策をとる間も無く、次々と国家を併合していった連邦は、他の国がIS重視により機動力を失ったのを見るや否や、回収したコアの破壊を決定。

占領地で捕獲されたISはコアに戻され再起不能な用破壊されることとなった。

篠ノ之束、ISコアを大量生産、各国にばら撒き連邦に対抗させるも、優先的に先進国を併合していった連邦は、中小国以下を経済的に締め付け、途上国に対しては武力か和平かを迫った。

篠ノ之束、状況を挽回する為に無人ISコアを率いて連邦首都ダーウインの攻略を実行、

しかし、誘き寄せられた篠ノ之束は、激しい抵抗をするも、新型MSZガンダムの前に議事堂に張られたエネルギーシールドによって捉えられ、此処にISは終焉を迎える。

連邦、地球統一の総仕上げとしてイギリスの占領を開始、他の先進国は全て連邦に併合され、イギリスのみを残すだけであった。

イギリス政府、国会で「名誉ある服従」を決定。

地球連邦に政府の全権を譲渡した。

地球連邦はその後八年をかけて世界を統一、その際にI S コアは研究用を残し全て破壊。

篠ノ之束の裁判が行われ、その様子は全世界に放送される。

途中再び現われた「白騎士」が篠ノ之束の救出に出るも連邦のM Sの前に遂に撃破され、搭乗者もろともI S コアを破壊。

その様子を見た篠ノ之束は精神が崩壊、以後裁判は延期されることとなる。

地球連邦、名を人類統一連合に改め首都を戦災から復興したニューヨークに定める。

人類統一連合、地球の増えすぎた人口を減らす為、コロニー建設プロジェクトを立ち上げ、第一号機の建造を開始。

人類の移民の選抜が始まる。

コロニーが完成、この時既に地球の人口は百十億を数えていたが、統一連合の人類統制により混乱なく移民は開始される。

その後、続々と作られるコロニーに移民は送り込まれ、漸く地球が安定する人口二十億になるまで、移民は四十年もの間、行われた。

篠ノ之束、凡そ二十年越しの判決が決まり、百十年間の冷凍保存刑が下される。

史上最悪のテロリストとしてレットテルを貼られたまま、地球で冷凍冬眠に入る。

統一連合による新暦制定、人類支配から五十年、既に各コロニーでは統一連合の支配に対する不満が高まり、彼方此方で暴動が発生。

六十年が過ぎると、コロニーに対しアメとムチの両方の政策を取るも、市民の反感は募るばかりだった。

七十年には、複数のコロニーが連合し、独立を声高に訴え始めた。

この動きは各コロニーばかりか、地球にまで広がり、統一連合と市民との間で、溝が深まっていった。

八十年を過ぎる頃には公然と統一連合を非難し、独立運動が活発化、鎮圧する軍との間で遂に戦争が勃発、

地球とコロニーを巻き込んだ戦国時代へと突入することとなる……。

IF最終話「ゴツプ……死す。」（後書き）

前の後書きが余りにふざけ過ぎていたので修正します。

一応これが一つのENDの形ですが、ご要望によってはまた違った展開にもなります。

これでいい、という方は出ない人は、感想に書いてくだされば、この作品を続けたいと思います。

ゴツプの帰還（前書き）

ええ、誠にお騒がせしましたが、第一話で言っているようにゴツプ首相はあんな程度じゃあ死にません。

では、前回の話はなんだったのか？と、問われれば作者のいつものおふざけで、ゴツプが唯の偉人だったらという設定であんなことになりませんでした。

本当に皆様にご迷惑をかけて申し訳ございません。

今回から平常どおりのゴツプ首相に戻っていくので、何卒お付き合
いの程を宜しく願います。

ゴツプの帰還

．．．．．知らない天井だ．．．．．。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．あれ？フラグ踏んだ？

薄っすらと目を開き、真っ白な天井をボンヤリと眺めながらゴツプ首相は思った。

．．．．．死に底なつたか．．．．。

そう考えていたら、周りかが慌しくなり、

「おおおお、奇跡だ！！ゴツプ首相、わかりますか？お加減のほうはいかがですか？」

見覚えのある顔が、ゴツプ首相の顔を覗き込み、心配そうな表情を

していた。

五十を越えた男の困り顔は、なんだか滑稽な感じがして、ゴツプは逆に急速に現実へと帰還する。

「ああ、大分いいぞ。」

「それは良いことです。いま主治医を呼んできますので、暫くお待ち下さい。」

男は、ベッドを離れ、何事か傍に控えていた側近に、医者と呼ぶように伝えていた。

「……………」

やがて、主治医が来て、ゴツプ首相の容態を簡単に診察したが、結果は良好。

医者は、

「こんなこと奇跡としか言いようがありません。よく意識が回復しました。」

と、ゴツプの驚異的な生命力に、感嘆の声を上げる。

「いや、これも皆、連邦の世界を先駆ける医療技術と君の腕のおかげだよ。皆にも心配をかけたな…………で、状況はどうなっている?」

柔らかい包み込むような笑みを浮かべたゴツプ首相は、主治医が部

屋を後にすると、途端に厳しい表情に戻り状況を側近に問いただした。

「はい、ゴツプ首相が眠ってから一週間ほど経っていますが、現在各国は第二のテロを恐れ声高に反ISを叫ぶ動きはありません。逆に、ISを防衛力の強化という名目で開発資金を増額し、今後益々開発競争が激化するでしょう。」

ゴツプは現状に渋面を浮かべるが、直にいつもの表情に戻り、止める側近達を押し退けて連邦議会議事堂へと向かっていった。

オーストラリア、ダーウィン。

世界最大の勢力と権力を持つこの国の心臓部である地球連邦国会議事堂では、現在纏めるべき首長を欠いたまま、議論が紛糾していた。

「……………だから、今後このような事が起きない為にもISの武装化を……！」

若い議員が、椅子から乗り出して、叫びながら自身の主張をいう。

「我国の方針を今更転換するというのか……そんなことをしてみる。

連邦がテロリストに膝を屈したと思われるではないか!」

中年の議員が、こちらも対面を忘れ去って、激しい口調で反論を述べ、こんなやり取りが国会中の彼方此方で行われている。

中には、気に入らないからという理由で隣同士殴りあうものや、引きずりおろそうとするものなど、乱闘騒ぎ一歩手前の状態だ。

本来ならば、開かれた政府をアピールする為にテレビ中継されることを、この乱痴気騒ぎの中、”自粛”せざる終えなかった。

「そんなことよりも、今回の責任の一端には軍部にもある。これについては何か釈明はないのか。」

比較的マトモな質問も同時に行われているあたり、この国の底力の恐ろしさが見える。

「それについては弁解の余地ありません。今回の失態は軍部のほうにも責任があります。事件発生ご軍のコンピューターを全て調査したところ、僅かな痕跡ながら「白騎士事件」の際、ミサイルを八ツキングした同じ手口が使われていました。残念ながら追跡調査しましたところ、もぬけの殻の家屋が発見されただけで遺留品も何も残されてはいませんでした。」

壇上上がった、参謀本部議長は頭を垂れ謝罪し軍に全面的な非があることを認め、更なる怒号が上がる。

そんな荒れ狂う並みのような議事堂に、いい加減疲れてきたところに、突然議事堂前の硬く閉ざされた正門が開け放たれる。

突然の事態に呆気にとられた議員らは、議長席まで続く長い紅い絨毯を踏締める男の姿に、最初怪訝な顔を浮かべ、次にその横顔を見て言葉を失った。

そこには、本来ここにはいないはずのゴツプ首相の姿があった。

テロにより意識不明の重態と囁かれていたゴツプ首相は、まるで負傷など感じさせぬ歩みで、真っ直ぐ議長席まで歩いていく。

次いで起こったのは割れんばかりの歓声であった。

この国の偉大な指導者の帰還に、議事堂の彼方此方で拍手が上がり、その歓声に答えるように手を上げて壇上に上がったゴツプ首相は、まず手で声を沈め、ゆっくりとした口調で語り始めた。

「此処にいる議員の皆さん、並びにこの中継を見ているであろう全国民及び世界の人々に告げます。私ゴツプは無事回復しこの場に再び戻ってこられたのを光栄に思います。これも一重に、関係者の努力と意思とがこの国に活力を与え、私を此処に暖かく迎える事が出来たのも全て皆様のお力あつてのことです……。」

議事堂で中継で衛星でラジオで、この放送を聴いた全ての人々が固唾を呑んでゴツプ首相の声に耳をそばだてた。

その中には、何も映さない無感動な瞳で議事堂のカメラをハッキングした、篠ノ之束本人の姿もあった。

「……一週間前、正体不明のISを用いたテロにより、私を含め多くの国民が犠牲になりました。今回のテロにより、家族を失ったもの、或いは恋人や友人を亡くしたものもいるでしょう。涙

にくれこれからどうしようかと迷う人もいます。だからこそ、私は、国民に全世界に訴えたい！！これ以上悲しみを広げない為に断固たる決意を持って、決してテロには屈さないと！！」

ゴツプ首相は、無理をして病院を出たばかりの、疲労しきった体に活を入れ、世界に訴える。

額に大粒の汗を浮かべながらも、最後まで壇上に立ち続け語り続けるゴツプ首相の姿は、かのジオン・ダイクンを髣髴とさせた。

「悲しみを怒りを、決意に変え、人類の輝かしい明日の為にも、我々は一致団結してテロに当たることを此処に誓います。……そして、……。」

ゴツプ首相はそこで言葉を切り、一台のカメラに目を向け指を指して言う。

「見ているか篠ノ之束！！これが人類だ、必ずや人の意思がお前を追い詰め、固い団結と決意がお前を決して逃さないだろう。捕らわれ、世界の前でお前が裁かれるその日まで貴様を追い続ける。どんなにISをばら撒こうとも、世界中を混乱させようとも、我々はそれを全て防ぎ、貴様の野望を叩き潰してやる！！ありとあらゆる手を尽くし、三千世界の彼方まで追いつき、必ずや報いを受けさせることを。これは私のひいては連邦の篠ノ之束に対する挑戦だ！！」

激しい言葉で宣言を終えたゴツプは、割れんばかりの拍手と、床を鳴らす音の中、会場全体の声援を全て受け止めるかのように大きく手を広げる。

全世界でこの中継が流れた瞬間、これを見ていた各国首脳人はゴッ

プ首相を無理をして退院したばかりの病人とは思わなかった。

ゴツプ首相は世界を相手に挑戦状をたたきつけた。

現在のIS重視の世界にだ。

各国首脳部は、今後の連邦の動きを鑑み、世界の運命の是非を巡る会議に明け暮れた。

ある一人は言う、

「チャーチル、スターリン、ルーズベルト、と並ぶ巨人が誕生した。」と。

とある某所、

そこで篠ノ之束はゴツプ首相の演説を聴き、不機嫌さを隠そうともせずに、

「いいよ、君のその挑戦を受けてあげる。でもね、最後に勝つのは束さんだよ。．．．．．どんな時だって、束さんは、私は、篠ノ之束は！絶対！絶対に勝ってきたんだ！！」

荒々しく声を上げ、いつもの他人に向ける無表情な顔ではなく、口を歪ませ、目を見開き、眉間に皺を寄せた憎悪の顔そのものだ。

彼女は外界に興味を向ける時の表情は、何時だって何を考えているかわからない笑みと、悪ふざけと考える顔の両方だった。

だが、この日そこに新たな表情が加わる。

「．．．．．いいよ。挑戦してきなよ、但し持てる限りの力を尽くし、万全の策を敷く時間も上げる、それで全力で私に向かってきて欲しいんだ。そうして全力を尽くして、後一步の所までたどり着いたら．．．．．完膚なきまでに叩き潰してあげる。今まで積み上げた栄光も成功も何もかも無に帰して、お前に絶望を叩きつけ、そのうえで”私を”認めるなら許してあげる。でも．．．．．ね、その後にちゃんと殺してあげるよ。だってね束の全人生を否定したんだから、同じくらい人生を滅茶苦茶にして無残な最期を遂げたいいいよね。ね、いいでしょ。だって私は天災だもん、この世界で唯一、世界をオモチャにできるただ一人の．．．．．人間だよ。」

狂ったように、頭を振り笑い声を上げる彼女が得たのは狂気だ。

世界を、全てを混沌に導く彼女の笑みは、一体どんな結末を迎えるのだろうか．．．．．。

ゴッポの帰還（後書き）

昨日はお騒がせして申し訳ありませんでした。

今後は御ふざけ無しで、本編を書いていきたいと思えます。

荒鷲の誕生

ゴッブ首相が篠ノ之束に挑戦状を叩きつけてから二年、

ゴッブ首相は各国を説得し、国連の名の下に執拗に篠ノ之束を追っていた。

幾つかの潜伏先と思わしき住居を発見するも、国家間の問題で後手後手に回り尻尾をつかめずにいた。

その間、ゴッブ首相の宣言で多少落ち着いたかに見えた各国も再びISの開発を活発化させる。

これに対して危機感を覚えたゴッブ首相はある提案を国連で発表する……、

その半年前……。

真夏の太陽が照らすオーストラリア大陸のトリントンに一人の男がいた。

男は自身の執務室で書類を整理していると、突然部屋の電話が鳴り受話器を手に取った彼は、短く返答すると、

受話器を置き、暫く何か考えるそぶりを見せた後に、そっと机の引き出しをあけ、封筒に入った紙を手に取りほくそ笑んだ。

男は、電話があつた一カ月後に政府の者達に連れられ首都ダーウィンにある、とあるホテルの一室にいた。

「やあ、待っていたよ。」

いま、男の目の前にこの国の最高権力者がいる。

五十を越え、若干太鼓になった腹をしながらも、スーツの上からでも判る肉の引き締まりは、老いを感じさせるところか、逆に年齢相応の貴禄と威厳とをこの男に持たせ、若干白髪の間じつた髪も艶があり、一国の指導者として今が脂の乗り切った時期だと感じさせる。

手を差し出し、微笑む彼は、最高権力者としての威厳と畏怖と尊敬とを一身に受けるも、その顔には万人を包み込むような包容力があり、自然とこちらもリラックスして彼の前で何もかもさらけ出してしまうのではないかと思われる。

しかし、握る手から伝わってくる男の熱と微笑む瞳の奥に、こちらを射抜く光を認めたとき、この男が決して権力で此処まで続けていられたのではないと悟った。

「こちらこそ光栄です。ゴツプ首相閣下。」

互いに握手したまま挨拶をし、互いに部屋の中のソファーに向かい合うように座り、他愛無い会話をし、紅茶が運ばれればしその香りが部屋に充満する中、ティータイムを楽しんだ。

そうして、漸く男は本題を切り出した。

「で、首相閣下は何故に一介の中将でしかない私を、こんな所にお呼びになったのです。まさか一緒に紅茶を飲む為ではないでしょう。」

ゴツプは男の言葉に満足そうに笑みを浮かべ、

「この部屋はね、この国の重要な決定をする際、歴代の首相が泊まった事でちょっとした有名な所なんだよ。だから、ここは私が君の言う一介の中将とお茶をしても、なにも問題はないよ。」

どうやら盗聴の危険はないらしい、その雰囲気や態度で察知したのか、ゴツプ首相はまたまた嬉しそうな笑みを浮かべ、カップに口を付けた。

「さて、如何して君が此処に呼ばれたかだね。まあ、私のほうでも君のことは調べさせてもらったよ、中々に優秀じゃあないか。このままいけばじき大将に昇進間違い無しだ。」

「冗談を、私目など唯の基地司令にしか過ぎません。」

「君のその慎重なところも、私は特筆に価すると思うよ、そうだろう、ジャミトフ・ハイマン君。」

.....

暫く互いに無言でいたが、ついにジャミトフの方から切り出すことにした。

「閣下、私目が思うに、閣下が私を呼んだのは、来月連邦議会に提出する新部隊設立の法案についてではないのですか。」

探るような目つきでジャミトフはゴツプ首相を見る。

「ふふふ、君は本当に話が早くていいね。その事もあるが、まずはこれを見てくれ。」

ゴツプ首相は、『最高機密』とスタンプの押された書類をテーブルに置いた。

目でジャミトフに読むよう伝えたゴツプ首相に、書類に目を通し始めたジャミトフはある文章に釘付けになる。

『連邦軍に縛られぬ大統領直轄の特別外注部隊の設立』

他にも、

『国内外を問わず展開するだけの装備と権限』

『ISとの戦闘を想定した装備』

『即戦力を旨とした強兵の徴用育成』

．．．．．e t c

此処最近とある噂が囁かれていた。

ゴツプ首相が不甲斐ない軍部に苛立ち、独自の部隊を設立させると。

その部隊はゴツプ首相指揮の元、世界中を駆け巡り篠ノ之束に対抗する為らしい、とか、ついにゴツプ首相が地球統一の前準備に出たとか、単なる噂話だとか、様々な話を耳にした。

が、目の前の書類は、噂が本当であるということの、動かぬ証拠であった。

「．．．．．これを私に見せてどうしろというのは、ゴツプ首相。」

「なに、簡単なことだ。君は今以上に権力が欲しいのだろう、そし

てISに対して後手に回っている軍部に嫌気が差している。だから私は、君にこの部隊の指揮官を勤めて欲しいのだよ。」

「それはそれは、またとんでもないご冗談を。私目には荷が重過ぎます。」

と、笑って誤魔化そうとするも、ゴツプ首相はクスリツとも笑わず話を進める。

「必要な事項は全てそれに明記してある。何かあれば私に直接言いに来てくれ。」

．．．．．なるほど、ゴツプ首相は私を試しているらしい。

「なるほど、私には逃げ道はないのですね。．．．判りました、微力ながら閣下の為にお力をお貸しします。ですが、最後に二つほど質問を宜しいでしょうか。」

立ち上がって敬礼した私は、姿勢を但しゴツプ首相の話に乗ることにした。どのみち、国家機密を見てしまった以上、話を受ける以外に此処から無事出られる保証などない。

「いいだろう。で、何が聞きたい？」

相変わらず、掴めない笑みをしているが、やはりこのお方には敵わんな。

「何故私を選んだのです。」

一番はこれだ、一体何を思って私を選んだのか。

「まあ、一つはさっき言ったようにその慎重さ、頭の回転の速さと確かな実績を上げている点だな。それに君は政治家とも上手くやっているじゃないか、今度の部隊では何よりもその交渉力がモノを言うからね。あと強いて言うならば・・・カンだな。」

最後に思わぬ答えを聞いた私は、思わず聞き返してしまった。

「カン・・・・・・・・ですか。」

「ああ、カンド、どうもずっと前から頭痛が激しいかったのだが、それが納まってからは何だか頭がスッキリとしてよく働くのだよ。」

「では最後の一つです。この書類によりますと『ISに対抗出来る装備』とありますがこれは一体何を指しているのでしょうか。ISにはISですが、反ISで知られるゴツプ首相がまさかそんなことは考えますまい。」

「ふふ〜ん、折角だ着いてきたまえ、君に見せたいものがある。」

私はゴツプ首相と共に部屋を後に、ホテルの裏口に止まる車に乗り込みある場所を目指し走っていく。

窓の外の見えないリムジンに乗り込んでからの位経っただろう。

今だ目的地につかない私は、じっと目の前に座るゴツプ首相を見ていた。

と、走る車のスピードが緩やかになり、やがて完全に停止するとドアのロックが解除され、私とゴツプ首相は車の外に降り立った。

降りた場所は暗く、車のヘッドライトの光以外何も見えなかった、と、照明が何処からともなくつき、目の前のものを照らした。

そこには、全身を白塗りの装甲が覆う、一体の巨人が立っていた。

啞然とする私の隣に立ったゴツプ首相は、

「これを見せるのは私が特別に許可した者のみだ。名をMS全長1モビルスーツ8m、装甲と動力は教えられんが、今後これが世界をリードしていく事となるだろう。」

私はゴツプ首相の方を向いて、

「首相閣下、貴方は何処まで行かれるのですか。」

「なに、人には可能性がある。私は、それを見てみたいだけさ。」

もう一度振り返って巨人を見た私は、腹のそこから沸々と湧く、マグマのような熱を感じた。

その見るからに圧倒的な存在感と、パワーに、私は例え様もなく惹きつけられていた。

ゴツプ首相、連邦議会に新法案を提出、賛成多数で可決される。ジヤミトフ・ハイマンハその二週間前に除隊、政府特別顧問として姿を見せている。

ゴツプ首相、国連で「ISテロを鎮圧する特別部隊」の設立表明、二年間の捜査の経験から、独自裁量権のある部隊の設立を強く訴え、

「IS委員会」が指揮権を持つということでも可決される。

対ISテロ組織部隊の総帥に元地球連邦軍ジャミトフ・ハイマンが大将に昇進して就任、部隊の運用資金は「IS委員会」が提供するも、会計や予算運営などは極秘とされ、部隊のメンバーは地球連邦軍から選ばれ、装備の九十パーセントをアナハイム・エレクトロニクス社が供給していた。

ジャミトフ・ハイマン大将、国連議事堂で対ISテロ部隊「ティターンズ」の結成を宣言。

以後、国連に変わりISテロ事件の調査及び鎮圧を開始する。

世界初の男

織斑一夏はいま非常に困惑していた。

何故か？

それは、いま彼の現状を見れば分かることだ。

グルリと教室全体を見回した中で、彼一人を除いて、女、女、女、
G i r l、少女、少女、幼女、少女、幼馴染、お姉様、少女、w o
m e n、女性、女の子、女子、女王様、漢、
t c .

はつきり言つて、とても目のやりばに困る。

女三人寄れば姦しい、とは言つが、今の自分はまるでパンダか何か
の見世物だ。

ふと、一夏の頭の中に女男女、という漢字が浮かび上がった。

そうして、もう一度懐かしの、いや決して忘れる事のない女の横顔
を見る。

真っ直ぐとした目鼻立ち、背中まである長い髪を黄色のリボンで結
び、制服の上からでもわかる成長具合。

そこには確かに、彼の幼馴染である篠ノ之箒がいる。

最初、一夏は教室で篠ノ之箒を見つけたとき、嬉しくて声をかけよ

うとしたが、視線を合わせた途端顔を逸らされてしまう。

なんだかそれが無性に悲しくて、大勢の生徒がいる中、教室に一夏と筈が誰もいない教室の中遠く離れ小島のように感じる。

一夏は、ただただため息をつき、頬杖を付いていることしか出来なかった。

世界初の男のIS適正者発見。

それは、衝撃と驚きをもって、世界に報せられる。

しかもそれがかのブリュンヒルデ織斑千冬の弟にして、最悪のISテロリスト篠ノ之束の縁者となればなおさらだ。

各国は彼の取り扱いで国連で揉めに揉めたが、結局「IS委員会」の、

「IS学院に入学させ、その猶予期間中に帰属を決める。」

と表明。

ことISに関しては絶対的な権限を有し、一年前には実行戦力をも持つにいたった「IS委員会」は最早唯の監視調停機関ではない。

確実に独自の意思を持って動き出す、超国家組織になるうとしていた。

自国に取り込もうと躍起になっていた常任理事国や、一部の国家を除き、日和見的态度を取っていた国家は挙つてこの案に賛成をし、次いで決定打となつたのは連邦のハースト次官が賛成票の取り纏めを行つた結果、織斑一夏は日本のIS学園の入学が決まる。

そうして、先にも述べたように、織斑一夏の学園ライフが始まつたのだ……。

……暫くして、副担任の山田真耶が教室に入り生徒達への挨拶と、出席の確認を取つた。

思いつきり出席簿の角で叩かれたから今でも頭が痛い。

しかも、休み時間だというのに、教室やはてや廊下に生徒たちが群がり、俺を見ていて、顔を向けると慌てて目を逸らして、

「あんた行きなさいよ。」「ええ、何はなしていいか分からないし……。」

「ダメよ抜け駆け禁止!!」

などと囁く声が彼方此方で上がっていた。

まるでこれじゃあ見世物だな、はあ、入学早々これかよ……

ん？

筧が席を立った。

真っ直ぐこちらに歩いてきて、俺はなんだか期待に胸を高鳴らせ……
……そうして筧が俺の傍を通り過ぎて教室から出て行ってしまった。

はあ、俺なんかやったかな……ん？

筧が通り過ぎた後に、一枚の紙切れが落ちていて、気になって拾って綺麗に折りたたまれたそれを開いて読んでみた。

！？俺は直に筧を追いかける為、椅子から立ち上がり急いで教室から出て廊下を走っていった。

その時、周りで見ていた女の子が黄色い歓声やなにやらヒソヒソ話をしていたが、俺の耳には入らなかった。

手に握り締めた紙には、綺麗な字で、

『屋上で待つ』

とだけ、書かれていた。

屋上の扉を乱暴に開け、そこには漸く見付かった箒の姿があった。

俺は息を整え、深呼吸して、箒へと近づいて行く。

久しぶりの幼馴染との再会に、此処まで走ってきた以上に、胸が高鳴っていた。

「箒。」

俺がもう一度呼びかけると、フェンスに手をかけ遠くを見ていた箒はこちらの方を向き、その顔と瞳を見た瞬間、俺は悟った。

ああ、あの時と同じ目をしている。

どす黒く濁った瞳には、今にも泣きそうなのに、何かに憤り、怒鳴りたいのに如何していいか分からず、虚ろに迷い、悲しみと困惑、様々な不の感情がない交ぜになった表情をしている。

「箒」

俺はもう一度呼びかけた、ひよっとするとまた昔のような顔に戻るかもしれないと期待を込めて。

でも、箒は表情を変えず、互いに無言の状態が続いた。

.....

沈黙に耐えられなかつた俺は、他愛のない話をはじめた。

「久しぶりだな箒、引越して以来かな。最初この学校に来て驚いたよ、まさか箒がいるなんて、でもやっぱり幼馴染がいて安心したよ。また一緒のクラスになるなんて。」

「……………箒は相変わらず無言だった。」

それにもめげず、俺は話を続ける。

「そう言えば箒の家の道場まだやってるか。確か剣道の大会が最近あったけど箒の所からはやっぱり出たのか?」

そこで始めて箒が何かを呟いた。

「……………」

「え?なんだって。」

屋上の風の音に紛れて、掻き消えてしまったその声を、俺はもう一度尋ねる。

「……………負けた。反則で……………」

漸く聞き取れたその声に俺は驚いて声を荒げた、

「如何して!!何かあったんだ箒、俺でよければ力になる。」

肩を両手で掴もうとしてのを、箒は体を引いて避ける。

「箒?……………」

空を掴んだ手を、ただ呆然と眺める俺に箒は、

「一夏、もう私と関わるな。」

真っ直ぐ俺を見つめる箒の顔は、今にも泣き出しそうだった。

「．．．．なん．．．．だよ．．．．なんなんだよ．．．．それ．
．．．．なんなんだよ!!！」

もう一度箒の肩を掴もうとした俺に、箒は今度は逃げなかった。

「如何してなんだよ!! やっと、やっと会えたのに、どうしてそんなこと言っただ箒!!！」

俺の心からの叫びに、箒はただ、

「お前に何が分かる。」

「お前に一体何が分かるんだ!!！」

両肩を掴む手を振り払った箒は、顔を伏せ荒々しい声で叫ぶ。

「この六年間、お前と別れてどれだけ私たちが苦勞したか、お前に分かるか!!！」

それは箒の魂の叫びであった。

箒の家族は「白騎士事件」いらい、政府の執拗な尋問や監視を受け、外に出ることさえままならない生活。

それに、一度外に出れば、誰しもが「テロリストの家族」という目で見られ、学校では虐めも受けていた。

篤は元々の性格が災いして、周囲から孤立し、学校の先生さえ篤には見て見ぬフリをするばかりか、あからさまに白い目で見る教師もいた。

引越して別々の中学校になったときは、更に酷かった。

周囲に一夏という味方がいなくなった彼女には、本当に一人ぼっちになってしまった。

そうして、少しずつ、少しずつ、染み入るように篤の心を犯していくどす黒い水は、やがては復讐の炎となり彼女を変えてしまった。

「……なんだよ、それ。まるで自分だけが被害者のように言っつて、俺だつてな、俺だつて、あの日からどんな扱いを受けてきたか分かつてるのかよ。」

篤の言葉に激昂した一夏は、屋上だというのに周囲を憚らず怒鳴った。

「学校で友達に避けられ、父兄参観で親達に後ろ指を差されながら、どんなに惨めだったか。うわぐつを隠されるのなんかまだいい、朝学校に行くと、チヨークで俺の机に「テロリストの仲間」なんて書いてるんだぜ。それも毎日毎日、朝早く来て消しても消しても次の日には必ず書かれている。」

「中学だつてそうさ、周りはブリュンヒルデの弟だとか言うけど、皆内心オレ達姉弟をテロリストの仲間だと思っっているんだ。バイト

先も何度も変えた、夜道を歩くのが怖くて家の鍵を閉めてベッドのシーツに包まって震えていたこともある。偶々帰りが遅いと、家の中が荒らされていて、何度も何度もあつてそのたびに警察に言つても簡単な調査だけで無視される。俺はずっと一人だったんだ、千冬姉えもない。誰も助けてはくれない。俺は、俺は、ずっと一人で耐えてきたんだ。．．．．．箒、お前だけじゃないんだ。だからそんな顔をするなよ。．．．。」

引きつった笑みを浮かべる俺に、泣いている箒。

俺達は同じだ、互いに映し鏡のように、そうして壊れてしまった俺達はもう元には戻れない。

「．．．．．終わりだな。」

誰とも無しにそんなことを言う。

「．．．．．私たちは終わりだ。もうこれで．．．．．何もかも全部。．．．。」

互いに同じ気持ちだった。

もう、昔には戻れない、いや、随分と前からそうだったんだ、ただ認めたくなかったただけなんだ。

「箒．．．．．最後に一言だけ．．．．．ありがとう。最後に
お前と会えて嬉しかったよ。」

箒は、無言で立ち去っていった。

でも、俺の傍を通り過ぎた時小さく、

「さよなら。」

といい、走って屋上を出て行った。

俺の耳には何時までも篝の別れの言葉が鳴り響いた。

もっとも近かった俺達は、こうして互いに傷つけあい、理解し、そして分かれた。

最早永遠にこの時は戻らない……………。

クラス代表（前書き）

ー夏君が目覚めてしまいました。

何に目覚めたのかは、まだ言えませんが。

女は別れた男の事なんて忘れるけど、男は何時までも女に未練を抱く。

まあ、ほづきっぱいを捨てるのは勿体無いか W W W W W

クラス代表

「決闘ですわ!!」

その一言が始まりで、俺は今、とんでもない事になっている。

「その程度ですの、私を侮辱したこと後悔なさい。」

四方八方から放たれるビームを、急制動をかけながら回避するも、必ず、こちらの意識の外からの攻撃が当たり、シールドエネルギーを削る。

「うぐっ。」

幾ら絶対防御があるといっても、衝撃はくる、そして、にわか仕込みの技術では、受けた衝撃を流すことは出来ない。

今は、相手が遊んでいる為、保っているが時期落しに掛かるはずだ。

「残念ですけど此処までですわ。最後に私のおきでフィーナーレにさせて頂きますわ!!」

蒼い機体が、手に持つ二メートルはあるかというライフルを構え、逃げようとする軌道を四方のレーザーが潰す、そして……。

箒と別れた俺は、その後の授業もずっと上の空だった。

正直、未練があるか、といわれれば、勿論ある。

「箒……綺麗だったな……。」

身体つきもそうだが、六年間彼女が溜めた不の感情が体から滲み出し、少しクセがあるが、大人の女というかなんと言うか、凄く雰囲気があった。そそられた。

授業中横目で盗み見る箒の横顔は美しく、自分が今までなかった性への目覚めを感じさせる相手だった。

だから、今俺の目の前に踏ん返り返って立つ女には、失礼だがそれ程魅力は感じない。

箒とこれを比べたら月とスッポンだ、相手には悪いが特殊な性癖に目覚めてしまった俺には普通のお嬢様は眼中になかった。

「ちょっと宜しくて貴方。この私が話しかけているというのにその態度はなんですか。」

はあ、そろそろお嬢様のご立腹だ。まあ、金髪たてがみロールもありだが……実弾という意味では大きく箒に差を付けられている。

それに箒はあの黒髪だからこそのいいのだ。白装束に日本刀をもって、彼岸花の簪をつけた箒を想像するだけで胸が熱くなる。

俺は目の前に立つお嬢様の胸を見ながらボンヤリと箒のことを考えていた……。

「いい加減にしてくださいまし、貴方先程から見ていれば授業も上の空で……。」

しかし、この金髪よく喋る、一体どうやったらこんなに言葉がスラスラと出て来るんだか。

呆れるのを通り越して感心してしまった。

今度機会があつたら聞いてみよう。

「……大体この私栄光あるイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットと一緒にクラスというだけでも光栄なことなのに……。」

まだ言うらしい、イギリス人は話が長い、たしか名前はセシリア・オルコットというのか……別に覚える必要もないか。

「大体文化的程度も劣っているあなた方日本よりも優れている……。」

随分と大昔のことを話しているらしい、さてはこの女歴史オタクだな、自分の国のことをここまで褒めちぎる事が出来るのは早々いな、やっぱり此処に来ているだけあるんだな。

「たしかに日本の技術は認めてあげなくもないですが、しかしテロリストを生み出すような、しかもその幼馴染であるテロリスト予備軍の貴方が此処に来ている事すら可笑しいですわ。貴方今直ぐ此処から即刻出て行きなさいまし、「おい。」な、なんですの。」

思わず地が出てしまったが、止まらない。

「俺は、オレ達家族は、テロリストでもその仲間でもない。いいか、その小汚い金髪たてがみに隠れた耳の穴かつぽじってよく聴け。俺は何を言われようと構わない、だが、俺の家族や大切な人を傷つけるような事を言ってみろ。容赦はしない。」

クラス中がシーンとなる中、俺の声だけが響き、セシリアは最初は俺の声に怯えていたが、段々と顔が赤くなり、

「な、ななななな、なんですの貴方。男の癖にその物言いは。いいですわ、貴方のその言葉、この私に対する挑戦状として受け取りましたわ。」

セシリアは高笑いを上げながら俺に指を指して宣言した。

「決闘ですわ!!!」

こうして、俺とセシリアとの間で戦いの火蓋が切って落とされ・・・

「何時まで立っているんだ馬鹿者。とつくにチャイムは鳴っている。さっさと席に着かんか。」

千冬ね．．．．千冬先生がいつの間にか傍にいて二人とも出席簿の角で頭を叩かれてしまった。

互いに話に夢中になってチャイムを聞き逃していたらしい。

はあ、鬱だ．．．．．箒に蔑まれた目で見られながら箒の胸に埋まりたい。

「では、授業を始める前に、クラス対抗戦の代表者を決める。自他推薦でも構わん、自分こそはと思うものは手を上げてくれ。」

また変な単語がでたが、まあ対抗戦と言うんだから運動会なんかじゃなくIS使って戦うんだろうな。

「はい、私織斑君がいいと思います。」

．．．．．What?

「私も。」「あ、それじゃ私も。」「私も」．．．．．以下略。

どう言う事なんだ、クラスの殆どの女子から推薦されてこのままではその代表とかになってしまうのではないか。

しかし、クラス中に鳴り響く机を叩く音で、静かになった教室に、凜とした声が響きわたる。

「待つてください！納得行きませんわ。」

セシリアは立ち上がって胸に手を当てて自信高らかに言う。

「本来ならばクラス代表はそのクラスでトップのものになるもの、
実力成績共にトップで尚且つイギリスの代表候補生であるこのセシ
リア・オルコットこそ代表に相応しいのです。」

おお、おお、いいぞ言つてやれ、俺はこの学園で箒以外に興味ない
から代表なんて面倒くさいのやつてられないよ。

「大体、こんなテロリストの仲間のような男なんかがクラス代表な
んで恥じどころか異常ですわ！この私にそんな不名誉を一年間も味
わえとおっしゃるのですか？絶対に私は認めませんは。」

.....ヤバイな。

千冬ねえの前でテロリストなんて言ったら何が起こるか.....
俺は何時何が起きてもいいように身構えそして、

「それだけかセシリア・オルコット。」

底冷えするような声を出す千冬ねえ、いや千冬さまはそういつてセ
シリアを見る。

流石にこの状態の千冬さまに反論するような胆力を持ち合わせては
いないのか、プレッシャーを浴びせかけられたセシリアはそのまま
椅子にへたり込んでしまう。

「皆も不服はないな、あればこの場で言ってほしい。私は全てを聞き入れ受け止める。」

誰も答えない生徒達、ふと教室の角に眼をやると蹲って頭を両手で抱える山田先生が、

「怖くない怖くない怖くない怖くない。」

などと震えながら結構虚ろで危ない目をして繰り返し繰り返し呟いていた。

うん、見なかったことにしよう。

「だが、セシリアの意見にも一理ある。よってクラス代表は織斑とオルコットの両者の実力で決めることにしよう。では、以上でクラス代表の話を終える。」

千冬ねえ、ちよつと無理やりだけど本当に先生してたんだな。

ふと、横目で見た筈と千冬ねえとが視線があつた気がしたが……
気のせいだろうか。

二人とも直に視線を逸らしたように見える。

……一体なんだったのだろうか。

クラス代表（後書き）

本当はセシリア戦まで書きたかったんですけど、明日も学校があるのでやめます。

すれ違い（前書き）

今回は非常に実験的な内容になります。

ヒトの心を一方的に描写しようとした実験なので不快に思われる方もいるかもしれませんが、そういった方は読むのを止める様におすすめします。

すれ違い

セシリアと一悶着があり、結局クラス代表をかけた勝負を来週行うことになってしまった。

その後の授業は問題なく行われたが、相変わらず俺にはチンプンカンプンだった。

放課後になり、授業を終えた俺は、今日色々とありすぎて疲れた体を一刻も休めるべく教室を出て、

巨乳に出会った。

いや、失礼。山田先生に呼びかけられて思わずその豊満な母性を凝視してしまったのだ。

うん、俺は悪くない。

それには気がつかない山田先生は、一人？を浮かべ、俺が何かと尋ねると、

どうもこの学園は全寮制で既に俺の荷物は部屋に届いていて家はもぬけの空らしい。

俺は入学する一週間前に、久しぶりに帰ってきた千冬姉えからIS学園に入学するさい、全寮制だから寮に持っていく荷物をダンボールに詰めておけと聞いたのを思い出した。

何でも後で宅急便で送ってくれるらしいがもうついたのだろうか。

その後、荷物は事務室に届けられていることと先にルームメイトに挨拶しておくということでルームナンバーキーを受け取った。

さて、一体誰がルームメイトなのか……………。

寮に入つて、寮母さんに挨拶をした後、色々と案内されながら、俺がこれから三年間お世話になる部屋の前に来ている。

ルームキーを入れると、直に違和感に気付く。

空いてる……………。

無用心だなと思いつつながら、念のためノックをしてからドアを開けた。部屋の中に入ると、広々としていて一学生の部屋としては豪華すぎるものだ。

まあ、それだけ世間的にIS学園の生徒が優遇されているからだろ

う。

部屋の入って直右側には自炊が出来るようにか、冷蔵庫とコンロがあり、戸棚には綺麗にお皿が片付けてあった。

男の俺を意識してか、ダブルベッドの間には仕切りがあり、互いのプライベートスペースを確保してしてくれた。

欲を言えばこれを個人で欲しかったが．．．学園の決定では従わざる終えないな。

一先ず鞆を使われていない机に置いた俺は、荷物でも持ってくるかと後ろを向き．．．タオル一枚巻いた箆と出くわした。

互いに硬直して見詰め合ったまま立ち尽くす。

．．．．．

無言のままお互いに目を逸らせない状態で遂に我慢できなくなった俺は、

「や、やあ、箆．．．さっきぶり．．．。」

何とか搾り出すようようにして声を出して俺に箆は最初驚いた顔をして、そして今の自分の姿に気がついたのか段々顔が赤くなってきた。

「ど、如何してお前が此処にいる！！答えろ一夏。」

行き成り俺に掴みかかってきた箒は、タオル姿なものにも関わらず俺を問い詰めた。

「千冬先生の差し金か？私を監視しようとするのだろ！！そうに決まってる、お前まで私を疑うのか、答える一夏！！」

訳も分からぬまま箒に怒鳴られ続ける俺は、箒の目には別の感情が浮かんでいるのに気付いた。

「どうして、どうして私を一人にしてくれないんだ．．．．．どうして．．．．．どうして．．．．．わたしは、優しくされる資格なんてないのに．．．．．どうして。」

ああ、今分かった、箒は壊れてなんかいなかったんだ、いや壊れたフリをしてきたんだ。

そうでなきゃ耐えられなかった、俺とは違い箒はずっと耐え続けて来たんだ。

俺は随分と前に壊れてしまったな、何時だろう、そう昔でもないはずなのにどこか遠くに感じる。

「箒、その、また合えて嬉しいよ．．．．．本当に。」

いつの間にか手を離していた箒に、俺はそんな場違いな言葉を言いつつも、なぜか箒を抱きしめていた。

ビクッと体を震わせた箒を優しく包み込みながら、俺は箒の耳元で囁くように、

「そんなことない、箒は今まで頑張ってきたんだ。俺はそれを知っている、だから”俺だけ”に甘えていいんだよ。」

逃げ出そうと胸を叩く箒をギョツとにさらに力を入れ、

「箒がどんなこと言われようと、俺はずっと箒と一緒にいる。昔のことを忘れるなんか言わない、だけでも今だけは俺を見てくれ箒。」

だが箒は小声で支離滅裂なことを言いながら泣いていた。

ああ、いいよ。

箒が目の前で壊れていく。

俺は今までイジメを受けてきた分、どうすれば相手が壊れるのかわ知っている、そしてそれが堪らなく快感になっているのだ。

さっき分かれたばかりなのに、今こうして優しくされて、抱きしめられて、いま箒は罪悪感と安堵と混乱と今までのことが頭の中でグルグルと回っている。

泣きながら逃げ出そうとしながら、でも本気で逃げようとせず、こうして何時までも何時までも堂々巡りを続ける。

そして、そのうち箒の弱ったガラスの心は、音を立てずにひびが入っていく。

もっと泣かせたい、もっと箒の色んな表情を見たい、そして、俺の目の前で壊れればいい。

だから箒、今は俺に依存すればいい。

俺は箒の全てを受け入れる、そうして箒が俺に全てを曝け出し箒の全てをモノにしたとき、全部ぶち壊してやる。

だから今は箒の好きにさせる。

俺に抱きつき、泣き続ける箒はを俺はずっとずっと受け止め続けた。

すれ違い（後書き）

次回から本編に戻ります。

今回は大変見苦しい文をお見せして申し訳ありません。

繁栄の光か、それとも灼熱の太陽か

トレノフ・Y・ミノフスキー

後の物理学会に革新を起こすこの男は、当初科学者としては無名であった。

彼が長年の研究の末安全で安定した核融合炉を確立する理論、ミノフスキー物理学を提唱するが、従来の定説を覆すそれは学会に受け入れられず、さらに実際にミノフスキー粒子が未発見であった為、彼は「現代に蘇ったエーテル理論者」と揶揄され学会を追放され拳句の果てに研究論文さえも抹消された。

失意の中、細々と研究を続けていた博士に転機が訪れる。

ある日、突然黒塗りの車に乗った男たちが彼の家に来てこう言った。

「地球連邦の科学アカデミーに参加しないかと。」

私は、最初疑っていたが、男たちが示す条件の破格さと何よりも書類にサインしてある地球連邦首相ヨハン・イブラヒム・ゴツプの名が決めてとなり、私は祖国ロシアを捨て、遠く南半球オーストラリアへと旅立った。

そこで私を待っていたのは、当の本人さえ困惑するほどの歓迎振りであった。

こうして、私は南の暖かい地で、無制限とさえ思われる研究資金に大学一個分の敷地に相当する研究施設と大勢の助手達、更に極め付きは研究機関の制限はとくには設けないという点だ。

私は、ここで今まで碌に出来なかつた研究を心行くまでする事が出来、優秀な助手たちが熱心に私の声に耳を傾け、何よりも時間を好き放題使えるとなれば、ここは正に研究者達の天国。

それに溺れる私は、一心不乱に研究に全精力を傾けた。

だが、私は研究に行き詰ってしまった。

連邦に来て二年、ここには潤沢な資金もある、最高の設備に優秀な研究者もいる、だが足りないものがあつた。

そう、核融合炉の燃料として期待されるヘリウム3だ。

嘗て米国が世界最大の産出国として莫大な量を貯蔵していたが、二十一世紀後半には全てを吐き出し、その後のヘリウム3の値段はうなぎ上りだ。

私は、幾ら契約で時間は無制限とはいえこのままでは研究が立ち行かなくなるのではと恐れたが、しかし、それは杞憂に終わった。

ある日、研究所に大量に届けられたヘリウム3に私たち研究者は沸き立った。

一体これほどの量を何処から？

誰もその疑問には答えられなかったが、兎に角是で研究が続けられる。

後のことは怖いくらいに進んだ、もう何もかも不足しなくなり実際に核融合炉の実機を作る段階まで足掛け二十年はかけたが、そのうちの十五年間は祖国ロシアでの基礎研究に費やした。

此処ではいくら失敗してもいいが、今回はモノが違う。

最悪、漏れ出した放射能や核融合炉の暴走によって地球に穴が開く危険性すらあった。

融合炉に火を入れる前日は、私は恐怖にうなされ満足に眠ることさえ出来なかった。

何度も何度も爆発の恐怖に怯え、地球が破滅するのではと幾度となく想像し、そのたびに実験を中止しようかと何度も迷った。

が、研究所の所長からの答えは、予定通りのやることと当日は地球連邦首相自らも足を運ぶとうことだけだった。

そうして、実験当日、多くの研究員や政府高官らが見守る中、ゴッブ首相も姿を見せたときは心臓が止まるかと思った。

だから、私は管制室には戻らず、作業着を着てずっと融合炉に張り付いていた。

「実験開始カウント入ります・・・五秒前。」

アナウンスの放送が入っても、私はじつと五重の格納容器の中に入

った核融合炉の本体を、窓からじっと覗き込んでいた。

何か異常があれば直にでも実験を中止するつもりで様子を見守っていた。

「核融合炉の起動を確認、各種センサーに異常なし、経過良好、エネルギー上昇率想定範囲内です。」

アナウンスの声が実験室の中に響くなか、管制室では各種の計器を覗き込む研究者や所長が落ち着きなく動き回っていた。

「炉心温度は。」

「今のところ予定……………！？融合炉内のセンサー検出が不可能、故障かいや。」

「何事だ！！」

炉心内部を観察していた研究者が突如として異常を発見したのを察知した、所長が近寄り、何事かと問い詰める。

「判りません、突然炉心内部のセンサー機器がシャットダウン。一部経路にも不安定な状態です。」

「一体なんが起こったんだ……………。これを博士は？」

「博士はずっと炉心に張り付いているのでこちらの話は聞こえていません。内部に異常が確認されない以上博士が動くことはないはずですが……………」

所長は額に落ちる汗を拭い、そのまま監視を続けると研究者に小声で言って、何食わぬ顔でまた管制室をうるちよろし始めた。

管制室の会話を知らないミノフスキー博士は、ただただ窓から炉心に異常がないか見つめ、手元にあるブレイカー目を落とし、何時でも落せるよう手にかけた。

「炉心温度安定、各種センサーも正常の数値を示しています。」

アナウンスの声に漸く一息つけたと思っただ後に、直に所長が、

「これから核融合炉の最大出力を試す。皆辛いだろぅが後一息だ、頑張ってくれたまえ。」

周りが気を引き締めて自らの仕事に再度励む中、ミノフスキー博士ただ一人が、じっとその場を動かさず炉心を見続けた。

ふと、その肩をたたくものがあり、共同研究者であるイヨネスコ博士が、

「余り気を張るな。このまま行けば実験は成功するだろぅ、だが、君がそんな顔をしてどうする、それでは同じ研究者仲間も気を張って仕方がない。ここは、いつもの君らしく余裕のある態度でいてくれ。」

イヨネスコ博士はそう言って肩を叩き、自分の持ち場に戻っていった。

.....ありがとう、イヨネスコ。

そこで振り返ったミノフスキー博士が見たのは、皆拭えない汗を拭おうとして防護服の上から手で拭くものや、血走った目でモニターを見つめる研究員。

危ない足取りで作業を行う彼等を見ると、自分だけではないといった感情に包まれた。

そして、管制室の窓から覗くオペレーターや研究員の働く姿を見みで、ミノフスキー博士は、自分に活をいれ、名残惜しそうにしながらも炉心から離れ、実験室の指揮に当たった。

「炉心温度急上昇、出力上昇．．．．．凄いい理論値を大きく上回ってる。」

「これは．．．．．やったのか？しかし炉心内部の正確な情報が取れないのが痛いな。」

「！？更に上昇、従来の原子炉の三倍の出力です！！炉心温度上昇も停止、やりました実験は成功です！！」

その声に、研究者達は今までの苦勞が報われたことを知り、互いに抱き合い、祝福し、中には泣き出すものまでいた。

生みの親であるミノフスキー博士も、実験の成功に今までの重荷が降りたのを感じ、ただ呆然と立っていた。

すると、イヨネスコ博士が前に来て、無言で笑いながら手を差し出し、それに答えたミノフスキー博士は互いにガツシリと手を掴み、実験の成功を祝った。

こうして、この日の実験は成功し、続けて行われた耐久試験や動作試験など様々な試験を行いその全てに成功を収め、此処に人類初の核融合炉が完成した。

その様子は、見ていたゴツプ首相は所長と研究員等を満面の笑みをもって祝福し、人類史上に残る快挙だと褒め称えた。

こうして、彼等の偉業は歴史に残るのかと思われたが……。

「納得いきません、学会の発表しないのですか！！説明をしていた
だきたい。」

念願かなって自分の研究成果を漸く世間に示せると思った矢先に、
政府から公開に対してストップがかかったのだ。

ミノフスキー博士はこれを不服として、研究者なら誰でも思い浮か
べる自らの成果を世界にしらしめたいと思っ心踏みにじられたと
思ったのだ。

だが、実際は違った。

「まあまあ、落ち着きたまえ。私とて君達と同じ研究者の端くれ
だ。だがこれはトップオーダーなのだ、我々では逆らえん。」

所長は今日何度目にかになる突き上げにウンザリとしながら、ため
息を吐いた。

「だから、どうして政府が我々の自由を拘束するのか、それを説明
して頂かない事には、私にも考えがあります。」

ミノフスキー博士は、彼と意を同じくする研究者と共に書いた連盟の辞表を取り出した。

「．．．．．本気なんだな？」

所長が探るような目つきで博士を見る。

「ええ、本気ですとも、少なくとも私はきちんと説明を頂かないことには、此処を出て行きます。」

「本気でそれが出来ると思っているのか．．．．．仕方がない、特別に君だけに教えよう。ただし他言は無用だ。」

無言で頷く博士に、所長はある書類を取り出して博士に見せた。

「これは．．．．。」

無言で読み進めたるよう所長が目で促し、手にとってめくったそれにはこう書かれていた。

『ISコア同士のネットワーク構築の有無に対する見解』

．．．．．IS研究所？たしか連邦は公のIS研究機関は存在しないはずだが．．．．。

無言で読み進めるなか、部屋の中には書類をめくる髪音だけが響いた。

そうして、最後まで読んだ時、私の心のうちにあったのは驚愕と嫉

妬だった。

「その書類には何が書かれているのか君ならわかるな？」

無言で呆然とする私に、所長は言葉を続ける。

「ISCコアは各国でも研究が進んでいるが、実際にコアを解体し解析するという研究を行っているのは連邦だけだ。まあ、そうだろうな、他所の国にとっては金よりも価値のあるコアだ、下手に傷をつけることなんかできん。その点連邦は容赦のかけらもなくコアを解体して研究資材に使ってしまったがね。」

所長はポケットからライターを取り出すと、胸のポケットからタバコケースを取り出し、「君も吸うかね？」と差し出すが、博士は首を振って断ったので、一本だけ加えて火をつけた。

..... 暫く部屋の中をタバコの煙の臭いが漂った。

「研究の結果、まあ日本から接收したデータもあり解析は順調に進んだが、その中でIS間どうしを繋ぐ情報通信ユニットを発見した。解析してみた結果驚くべきことに世界中の全ISCコアが並列で繋がっており、独自の通信網で情報のやり取りや互いに成長の促進を行っているらしい。」

そこではじめてミノフスキー博士が反応し、

「ISCコアの成長ですか？しかもコア同士の情報のやり取り.....
まさかISCのコアには独自の意思があるのですか。」

「そこまではまだ判らん。だが従来のAIなどでは説明のつかんこ

とをやつてのける以上その可能性も否定は出来ん。問題は此処からだ、我々でさえコアどうしのネットワークを発見することまでは出来たが、肝心の内容が未だに解析できん。どうも特殊なプログラミング言語を使っているらしくてな、従来の解析ソフトでは解読できんのだ。そしてな、コアネットワークを追つて行くと、必ず情報が一点に集中することを発見した。」

所長は言葉を切り、タバコの灰を灰皿に落としてから、再び鼻から息を吸い込んだ。

「我々はそれをクイーンと名づけた。ISコアの頂点に立つという意味でだが、こいつはどうもしょっちゅう場所を移動していて唯でさえ解析不可能なのに、場所も特定不可能なのは手が出せん。だから、連邦情報局とIS研究所が共同でダミー情報を複数コアネットワークに流し、居場所の特定を図ったが、そのうち幾つかがクイーンに届き、居場所を特定する寸前までいって……突如としてコアネットワーク通信の形態が変わり、従来のシステム、アクセス方法では情報を送れなくなった。再度方法を変更して送つても、類似のニセ情報は直さま排除され、結局居場所の特定は出来ず、より困難な状態になったのみだ。……だからこれは可笑しいと考えた。幾つかの実験で情報を流しクイーンに伝わった情報が最低でもネットワーク全体にフィードバックされるのに最低でも一週間ほどの時間がかかった。しかし、今回のニセ情報はクイーンに届いた瞬間対処がされ、尚且つ同じ手を通じないようにより複雑化したネットワークの構築。これ等の構築まで僅か二時間だ。故に情報局はクイーンに直接アクセスでき、尚且つ情報の真偽が特定可能でコアネットワークの情報解析、及びその改変が可能な人物を探し出し、一人の人物を特定した。」

「篠ノ之束ですね。」

ミノフスキー博士が搾り出すような声で言った。

その顔は苦渋に満ち、普段の彼らしくなく眉間に皺を浮かべていた。

「そうだ、ISの産みの親にしてコアの唯一製造可能な人間。篠ノ之束彼女以外に考えられない。そして是が何を意味するかというと世界中の情報や出来事がISのコアネットワークを通して奴に伝わり、国家機密でさえも、篠ノ之束は容易に手にする事が出来る。いわば彼女は世界規模でカンニングをしているのだ。開発に携わった科学者達の努力を嘲笑い、その成果を知らぬうちに盗んでいく。だが、もつとも恐ろしいのは、奴が全ISコアに一定の指示を下せるという点だ。奴が一度命令を下せば世界中のISが人類に牙を向き、世界は奴に膝を屈するだろう。」

そこまでいい終える内に、すっかりタバコは短くなり、燃えた灰が垂れ下がり今にも落ちそうであった。

暫く所長室に沈黙が続いたが、ミノフスキー博士が、

「所長の言いたい事は分かります。私も同じ科学者として篠ノ之束にシンパシーを感じてはいましたが、今回の事で彼女が唯のテロリストで盗人だったという事が分かりました。しかし、それが一体全体どうして私の研究を公開しないことに繋がるのですか？」

「……………今研究を発表すれば各国は挙って技術の公開を迫るだろう。年々厳しくなる地球環境にエネルギー問題を一気に解決する発明だからな、手段は選ばんだろう。そうなれば博士の身のも危険が生じるが、問題なのは国外に流出した技術がISコアのネットワークを伝わってクイーン、篠ノ之束に伝わってしまうことだ。そ

うなればどういう結果になるか．．．．君には分かるだろう。」

「テロリストが核兵器を自在に製造し、それを使用できる。篠ノ之束程の天才ならば設備と資金さえあれば容易に完成させられるでしょう。製造に必要なヘリウム3は各国に貯蔵されている分を奪取すれば容易に足りません。そうなれば、ISを使った核特攻兵器の完成。世界は最後の審判を迎える．．．．それが連邦上層部のストーリーですか。」

「ああ、そうだ。連邦はテロリストに核に技術が渡るのを恐れている、いや、今以上にISが進化することを恐れているのだ。核融合炉が完成しなくても、その技術があれば今まで以上にエネルギーを得られ、大量破壊兵器の搭載も可能になる。そうなればお互い殲滅戦は必至だ、言うまでも無く地上にいる人類は死滅するだろうな。」

タバコは既に灰皿に押し付けられ、所長の口には新しいタバコが加えられていた。

「．．．．私が完成させなくても、時間があれば天災がいずれ完成させるでしょう．．．．。」

「そうなったときはその時だ。私たちにはどうすることも出来ん。さあ、全ては話したぞ、研究に戻りたまえ。」

所長に手で追い払われた私は、誰にも言えない秘密を抱えつつ、学会を追放された時のように、失意の中廊下を歩き続けた．．．．。

その後、幽鬼に取りつかれたかのように研究に打ち込み、核融合炉内に発生する特殊な電磁壁、ミノフスキー粒子を発見し、博士の提唱したミノフスキー物理学の正しさが証明された。

しかし、彼等の功績が報われるのには、長い、長い、時間を必要とした……。

繁栄の光が、それとも灼熱の太陽か（後書き）

これから更新スピードを落として（随分と前にそうなっていますが）
一日に一回の更新とさせて頂きます。

前のように一日に二回も三回も更新出来なくなってしまつて申し訳
ございません。

クラス代表決定戦前（前書き）

今回一部に露骨なシーンが入るかもしれませんが・・・。

やっぱり原作だけノクターンに移した方がいいかな。

クラス代表決定戦前

数千もの観衆の中、まるで古代の剣闘士の様に、俺とセシリアは戦い続ける。

楕円形のコロシウムを覆うシールドが、観客への被害を防ぐという目的以上に、俺達二人が逃げ出さないように囲っているように見える。

此処から無事、出る為には俺が相手の喉に剣を突き刺すか、或いは心臓を銃で撃ちぬかれるかのどちらか一つしかない。

長い二メートル以上の刀を構える俺に、セシリアの周囲に浮かぶビットがその砲門を俺に向けビームを放つ。

一つのビットから、最大三条ものビームが放たれ、外側に向けられた砲門が、俺の逃げ道を塞ぎ、もう一つのビットからの一撃が俺の予測回避ポイントへと放たれる。

イクニッション・ブースト
が、イクニッション・ブースト 瞬間加速を使い、無理やり射線軸から逃れ、セシリアへと突貫しようとしたその直後に、

「くっ!!」

背後からの一撃で体制を崩し、その隙に距離を開いたセシリアとビットからの攻撃で又しても状況は振り出しに戻ってしまった。

……残りシールドエネルギーも少ない。けど、このままじゃ……

ふと、セシリアではなく、アリーナの観客席へと目を向ける。

ハイパーセンサーで捉えたそこには、祈るように手を組み、顔を真っ青にして今にも泣き出しそうな顔の箒がいた。

「……………一夏……………」

観客席とアリーナ内部とを分けるシールドで、観客席の声は聞こえないはずなのに、俺には何故か箒の声が聞こえた気がした。

「へっ……………カッコ悪いいな、俺。何が箒は俺のもんだ……………女におぶさってばっかじゃ、情けない。」

と、ハイパーセンサーに反応があり瞬間的にその場を離れた直後に、一条のビームが先程まで俺がいた場所を打ち抜く。

「あら、余所見とは余裕ですことね。でも、そんなんでも宜しくて？ なんなら今からでも手加減してあげましょうか。」

口に手を添えて笑うセシリアだが、目だけは獲物を射抜く猟師の様に鋭くキラキラと光っている。

「へっ、冗談。あばずれなんか手加減してもらうほど、俺は柔じやないぜ。」

シールドエネルギーは半分を切り、余裕がないのに笑ってみせる俺に、セシリアはカンに障ったのか、先程までの余裕の笑みを止め、真剣な表情で、

(それこそ俺を殺しかねないような視線で)

ライフルを構え、ビットを更に二機放出する。

「……………遊びはここまでよ。私を本気にさせたこと……………身をもって思い知りなさい!!」

先程までとは気迫も、感じる圧力も段違いで違うセシリアを前に、俺は不適に笑ってみせる。

そうして、刀を構え、一言、

「ぬかせ。」

その瞬間にセシリアからのビットが火を吹き、俺の振るう刀と真っ向からぶつかった……………。

時は遡り一週間前。

あの後、箒とくんずぼぐれつとなつて、ベッドに箒を押し倒し、シヤワーで汗を流した後の箒の体の臭いを鼻一杯に吸い込んだ。

鼻腔をくすぐる甘い臭いと、シャンプーをした後特有の女性の臭い。それら全てが男の心を攪るフェロモンとなり、俺の意識を刈り取っていく。

「あ．．．い、一夏。その、恥ずかしい．．．。」

俺が箒の体の臭いを堪能していると、俺に組み敷かれた形になった箒が、顔を真っ赤にして体の大事なところを隠し小さな声で訴えた。シャワー後に箒の体を隠していたバスタオルはベッドに押し倒す時には既に、床に捨てられ、今の箒の体を隠すものは何もなかった。

必至で隠す箒だが、アンダーから見える黒と、トップを押さえつけて隠している手が逆に豊満なそれを強調し、より一層官能的に見えた。

俺は、箒の緊張を解きほぐす為に、ゆっくりと指を箒の体に這わせ、ツーツと体のラインに沿うそれに、箒はくすぐったいやら恥ずかしいやら、体を震わせた。

うなじから箒の細い首筋を通って、鎖骨のラインに至り、そこから肩に入って箒の脇へと侵入する。

もう一つの手で箒の頭を撫でたり、うなじを解きほぐしたりしながら、俺は箒の反応を見て楽しんだ。

箒は、シャワーで火照った以上に体を赤くし、耳まで真っ赤にしたそれを、面白いと思った俺は、いきなり箒の耳へと顔を向け、舌を這わせる。

ビクツと反応する箒だが、体に力が入らないのか既に体を隠していた手はだらりとベッドに横たわり、抵抗する力ない代わりに、恨めしそうにして俺を睨んだ。

だが、そんな事では俺は諦めない、耳朵をアマガミし、外ぶちをかから綺麗にするように舌でなめ取る。

そうすると箒の目が段々と虚ろになってトロンとして、息が荒くなり、体の自由が利かなくなる。

俺はそろそろいいかなと思ひ、這わせた手を背中から腰へ、そうしてもっと下のほうに向け……

ここまでの妄想僅か十分！！

一夏に抱きつき、泣き続ける箒の声と、箒の体臭を嗅いだ一夏の脳内では、大量に紳士成分が分泌されエントロピーを凌駕してしまつた！！

更に！！緊急事態と見た愚息が「もっこり」と起き上がり、丁度箒の足と足の間当たつてしまつような位置のため、是を重く見た脳内は急遽、脳内麻薬を大量分泌し一夏をアッチノ世界へとトリップさせてしまつたのだ。

クウ、惜しい、物凄く惜しい！！今の一夏ならさつきの妄想以上の事が出来るのに、そこにシビアコな展開が出来ない！！

兎に角一時の慰めで箒を落ち着かせたのと同時に、一夏は何とか社会的に抹殺寸前であつたトラップを回避することに成功したのだ。

だが、据え膳食わぬは男の恥、と決して言つな。

兎に角ベッドの仕切りの向こう側に座り、箒が着替えるまで待つた一夏は、その後荷物を取りにいくといつて部屋を出て行つた。

その時の彼は、顔を真っ赤にして薄暗くなつた道を歩いていく。

だが、箒も箒で、先程のやり取りを思い出したのか、突然胸がキュンツと来てしまいベッドで枕に顔を埋め、イヤイヤノノノと転がりまわるのであつた。

箒も妄想の中で一夏に優しくリードされ、最終的には一夏に首輪をつけて貰う所まで想像し、中々に変態ぶりを噴出していた。

事務室に取りに来るのが遅くなってすみませんと謝り、何とか明日からの生活の為の道具を、運ぶ事が出来た。

途中千早ね．．．千冬先生に出会い如何して箒と一緒に部屋にしたのかを聞いたのだが．．．。

「まあ、あいつは見ての通りの状態だからな、こっちに来てても相変わらずだ。私としても、篠ノ之やそしてお前を巻き込んでしまったことを後悔している。」

そこまで言っつて、千冬先生は夜空を見上げ、

「あの時の私は馬鹿だったんだな。目の前の幸せが何時までも続くと勝手に思い込んで、拳句の果てにお前や箒に地獄の思いをさせた。許してくれとはいわんだ。だが、アイツの隣に居てやれるのはお前だけなんだ、頼む。」

そついうと、千冬先生は頭を下げ箒のことを頼むといった。

続けて、

「無論、お前のことも何とかしてやりたい。だが、私はここでは一教師だ、できる事には限界がある。すまないがお前には本当に申し訳ないと思っっている。」

千冬ねえが人前で頭を下がるのをはじめて見た俺は、呆気に取られ、一瞬だが何を言われているのか分かっていなかった。

「今のお前たちを判つてやれるのは同じ苦しみを味わったお前達だけだ。……だから一夏、昔のお前に戻ってくれ……。」「頭を上げ、俺の目を真っ直ぐ見て言っ千冬ねえの目には涙が浮かんでいた。」

ああ、本当にこの人には適わないな。

俺のことなんかとつくに分かっていたんだ、それでも何も出来ない自分を恥、許してくれとは言わずに俺達のことだけを考えてくれる。

千冬ねえは、コホンと咳払いをして俺の肩に手を置く。

その顔には、先程の涙などこれっぽちも浮かんでおらず、その代わり身の速さにさすがは教師の鑑だと感心した。

ダケレドモ、俺の肩を万力のような力で掴むのは止めてくれませんか．．．いや切実なお願ひなんですけど。

「そうそう、最後に言っておくがIS学園では恋愛をするなどは言わん。だが、節度ある行動をしるよ。もし万が一にも箒のお腹が膨れたり、二人部屋なのに三人になったりしたら私はお前の首をはねた後に篠ノ之の両親の前で腹を切る。」

さつき以上に真剣な表情で見る千冬ねえの目は一切笑ってなく、俺は肩の痛みで目に涙を浮かべながら何度も頷く羽目になった。

ああ．．．箒調教計画が．．．素晴らしい道具の数々や芸術的なまでの体位が消えていく．．．。

千冬ねえが去った後、俺は痛む肩を押さえ、夜道でポツンと呟くのだった。

帰ってきたときに箒がベッドでグルグル回ってたのには呆れたが．．．千冬ねえの声を思い出して特に何もしなかった。

その後、遅めの夕食をとり、学校の勉強は箒に頼み込んで（というか、箒が墜ちている事は判っていたので言うだけでいい）何とかしてもらい、終わった後にとりあえずISのことについて相談した。

「なあ、箒。ものは相談なんだが俺にISを教えてくださいなないか。」

唐突なこの一言に対して、箒は慌てず寧ろ呆れ顔で、

「何を言ってるんだ？当然じゃないか、私はお前がクラス代表に決まったときからこうなることを予想していたんだ。」

誇らしげに言う箒に、すこし悪戯心を出して尋ねる。

「ふくん、何時から？」

「ん？ちょっと前に気付いて教えることにした。言つとくが私の鍛錬は生半可ではないからな。ついてこれるか？」

挑発するように笑みを見せる箒に俺は、スカートの内側へと手を這わせ、真っ赤になった箒の耳元で、

「勿論さ、それと夜のISの操縦の仕方も教えてくれるとありがたいんだけど……。」

蕾のように固い箒の体を腰に手を当てて体を寄せ、箒の長い髪に顔をうずめる。

ああ、いい、恥ずかしかつてなんと答えたらいいか判らない箒をからかつのは本当に楽しい。

耳元で優しく囁くようにして、

「ウ・ソ。」

と、言うまで箒は俺にされるがままだった。

その後、怒った箒が俺の胸を叩くが、全然力が入っていないのか余り痛くはなく、逆にじゃれ付いているかのように見えた。

.....

「コホン、兎に角明日の朝から私と共に鍛錬を開始して、放課後や時間を見繕って座額をやるしかないな。」

暫く二人でじゃれあつた後、本題に戻り、箒が真剣な表情で説明する。

「?となるとISの実機は動かさないのか。確かISは搭乗者の使用時間で性能が上がるとか何とか.....。」

「ああ、それはあるが、大体が百時間以上や中には千時間を越えてからでないかと余り期待は出来ん。今回一夏、お前が戦うセシリアのことだが、調べてみたがこいつは桁外れに強いぞ。」

「そんなにやばいのか。」

「ああ、セシリア・オルコット。イギリスの代表候補に十四の時選ばれ並居るIS搭乗者を押し退けてIS学園にイギリス代表として入学。IS搭乗時間は学生のなかでトップの二千時間越え。入学時の適正ではA+、一夏お前よりも上だ。使用ISはイギリスの第三世代型実機ブルータイヤーズ、資料では中遠距離を主体とし

た機体で新型兵器ビットを装備しているらしい。」

なるほど、つまりは相手は新型でしかも学生トップクラスのエリート様か、ISに触って一日かそこらの人間では逆立ちしたって勝てないか……。

「だが、勝ち目がないわけじゃない。距離を置いて戦う機体ならば接近戦はそれ程想定はされては居ないはずだ。だから……。」

「だから如何に奴との間の距離を詰めてクロスレンジに収めるか……だろ。」

箒のセリフを先にいい、親指を立てる俺に箒は若干呆れが混じったため息を吐き。

「その自信は何処から来るんだか……まあ、昔の一夏みたいで嬉しかったよ。」

その言葉に、チクリと胸に痛みが走るが、表情には出さず俺達も一夏も襲いとベッドへと入っていった。

……無論俺は箒と一緒にベッドで寝るがな。

「あつ、だめ、一夏吸っちゃいや……だめ声出ちゃう。」

。 暫くの間部屋の中には女性の嬌声が鳴り響いたとか

次の日、一夏だけが織斑先生に呼び出されて頭をしたたかに殴られたのはご愛嬌だが。

代表選前夜

メガフロート

南太平洋ソロモン沖に浮かぶ巨大な人工の島。

波間に揺れるその姿を上から見ると、海上に浮かぶ巨大な板のようだ。

地球連邦が嘗て、公海上に建設しようとしてマストライバーの土台を利用して作られたこの施設は、今では洋上の巨大空港として、活用されている。

六年前、第一回モンド・グロツソ大会が開かれたのもこの場所だ。

その為、今でも多くのISファンが観光に訪れ、国際空港という場所でもあり、一般的にその認知度も高い。

今この空港に一機の政府専用機が飛び立とうとしていた。

「ああ、今飛行機の中から携帯をかけているよ。いい子にしているかい？」

携帯から聞こえる娘のかわいらしい返事に、男は顔を綻ばせる。

「ウンとね、いい子にしているよ。モーモの云い付けも守っているし……でもね、パパは何時になったら帰ってくるの？」

「心配いらないよ。今回の仕事がすんだら休暇を取って一緒にキャ

ンプに行く。」

男は、もうかれこれ一週間も娘と会っていない事を思い出し、秘書が差し出した予定表に娘との約束を書き込む。

「本当！嬉しい。ねえねえ、友達のキャシーとミシェルも誘っていい。」

娘の喜ぶ声が聞こえるだけで、男はそれで胸がいっぱいになった。

「ああ、いいとも。友達を沢山呼んだらいいよ、と、もう時間だ、飛行機が飛ぶからもう携帯を切るよ。」

「ああ、ちよつと待ってパパ！あのね、約束だよ、ちゃんと帰ってきてね。」

男は娘との会話を名残惜しむようにしてから、

「ああ、ちゃんと帰ってくるよ。パパは約束を絶対守るよ。それじゃ切るね、愛してるよメイ。」

携帯を切り、シートベルトを確りと閉めた後、飛行機が滑走路まで誘導され、だんだんとスピードを上げ飛び立とうとしていた……。

早朝早くから一夏と箒はベッドから抜け出し、朝の鍛錬に精を出していた。

一応言っておくが、ベッドのシーツは濡れてはいたが血は付いていない、さらには鍛錬の精の意味を履き違えなくてももらいたい。

体を眠気から覚ます体操から朝のロードワークを終え、現在一夏と箒は剣道場に来ていた。

朝靄も段々と晴れてきた道場に、一夏は久しぶりに嗅ぐ剣道場特有の汗と何かが混じった匂いに懐かしさを覚えた。

靴を脱いで、箒の後に続き、箒は壁に立てかけてあった竹刀を二本取り、一本を一夏に投げ渡した。

「一夏、一戦私とやらないか。そのなまった体にはちょうどいいと思うが。」

竹刀の先で一夏をさし、向かい合う二人。

「ああいいぞ。俺も特技つたらこれしかないからな。まあ、随分とやってないから手加減してくれよな。」

「私が出るとでも?」

ニヤリと笑う箒に、はあとため息をついた一夏は「ですよ〜。」

と言つて次の瞬間二人は同時に竹刀を構えた。

箒は身長を生かした上段に構え、一夏はスタンダードな中段の構えをとる。

一閃、箒の竹刀が一夏の頭を狙い振り落とされるが、上手く合わせた一夏はそれを右に逸らし、小手を狙う。

が、さすがは全国大会経験者、一夏が狙った竹刀を支える左手を咄嗟に離して小手を防ぎ、空振りした一夏の胸を狙い、一夏の手を利用して回り込むが、振り切った反動で前に出てすぐさま箒と向き直った一夏に狙いを外される。

箒は汗を一切流さずにフツと、

「一夏、そろそろ体が温まって来た頃だろう。全力でかかってこい。」

箒は構え直し、真っ直ぐ構えた竹刀はぶれることなく一夏に狙いを定める。

「おいおい、勘弁してくれよ。こっちはさっきので息切れなのに。」

はあ、はあ、と息を吐く一夏はしかし言うほど余裕がないわけではなく、先ほどの立ち合いも僅かばかり力を抜いていた。

それを箒に見破られた一夏は、少し面白くないふうに感じながらも、箒に対しゆらりと竹刀の先を揺らした。

一夏の異変を察知した箒は、しばらく様子を見る為にじっと動かず

一夏が持つ竹刀の切っ先に集中した。

開けた窓から入る春の風が、心地よく二人を包み込むが、しかしこの葉が舞い落ちるとも微動だにせず、二人は対峙し続ける。

と、一瞬箒の視界から一夏が消えた。

反射的に後ろに振り返って竹刀を振るった箒は、そこには本来ない筈の一夏が振り下ろした竹刀とぶつかる。

空気が張り裂けるような音がして、箒は一夏の技の鋭さに驚き、一夏は必殺の一撃を防がれた驚愕の表情を浮かべる。

と、互いにその場を引き、再び正対する。

「はあ、はあ、一夏……いまの技はなんなんだ。一瞬お前が消えたぞ……。」

「はあ、はあ、はあ、……。態々タネを教える奴はいないよ……。」

互いに息を整え、次の一撃で最後だと悟った二人は、共に無言となり、構える。

と、箒が構えを変えて腰だめに差し、一夏も構えを解いてブラリと両手をだらけさせた。

一夏の構えは一見隙だらけに見えるが、これは体に余計な力をかけずに、敢えて相手に攻撃を受け、切り返す見切りの姿勢をとり。

対する箒は腰にさした状態で、体を屈め、柄の部分に手をかけるも他の所には余計な力をかけず、ゼロから飛ばしてで全力を發揮する居合の構えをとった。

と、一瞬目に見えぬスピードで抜き放った箒の居合が一夏の胸を捕らえた。

パンツツツ。

鋭い音が鳴り響き、互いに相手に一撃をいれた姿勢で固まる。

箒の居合は一夏から見て左から来るよう見えた、しかし先に出た手を狙った一夏にすぐさま反応した箒がそれよりも早く抜き打ち、一夏の突きの手を利用して竹刀を隠し一夏の胸を狙う。

が、小手をかわされた一夏は、直ぐに狙いを変えて下からの突き上げによる面に変えた。

結果は互いに相手の胸と面に一撃をいれての引き分けに思えたが……。

「私の勝ちだな一夏。」

ギリギリの所で止められた竹刀の先を見て、にやりと笑う箒に、一夏は、

「ああ、お前の方が先に決まったからな……。そろそろ下ろしていいか？脇が痛い……。」

箒の全力からの加速が一夏の突きを上回り、先に胸に当たり、その

直後に一夏の突きが箒の顔に突き出された。

ここまでの攻防は僅か一秒にも満たないにも関わらず、二人には一時間以上にも感じられた。

竹刀を片づけ、一夏は箒の竹刀が当たって出来た痣を見ながら時々イテテテと呻き、その度に、心配そうに箒が声をかけた。

「一夏．．．やっぱり無理はするな。今すぐにも保健室に行つて診てもらおう。」

濡れたタオルで一夏の痣に当てながら箒は心配そうに一夏に言う。

「なに、これくらいなんてないさ。それよりも流石だな箒、前よりも一段と速くなった。」

「／／／そ、そうか。なら嬉しいんだけど．．．一夏に面と向かつて言われると恥ずかしい。」

最後の声は小さくて聞こえないふりをしてばつちりと聞こえていた一夏は、ずいっと箒を抱き寄せ．．．。

「い、いいい、一夏．．．な、ななな、何を．．．。」

顔を赤くして慌てふためく箒の耳元で、

「箒可愛い。」

と呟き、言われた箒は頭から湯気を出して恥ずかしさのあまり一夏の脇に思いつきりタオルを押しつけてしまう。

「ツツツツツツウウツウウウ！……！」

その、余りの痛さに悶絶してしまい、結局幕に抱えられたまま保健室へと行く羽目になった一夏であった。

セシリアとの試合まで一夏達はひたすら鍛錬に勤しんだ。

なまった体を鍛え、剣術の腕を磨き、ひたすら走り込む。

たとえ付け焼刃とはいえ座学を詰め込み、セシリアの対戦記録を見て対策を考える。

俺たちの努力は、時には深夜を超える事もあった。

まあ、そのおかげで幕とまた昔みたいに話せるようになったのは嬉しいし、何よりも勝った時のご褒美もある。

半ば冗談で云ったつもりの一言、

「なんかな、試合に勝っても結局クラス代表になるだけだろ。なんか他の特典とかないのかな。」

ある日遅くまで篝につきあってもらいながらセシリアの対戦記録を見て一言、何気なしに言ったこの一言が、後々俺の大きな励みになった。

大会前夜、その日は明日に備えるため二人ともいつもより早くベッドに入り、体を休めていた。

しばらく部屋の中には穏やかな寝息が響き、二人の間を分ける仕切りの向こう側では、一夏が目を閉じ、明日の事を考えていた。

これまでやれることはやってきた、それを明日証明できるかどうか・・・ここまで付き合ってくれた篝の為にも、明日は絶対無様な姿は見せられないな。

一夏は何度も何度も今までの事を思い出し、そのたびに自らの心の中に言葉を刻みこんでいく。

そうして、何時しか一夏はぐっすりと眠ってしまっていた。

ふと、仕切りの向こうで何か起き上がる気配がした。

それはゆっくりとした足取りで一夏のベッドへと向かい・・・ドサリと何かがまたがった。

「う、ん？何だ。」

うつすらと目を開けた一夏の前には馬乗りになる箒の胸元からはだける豊満な胸があった。

寝ぼけていた一夏はそれを、思いつきり揉んでしまい、ヒヤツというかわいらしい悲鳴にも気付かぬままひたすら胸を揉んで堪能し続けた。

「うづう、い、一夏、こら起きろ。あ．．．だめ．．．．．噛んじやいや．．．。」

既に箒の胸を覆っていたパジャマのボタンは外れ、一夏は直接肌に触れて箒の体に自らの齒形をつけていく。

夢の中では、一夏はただひたすらにマシユマロを食べ続けているだけなのだが．．．．．現実はかなりきわどい所まで行っていた。

耐えきれなくなった箒はついに、

「これ一夏、起きろ！！」

と、寝ている一夏の頬を抓り、その痛みでようやく覚醒した一夏は、先ず箒のあられもない姿に驚いた。

「ほ、ほほほ、箒。おま今何時．．．．．まあ、眼福眼福ありがとうございます。」

そして拝んでしまったのは仕方がないことだ。

「何を見ている一夏！！まったくお前は、今日は何もしない約束だろ。」

時計は夜中の三時を指していた。

「もう今日じゃないよ、昨日だよ。とにかくいつたいたいなんだ筈。」

「はあ、お前というやつは、まあいい一度しか言わないからな。」

そう言って筈は何度も何度も深呼吸をして、息を整え、顔を真っ赤にしながら一夏の耳元で囁いた。

「……私の……を……す。」

「え？」

思わず聞き返してしまった俺だが、既に筈は俺から離れ、隣のベッドにもぐりこんでしまった。

起こそうかと迷ったが、明日も早いので結局その日はそのまま寝ることにした。

夢の中で筈の感触を思い出し、紳士汁があふれださないように注意しながら、一夏は夢の中で筈をもてあそんでいた。

代表選前夜（後書き）

駄目だ、暗い過去をもつ原作組に耐えきれずについ変態方面に行っ
てしまった．．．．。

このままではだめだろうか．．．．。

でも、この路線でいくとーシャルは確定！ーついでに第のバストア
ップにもなるからいいのか？

星の屑 前編（前書き）

感想のほうに原作組みはいい、との声がありましたのでこれからは原作組みを全く無視の無視、一兵卒未満の扱いで行こうかと思いません。

そのため時系列が多辺わかり難くなっていますが、そこは登場人物の名前で大体の時期を設定しておりますのでよろしくお願いします。

星の屑・・・・・・・・前編

世界初の男がIS学園でイチヤコラやつてる頃、地球連邦所属の宇宙ステーションではある重大な事態が起きていた・・・・・・・・。

「不味い、第三十三層を突破された、ダメだ障壁が間に合わない！」

中央管制局では、三時間前に始まった大規模ハッキングに対し、総力を挙げての防衛を行っていた。

「攻勢防壁がダミーに引つかかった。侵入をとめられない。」

しかし、敵は可也のでだれで、既に六十六ある防壁のうちその半分以上を制圧されていた。

「対進入用プロテクトは！！いつたい何時までかかる。」

騒然とした司令室の中、彼方此方で悲鳴や怒号が上がる。

「二十分いやあと十五分待つて下さい。」

「八分で作動させる！！これ以上の侵入を許すな。」

既に防壁は四十層を越え、宇宙ステーションの通常の運行にも支障をきたしていた。

「第六区画との通信が途絶、B-13のゲートが開放!? エアが抜けるぞ。」

「通常作業員は衛星内の緊急避難所に退避……ああまずい、第十二区画に人が取り残されている。」

「うだうだ言っていないで手動かせ!! なんとかしても中央だけは守るんだ。」

「しかし量子コンピュータに交換するタイミングを狙われるとは……まてよこのタイミングでこの手腕……!? まさか篠ノ之束か。」

地球連邦首都ダーウィン

現在首相官庁の会議室では、今朝方に始まった連邦所属の宇宙ステ

「シヨン」「ボリビア」に対するハッキング対策について、専門家を交え議論を交わしていた。

「状況はどうなっている。」

ゴッブ首相は議席の中央に陣取りながら、鋭い目付きで会議室を見回す。

「現在第四十六層までが突破され、汚染されています。これまでの経緯から見てあと二時間ほどで全層を突破、ボリビアは完全に掌握されます。」

立ち上がって説明した国防長官の声は振るえ、拭く暇もなく流れる汗の量が、如何に事態が切迫したものかと証明している。

「コイツチャー博士、何か意見はないんですか。」

全員の目が、ズボラな服装をして何処から取り出したのか木製の飛行機を弄くっている男に集中する。

その視線に気がついたのか、男は面倒くさそうに顔を歪めながら、手を組んだ上に顎を乗せて言う。

「まず今回の事態は予め予想できたものであり、実際に私もそれを警告しながらもなんら手段を講じてこなかったあなた方軍部の怠慢と悔りが、今回の事態を引き起こした原因の一つであるといっておきます。」

その言葉に、出席した何人かの軍関係者がムツとするが、ゴッブ首相が目で続けるように促した。

「私が設計し開発を主導した第七世代型量子コンピューターは全く新しい構造なのは既に説明しました。今回はそれを計七機ポリビアに上げてその取り付け作業を行っていました。しかし、ここで問題があります。今までのOSやソフトなどは違い、全く新しいこれ等を入れるためには、一時的にシステムをシャットダウンしなければなりません。そのため、外部からの侵入を察知できず、気づいた時には量子コンピューターごとシステムが乗っ取られていた可能性すらありました。」

「だが、そうはならなかった。緊急時の生命維持用に活動していたシステムが異常を発見してハッカーの侵入に気がついたのだ。これは我々の防衛対策あつてのもので……。」

宇宙軍総監が胸を張って言うが、博士は向こうを向いてポツリと、
「そもそも私のシステムを受け入れていけばこうはならなかったんですけどね。」

その発言で面子を潰された総監が顔を真っ赤にしながら、手を血管が浮き出るまでワナワナと握り締めていたが、別の将官が慌てて、

「そ、そもそも一民間人をむやみやたらに軍事衛星に関わらせるなど……。」

その一言で会議室はシーンと静まりかえり、しまったという顔をしながらが最早後の祭りであった。

今回の会議の召集目的は連邦所属の宇宙ステーションが何者かにハッキングされているという事であり、ポリビアが宇宙ステーション

に偽装した軍事基地というのは表向きは伏せられているのだ。

無論此処にいる全員がそんなことは暗黙の了解であったのだが、態々口に出して言うようなことではない。

「コホン、まあ過ぎたことを言っても仕方ありません。今は何よりもどうやったらハッカーに対処できるかの方法を議論すべきです。」

「それについてはもう、はっきりと言つて手遅れでしょう。状況と手口から察するに、相手は非常に高度な知能を有し、進入するまで誰にも気付かれない程の手口、そして何よりもこんな大胆不敵なことを堂々とやる人物など今の地球にどれくらい居るでしょう?」

コイツチャー博士は不敵に微笑み、次いで口を歪ませて犯人の名前を言う。

「篠ノ之束、ですよ。彼女以外に考えられない、ま、それ以外に出来るとしたら僕ですけどね。兎に角世界最高のセキュリティを破るようなハッカー相手では、勝ち目はありません。」

篠ノ之束、ISの生みの親にして、世界最高のセキュリティを誇るミサイル施設を誰にも気付かれずにハッキングし、ミサイルを日本へと発射した最悪のテロリスト。

一歩間違えば、世界中の核ミサイルが発射され人類が滅亡してたかもしれない。

それ程の事態を容易に引き起こせるテロリストの存在に、世界中は恐怖し、抜本的な対策とセキュリティの一新を迫られる事になっ

た。

「馬鹿な！！奴の手口なら我々は知り尽くしている。日本のIS研究所から発見された痕跡と、メガリス事変で軍のコンピュータを全部調べて奴の侵入経路を特定したんだ。同じ手を食うはずがない。」

「だから、それが貴方達の怠慢だというんです。相手はかの天災とまで呼ばれるような頭脳の持ち主なんですよ。自分の弱点くらい把握しているに決まってるじゃないですか。それに本当に篠ノ之束なら量子コンピュータでさえ危うい。」

「どいいう事なのです？」

会議の進行役を担っていた、首相補佐官アンソニーがコイツチャー博士に尋ねる。

「博士、あなたは先程自分が作った量子コンピュータに対して絶対の自信をもっていたのではないのですか？それを如何して突然翻すので。」

「なに私も一応IS研究に携わっていたときがありましたね。まずISCコアなんですか、あれは凝縮された情報集積装置の塊です。量子化によりありとあらゆる物をその容量が許す限り出し入れが出来、ハイパーセンサーにいたっては人間の直感すら上回るほどの感度です。これはISCコアはほぼ人間の脳に匹敵或いはそれ以上の力を秘めていると考えていいでしょう。それを自在に製造し操れる篠ノ之束にとっては、量子コンピュータといえども、分が悪いですね。」

その答えに会議室に集まった面々は苦虫を百回噛み潰しても足らな

い、苦い表情を浮かべる。

ヒソヒソと隣のものと何かを囁きあう声以外に、会議室は静まり返っていた。

「．．．．．博士、あなたは確か篠ノ之束以外には自分しか居ないとおっしゃいましたね。」

「はい、ああハッキングに関してはそうですが、勿論法は犯してはいませんよ。」

ゴツプ首相にいきなり尋ねられたコイツチャー博士は、肩を竦めおどけた風に言ったが、ゴツプ首相の目は厳しいままだ。

「参謀総長．．．．．電話をかけてくれないか。」

「こんな方法聞いた事がありません！無茶です。」

「無茶でも何でもいい。兎に角三十分だけ持たせればいいんだ。そうすれば後は向こうが何とかしてくれる。」

「いや、訳も分からぬまま軍用ヘリに乗せられて来たら……
一体此処どこです？」

緊迫する作業員のなかで、着崩した服装に、サンダルとなんともズボラな男が頭をかきながら二人の間に入ってきた。」

「ああ、あんた。なんちゅう格好しているんだ。さっさと作業着に着替えて持ち場にもどれ。」

現場監督らしき人物が、黄色いヘルメットを上げて男の怒鳴る。

「といいましても……僕此処に着たばかりだし……
」。

男が現場監督の暑苦しい気迫にくったりとして肩を落としながら、勝手に先へと進んでいく。

「おいあんた、一体何処に行くんだ！！」

呼び止められた男は、首から下げたＩＤカードを見せて、ニヤリと笑い。

「ああ、僕今日からこの責任者ね。」

そうして、呆気に取られる二人を置いて、さっさと進んでいってしまった。

ISカードをセンサーに読み取らせ、重く閉じられた鋼鉄の扉が開く。

中に入ったコイツチャー博士の顔は、先程までの飄々とした笑みはなく、何処までも冷たく見つめる眼差しが浮かんでいた。

「ようこそ、コイツチャー博士。ここの責任者のアカギです。どうか宜しく。」

妙齡の眼鏡を掛けた美人が手を差し出して挨拶をするが、コイツチャー博士はそれを無視して、さつさと先に進んでいく。

「ちょっと、待って下さい博士、まだMAGIマギの説明が……。」

「地球連邦首相直轄組織、通称カバラ機関。首相権限の元連邦領内におけるあらゆる組織を指揮下に置く権限を持ち、超法規的な措置により特殊な表ざたには出来ない実験もやっている……まさか本当に人間の思考を移植していたとは……。」

コイツチャー博士はそこまでいい、目の前にある巨大な黒い三つの箱を見下ろし、アカギ博士に振り返って笑みを見せる。

「……あなたは何処まで知っているのです。」

言外に場合によっては射殺もありえると含めたその問いに、博士はひよひよひよと笑みを浮かべ、

「なぐに、どんなものにだって抜け穴くらいあるさ。特に、ずっと穴倉に籠ってる様じゃ、僕には勝てないよ。」

そう言ったきり、さつさと地下の部分に降りて行って、勝手にコンピューターを弄くりだした。

あまりの天衣無縫さに、呆れてしまったアカギ博士は、呆気に取られながらも、しかし、中々に面白い男ヒトだと感じた。

.....訂正、面白いヒトではなく真性の変態
だ。

私の目の前で次々とプログラムを読み取らせ、残像が見えるほどの
スピードで指を動かして大量の情報を処理していく。

「うん、中々のプログラムだけどムラがあるな。僕のほうで勝手に
に組むけど別にいいよね。」

私了承なく勝手にMAGIのシステムを書き換えていくそのスピ
ードに、反論する暇もなく、ただただ見ているだけしか出来ない。

.....私たちが五年もかけて組んだプログラムが一瞬で書き換
えられていく.....いやね天才って。

自分の才能の限界を思い知らされる見たいで、一瞬母のことを思い
出したが、頭を振って振り払い、私も自分の仕事に取り掛かる。

「?これは・・・まずいね。だれだか知らないけどこの束さんに喧嘩を売るなんて。」

薄暗い部屋の中、大きな子供の頭ほどあるISコアに様々なコードを繋ぎ、自身のヘッドディスプレイと直結したそれから脳内の反射をダイレクトに伝え、ハッキングを行っていた彼女は、突如として別の所から新たな侵入者が現われ、自身のプログラムに食い込んできたのだ。

彼女が考えられる想定のうち一つは、何らかの別勢力からの介入。あの亡国機業とかいう連中ならありえる。

次に単なる愉快犯。彼女ほどではなくとも、一分野では彼女クラスのハッカーを何人が彼女は知っていたし今回の騒動で一番介入してくるとしたら彼等だろう。

最後に・・・これは余り考えられないが、連邦からの反撃だ。

しかし、攻勢防壁の走らせ方、ダミープログラムの配置に対処の仕方から、単なる政府お抱えのハッカーではありえないほど手馴れていてそれでいて独創的で彼女も知らないような手口で次々と彼女が張る攻勢防壁を突破するそれは、あたかも三人の考えが異なる人間を相手にしているようであった。

「あと少しで掌握できるんだけど・・・うん!?これは・・・
・・・不味い衛星内の量子コンピューターまで起動したか・・・

となるとこれは連邦の刺客。」

彼女は暫くぶつぶつとない後とか呟いて考えた後、ヘッドディスプレイを外し、冷たい外気に顔が触れて涼しいと思いつながら、

「此処までか．．．．．でも、せめて是だけはやってお
かなくちゃね。」

そう言つて、あるシステムをEnterし、彼女は周りのものを量子格納し、抱えるISコアが光つたかと思うと、次の瞬間には彼女の特徴的なうさ耳と変化していた。

ついでに適当な紙にメモを残し、そこらへんに刺したあと、彼女は部屋を後にした．．．．。

星の屑 前編（後書き）

前の感想で、好意の裏返しが憎悪と書いてくれた人がいたような気がします。

ゴツプと束 二人がくつつくことは永遠にないでしょう
な

おじさまと幼女って最高の組み合わせで、個人的には好きなジャンルなんですけどね W W W W

次回あたり初のMSのお目見えです。はてさて東さんの最後に仕掛けたものとは! ? 後編に続く。

星の屑 後編 (前書き)

ええ、長らく更新を停止して申し訳ありません。

此処で言い訳をさせてください。

はい、新しい小説を書いちゃいました。で、そっちに掛かりつきり
というか試験勉強の合間に酒飲んでたらいつの間にか書いていてこ
うなってしまった。

反省はしている、後悔は 多分これからする。

アメリカ海軍最強!! という作者名で書いているのでよかったですらど
うぞ。

星の屑・・・・・・・・後編

篠ノ之束のハッキングからポリビアが解放され、漸く一息つけたのも束の間、突如としてポリビアの姿勢制御装置が働き、ポリビアはゆっくりと地球の大気圏へと落ちてゆく・・・・・・・・。

「まさかこんなことになるとは・・・・・・・・。」

「クソ！！テロリストめ。こんな事をすればどうなるか分かってい
るのか。」

首相官邸の特別対策室は沈痛な面持ちで衛星軌道ステーション、ポリビアの落下の報を聞いている。

やっと篠ノ之束を排除したら今度は衛星の落下。

まだステーション内には百名を超える人員が居り、システムの復旧が満足に出来ていない為脱出もほぼ不可能に近い。

それでもステーション内に取り残された人々の必死の努力により、

その落下スピードは想定よりも抑えられているとはいえ、いぜん予断は許さない。

「ゴツプ首相！！衛星の落下予測ポイントが判明しました。」

ずっと窓の外から空を見ていたゴツプ首相は、振り返らずに手で続けるように合図した。

「当初の計算では落下予測ポイントはオーストラリア東部シドニーでしたが、減速により大きく軌道はそれています。このまま落下するにしてもサハラ砂漠中部の無人地帯になります。」

その報告に一先ず最悪の事態が回避されたことを知った関係閣僚は、ホツと息をついたが、しかし、その次の報告で再び顔を青ざめる。

「ですが、大気圏突入による破片は大きく拡散し、その多くが現在建設中の軌道エレベーター『ラ・トゥール』に落下します。」

軌道エレベーター構想は既に何世紀も前から提言されてはきたが、開発コストの問題と、そもそも技術的な問題で半ば机上の空論と揶揄されてきた。

しかし、地球連邦はゴツプ首相のもと、拡大した経済と発展する技術力、さらに月面地下基地からの豊富な資源によって可能にしていた。

軌道エレベーターは赤道の三箇所に作られる事が決定し、そのうちの 하나가アフリカビクトリア湖西の軌道エレベーター「ラ・トゥール」なのだ。

建造中の此処を破壊されれば」（イコール）連邦の宇宙開発の頓挫を意味する。

そうなれば無駄なIS開発競争に連邦も引きずり込まれ、あの篠ノ之東に膝を屈することに成りかねない。

対策は大きく二つに絞られ、一つが大陸間弾道弾による衛星の破壊、もう一つが複数の衛星を使ってステーションを引っ張るというものだ。

大陸間弾道弾案は、ステーション搭乗員の人命を無視した作戦だが、現実性が高く速攻で使用できる利点があり、複数の衛星によるステーションを静止軌道に戻すという案は、成功率は低くとも、ステーション搭乗員の生命を守りまた彼等の助けも期待できるということ、で支持するものは多い。

が、どれもこれも一長一短であることは分かりきっている。

既にロシア、中国、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、などIS先進国といわれる国家が保有する衛星に動きが見られている。

また、ロシアのミサイル基地が衛星に照準を合わせたとの未確認情報もあり、事態は早急な解決策を求めている。

結局これ以上の具体的な策を出せなかった対策室の面々はゴッブ首相の決定をゆだねる。

ゴッブ首相はただ一言、

「ギレンを呼べ。」

とだけ言い、それつきり口を嚙んだ。

月面基地グラナダ

月の裏側に極秘裏に建造されたこの基地は、世界に知られること無くある兵器の実験場として機能している。

その、司令室ではここの責任者であるギレン・ザビ大将が態々本国のゴッブ首相直々にとある指示を受け、

通信が終わり、ニヤリと口元で笑ったギレンは、既に準備が完了し

ていた艦隊をグラナダから出撃させ、ステルス航行で衛星から発見されないようにしながら、進んでいく艦隊を見て、一人呟いく。

「ゴツプ首相が漸く重い腰を上げたか……面白くなるやもしれんな。」

刻一刻と落下する衛星の存在がついにネット上に暴露される。

何処からともなく流出したその情報は世界中を瞬く間にめぐり、各国メディアが挙って天文台からの映像や専門家達の発表を流していく。

人々はこの突如として降って湧いた事態に混乱し、驚愕し、固唾を呑んで見守り続けた。

この危機に、IS先進国は国家の範疇を超えた共通の危機として連邦に自国のISを展開させるようIS委員会に提案し、

さしもの委員会も、非常事態ということもあり、ISの出勤が決まりかけたが、これに待ったをかけたのが他ならぬ連邦であった。

地球連邦はあくまで自国の問題とし、他国の介入を拒み自分達の手によって解決すると宣言。

そして、国連で非難の嵐が吹き荒れる中、地球連邦による救出作戦が慣行されようとしていた。

N A S A

ISSの登場で限られた予算しか与えられなかった国際宇宙センターはいま活気づいている。

地球連邦の宇宙ステーションボリビアが落下軌道に入り、刻一刻と地球に向け落下するということで、急遽召集された彼らは其々久しぶりの職場で各々の能力を最大限まで発揮している。

だが、突如して監視衛星にノイズが走り、それが段々と酷くなって遂には何も見えなくなってしまう。

この現象は各国宇宙センターでも見られ、ボリビア周辺宙域の衛星は全て通信不可能となってしまった。

突然の事態に混乱する各国を他所に、地球連邦による救出ミッションが極秘裏に始まる。

周辺宙域にミノフスキー粒子を散布した連邦軍救助部隊は、落下軌道にある宇宙ステーションポリビアを立て直す為にまず乗員の救助活動を開始する。

外部から強制解放された通路から、内部へと入った救助部隊が、まだエアの残っている区画を探して人員を救助し、いきなりの救助に戸惑う彼等を尻目に無言で救助活動を続ける。

スモークが降ろされたバイザーとノーマルスーツ。

その姿にステーション司令はある答えにたどり着く。

まさか！！宇宙軍が動いたのか。

だが、彼にはそれを止める術も権限も無い。

ただ、救助指示に従い列のに並ぶ彼は、今後の宇宙が宇宙軍の独占になるだろうと予想した。

ポリビアから生き残った乗員を救助した後、急ぎ救助船がステーションから離れていく。

既に大気圏突入ギリギリのところ、今からミサイルを撃ち込んで
も破片が散らばって特に外部装甲の大型のものはその大部分を残し
たまま大気圏を突破するだろうと予想される。

救助された彼らは、ただその様子を見るしかなく、地球に落下しよ
うとするステーションに．．．．突如として幾筋もの光芒を煌
かせた人型が何十機も飛びついていく。

最初彼らはISかと思った。

しかし、ISにしては一目で大きすぎると感じた彼らは、シャッタ
ーで窓が閉められるまでずっと窓の外に風景に嘔り付いていた。

「此方アローヘッド。全機聞こえるか？MSの初のお目見えだ、気
合入れていけよ。」

編隊を組んでポリビアを指すMSジムの群れは、他の幾つもの部
隊に別れ其々割り振られた場所へと向かっていく。

と、途中先頭に行く隊長機の肩と接触してミノフスキー粒子下での
通信方法である所謂触れ合い通信で部下の一人が、

「隊長。ミノフスキー粒子のお陰で誰一人として見てはいませんよ。」

そういつて肩をすくめて冗談を言つと、もう一機が僚機の手に触れ
て、

「なに、おれたちや何れ地球に降りるんだ。その時の予行演習と思えばいいんだよ。」

と言って笑い、他のパイロット達の緊張感を解きほぐしていく。

「よし全機、いい感じに力が抜けたな。それではポイント4-1-3から侵入。所定のポイントに作業を開始しろ。」

「了解!!」と小気味良い返事が返ってくる時ほど指揮官としてうれしいことはない。

こうして始まった宇宙ステーションを静止軌道に戻す作業は、MSの汎用性と活動時間とで無事に成功し、彼らは誰にも知られることなく撤収していった。

この事件で、突然衛星と通信できなかつた訳は、太陽のコロナの爆発という事で一先ず片付いたが、しかし、連邦も彼等の予定を早めなければならなくなった。

ボリビアのハッキングの初めの目的は、連邦が開発した量子コンピュータの奪取と開発している新兵器の情報を入手しそれを世界中に暴露して連邦の（具体的にはゴツプの）権威を失墜と国際社会での地位低下、さらに宇宙開発に歯止めをかけるつもりだった。

でも、この二つは失敗し、事前の策として用意していたものを使わなければならなくなった。

本当は近くの衛星にぶつけ、連鎖的に発生させることによってケスラーシンドロームを引き起こし恒久的に人類を地球に閉じ込めるつもりだったけれど、勿論東さん特製のISがあればそんなのすぐに解決できる。

でも、連邦が以外に粘って、私が仕掛けたトラップのうち起動したのは半分以下。

仕方なく軌道を変更して地球に落下させることによって連邦の宇宙開発の拠点を潰そうとしたけれど、これも失敗。

やっぱり最後まで東さんが見ていないといけないね。ゴーストなんかにやらせるからこうなるんだ。

軌道は宇宙ステーションが燃え尽きる角度ではなく、このままでは地球に衝突してしまうかもしれない。

ま、軌道計算でアフリカに落下することは分かったから気にすることはないけど.....。

何だこれは！！如何して通信も何もかも出来なくなつたの？

あの後、東さんが前もって準備していた情報をネットに流して世界中の目が宇宙ステーションに釘付けになるように仕向けた。

ここまではいい、衆人環視の元、連邦の宇宙開発の象徴が墜ち、連邦の宇宙開発は大きく後退せざる終えない。

だから放つて置いたんだ。

けど、行き成り何も写らなくなった。まるで不可視の何かによって遮られているかのようにな……。

何をやっても回復しない、ISを飛ばそうかと考えたけど、何があるか分からない以上下手にISを使うことも出来ない。

.....

それから暫くして、ボリビアが奇跡的な努力によって無事静止軌道に戻つたというニュースが報道されたけど、私はそんなの信じない。

いや、世界中の誰しもが不審に思ってるはずだ、連邦は何かを隠している。

．．．．．今回は殆ど収穫が無かったけど、でも連邦に対する不審の芽は蒔いた。

後はどうやって発芽させるか．．．．。

星の屑 後編 (後書き)

理想郷の方を見ていたら、面白そうなネタを考えてしまった。

人類は月にまで到達し、果てなく続く銀河へと羽開いていた時代。連日打ち上げられる船。宇宙の深遠を目指して建造される新型船。ニューフロンティアを目指し続々と人々が宇宙へと移り住んでいた時代。

だが、それは突如として終わりを見る。

宇宙空間での活動用のマルチフォーマルスーツISが全てを変えてしまった。

「白騎士事件」、女性しか乗れない兵器、国家間の抗争の再燃、476個のISコア、消えた天災、見捨てられた宇宙移民。

十年間、絶えてきたスペースノイド達はついに蜂起する。突如としてジオン共和国を名乗った宇宙移民は、地球に宣戦を布告、ISの技術を応用し誰にでも使う事が出来る新兵器MSに核融合炉を搭載し、各国のISを圧倒。ミノフスキー粒子によってハイパーセンサーを無効化されたISは本来の性能を発揮できずに北半球の国々はジオンに占領されることに。

残った者達や亡命政府は南半球で地球連邦を結成、ジオン共和国に對して徹底抗戦に打って出る。

いま人類の新たな局面を迎えようとしていた。

ISの世界に地球連邦をぶち込んでみた - 異伝ジオンの野望 -

. この話が終わったら書き始めようかなと考えてい

ます。

かくて荒鷲は舞い降りる（前書き）

俺は原作を無視するぞジヨジヨー……！！！！

ついでに原作メンバーを殺戮するぞー（タブン）

いい加減 宇宙^{ソラ}で戦いたいぞー！！

かくて荒鷲は舞い降りる

ボリビア事件から程なくして、地球連邦ゴツプ首相はその演説で事件を篠ノ之束の犯行と断定。

改めて世界にその脅威を訴えると共に、公となった連邦宇宙開発を段階的にに公開していくことを宣言。

世界は再び登場した篠ノ之束の脅威に対抗するためにより強い権限をIS委員会とティターンズに与えることを国連で可決し、世界で一致団結して対篠ノ之束包囲網が構築される。

だが、そんな世界を嘲笑うようにIS学園のクラス対抗戦開催中に突如として無人ISが乱入。

施設に多大な被害を出しながら、何とか撃破する事が出来たが、立て続けに起こる無人ISによるテロは各国に益々篠ノ之束に対する危機感を募らせていく。

そして現在IS学園は物々しい雰囲気にも包まれていた。

あちらこちらにライフルを持った歩哨が立ち、全員が黒い軍服を身に纏い、胸に翼を広げた猛禽に流星と下にティーンズの文字が刻まれた金色のバッジを光らせ、目を鋭くしてあたりを警戒している。

その様子を面白くなさそうに織斑千冬は職員室の窓から眺めていた。どうしてこうなったかと言うと、それもこれもすべてはあのISの存在からだ。

一夏と鈴のクラス対抗戦の途中で乱入した無人ISを一夏が倒し、それを学園が回収したところまではよかった。

だが、時期が悪く、世界中がISテロにびりびりしていた時にこれだ。

本来治外法権であるはずのIS学園は、国連で承認された権限と世論を持って学園に介入。

無理やりIS委員会直轄の対ISテロ組織という名の、実際は連邦の犬であるティターンズを送り込んだ。

奴等はこの学園に乗り込むなり行き成り私と一夏さらに関係ないはずの篠ノ之箒まで拘束し、解析中の無人ISを持ち去った。

何日も拘束され、根掘り葉掘りティターンズの尋問官に聞かれ、そのつど何度同じ内容を話したことが。

これでは、あの「白騎士事件」後の状況と一緒にじゃないか、私はよくとも一夏や箒は辛いことを思い出させられ、苦しんでいるはずだ。

だが、囚われの身であった私には如何することも出来ず、ISも没収されこうしてまた外に出て教育者としての仕事場に戻っても未だに返還されていない。

ISを失った私はいい。

だが、私より後に出てきた一夏と篤は明らかに様子が違っていた。

お互いに俯いていて、声をかけても何も話さず、そのまま寮の部屋に引きこもりその様子を心配して鈴やオルコットが何度も部屋を訪ねるも反応は無かったそうだ。

クソッ！！

私は思わず毒づいてしまう。

どうしてこうなってしまったんだ、あの時、一夏を守ると約束した筈なのに。

それなのにどうして！？

唇をかみ締めながら、私は窓の外にからみえる海に浮かぶ無骨な軍艦を睨み、その場を後にした。

IS学園の沖合いに浮かぶ数隻のイージス艦に守られるようにして中央に浮かぶ白亜の巨艦。

ティターンスの力と権力の象徴にして移動基地である拠点型空母ク
イーンズランス。

武装は殆ど施されていないながらも、船の中には長期間の航行の為
に様々な設備や施設を備え、保養施設を兼ねた都市としての機能も
併せ持つている。

その、巨大な船の一室で、ティターンス実戦部隊指揮官バスク・オ
ム大佐はティターンス総帥ジャミトフ・ハイマン大将に会っていた。

「本日はかような所までお越し頂き誠に恐縮です。クイーンズラン
スを預けて貰う以外にもまさか閣下ご自身が来られるとは思いまし
ませんでした」

「ふむ、貴官もよくやっているようだ。地中海での亡国機業殲滅
作戦の成果。こちらでも聞いているぞ」
ファントム・タクス

お互い向かい合うようにソファーに腰掛け、手元のソーサーには口
を付けず、お互いに話を続ける。

「今回来たのは貴官の労を労う以外にもあってな」

「政治、ですか？」

「まあ、そんなところよ。世間の目がいまここに集中しているから
こそ、私がここに来たというもの。私のためで直接見たいとも思っ
ていたからな」

意味深な瞳を覗かせつつ、ジャミトフは部屋の窓の外のIS学園を

見ながら話す。

地中海の刈り取り（前書き）

更新が大分ストップしていて恐らく約一ヶ月ぶりでしょうか？

今回はバスク大佐が指揮をした地中海での作戦がメインです。というか、個人的に原作メンバーが動かし辛いので如何にかしないと・・・。

地中海の刈り取り

新月の夜、一隻の大型タンカー船がスエズ運河を越え地中海のキプロス島へと針路を取っていた。

夜陰を縫うようにして進む大型タンカー船の内部では、武装した兵士たちが作戦開始前の準備を終えじつと息をこらしている。

地球連邦情報部から齎された情報により、亡国機業の欧州拠点ファントムタスクを特定することに成功した。

これに抛りIS委員会直属の対ISテロ部隊であるティターンズに召集がかかり、亡国機業殲滅の為各国と共同して強襲制圧部隊が送り込まれる。

総指揮官としてティターンズ実戦部隊指揮官であるバスク・オム大佐自らが現場で指揮を取り、否が応でもティターンズメンバー全員の士気は上がった。

亡国機業は欧州を中心にISを用いた破壊工作や各国ISコアの奪取など様々なテロ活動を行い長らく世界各国を悩ませていた。

近年では日本で世界初のIS男性適正者発見もあり東アジアでの活動も強め、日本に駐留する地球連邦軍が非常時体制を敷きそれに過剰反応した中国が軍部に動員かける等アジアでの緊張も高まってきた。

亡国機業は一時期はその装備錬度から某国家の支援を受けているのではと疑われたが、確証は無くそのかわり世界最悪のテロリストで

ありISの生みの親たる篠ノ之束との関係が噂される。

そしてその噂こそがこうして地球連邦の過剰とも言える反応を引き起こしたのだと後年の評論家は言うが、真相は定かでは無い。

だが、唯一分かっているのはこの日を境に、亡国機業の名が歴史に出ることは二度と無いという事だ。

亡国機業殲滅を目的とした今次作戦は欧州各国及び地球連邦軍特殊部隊エコーズなど各国の対テロ部隊やISによる反撃も予想されドイツのIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ通称黒ウサギ部隊など各国のIS部隊総勢十二機が集まりISを用いた初の大作戦が開始されようとしていた。

無論IS部隊の参加に当たっては各国の思惑もあるが、特に英米両国は自国の最新鋭ISコアを奪われその威信を大きく傷つけられていた。

何としても自国部隊で奪われたISコアを奪還しあわよくば他国のISコアも、と考えていることが見え見えではあったが他の国々も大なり小なり同じ様なことを考えている。

作戦に当たって地球連邦及びティターンズは一見すると纏まっているように見える各国部隊が作戦開始と共に独自の行動を起こすのではないかと懸念を示し、

今回の作戦で指揮を任されていたバスク大佐は実質頼りになるのはティターズとエコーズしかないと考えていた。

作戦前のブリーフィングにおいても各国のISパイロットは驕りを隠そうともせず自分達だけで作戦を完遂できると豪語し、特にドイツなどまだ幼い子供を部隊長として送り込むなど幾らトップエースとはいえ少々先進国の軍としては常軌を逸しているようにしか見えなかった。

まあ、そういう面では地球連邦特殊部隊エコーズも負けてはいない。地球連邦発足より連邦の汚れ役として様々な汚物処理を任せられ連邦ある所にエコーズありとまで言われ、各国ではマンハンター部隊と恐れられているがその分下手なIS部隊よりもよほど信頼が置ける。最悪地球連邦から特別に渡された例のアレがあればティターズだけで亡国機業など一捻りなのだが……国際社会の目がこちらに注目している以上流石に時期尚早と判断し洋上で潜航中の潜水艦に待機させつつ何時でも出撃できるように準備させていた。

作戦開始と共にステルス攻撃機が亡国機業拠点への攻撃を開始し、その混乱を突く様に事前に上陸を果たしていたエコーズや各国特殊部隊が潜入を果し、第一目標であるISコアの奪還を目指す。

第二に揚陸艦から上陸をしてくるティターズ主力の本隊支援の為

海岸陣地砲台への破壊工作も行われるも第一目標の内ISSコア奪還
は奪われたコアのうち二つを取り逃がしISSの出撃を許してしまい
揚陸艦部隊へと攻撃をかけようとする。

だが、そこに各国ISS部隊が割り込みISS同士による初の本格的戦
闘が行われ、その間に続々と上陸を果したティターンズは亡国機業
の拠点制圧へと動き出す。

亡国機業拠点内部

エコーズのダグザ・マックール少佐は部下たちと共に拠点中心部へ
と進んでいく。

隊長率いる部隊はダグザ達が気付かれないよう表向き各国特殊部
隊と共に拠点の制圧を開始しているはずだ。

その為誰にも気付かれないよう撤収時間までに事を済まさなければ
ならない非常にシビアな作戦だが、ダグザとその部下達は一つの冷
徹なマシンと化して顔には焦りの色一つと無い。

作戦開始前連邦諜報部が得た極秘情報から亡国機業と篠ノ之束との
接触を確証付ける有力なデータ及び亡国機業が開発を行っていた新
型ISSの開発データの奪取と作戦終了後の隠蔽を命令されていた。

そして拠点の防衛の為多くの戦闘員が出払っている中、拠点中心部

には非戦闘員しかいなかったがしかし見つけ次第全員射殺するよう
厳命されていたエコーズは命令を忠実に実行し、彼等が通った後は
殆ど生存者は皆無とっていいい。

こうして、作戦が無事完了する頃にはエコーズは目的を果し隠蔽の
為テロリストが悪足掻きにと拠点の自爆を図ったかのように見せか
け拠点を爆破。

辛くもそれを察知したティターンズ及び特殊部隊が慌てて拠点から
脱出し証拠も何もかもが土砂の下。

連邦は篠ノ之束に関する重要な情報を得て、ティターンズはその名
目どおりテロリストを殲滅、各国部隊もテロ殲滅に協力するという
ことでお茶を濁すというのが今回のストーリーだ。

無論全てがこの通り行くとは限らないがその時はまた別のストーリ
ーを用意している。

だが、どのような結果になろうとも彼等の役目は変わらない。

ただ、連邦の意思の元命令を忠実にこなすのみだ。

地中海の刈り取り（後書き）

久しぶりに書いたのでかなり文章が滅茶苦茶ですがご容赦下さい。

稲穂の収穫

テイターンズが亡国機業の欧州拠点を強襲している時と同じくして、亡国某所にある亡国機業の本拠地も謎の集団に襲撃されていた。

「なんなんだあいつ等は！？突然何も無いところから現われたぞ」

「そんなことはいい。早くISを出撃させて」

「今やっています。それよりも早く退避を。ここは危険です」

亡国機業のメンバーは何とかISを出撃させて反撃しようと試みるが、しかし。

「こちらエコース4。ISの格納庫と思わしき施設を発見しました、破壊許可を」

「エコース1、了解した。周辺施設も含め徹底的に破壊しろ」

エコース4は両機と共に手に持つバズーカを格納庫へと向けそして無慈悲にもトリガーは引かれた。

360mmバズーカが発射され、夜の闇を照らすロケットの光が格納庫に着弾し、轟音と爆炎とで格納庫を吹き飛ばす。

更に60mmバルカンの嵐がアスファルトで舗装された道や鉄筋コンクリートのビルを瞬く間に蜂の巣にしていく。

闇夜に浮かび上がる巨大な影、そう地球連邦が開発した新型兵器M

Sの姿がそこにはあった。

特殊任務用にコロイド技術を応用した新型ステルスを装備し、ISのハイパーセンサーでさえ捉えられないステルス性をもち、18mもの巨体を気付かれることなくここまで隠匿する事が出来た。

ジムをエコーズ用に改良したこの機体は、隠密性以外にも特殊作戦用に部品をバラバラにして国内に持ち込めるように改造されており、実際某国に輸送する際重機の部品だと偽りまんまと国内に持ち運ぶ事が出来たのだ。

実際MSの本来のコンセプトは宇宙空間での作業用機械なのであながち間違っていないが、四機のエコーズ仕様のジムは順調に組み立てられこうして某国機業の本拠地を蹂躪していく。

また完璧を期すためにミノフスキー粒子を限定的ながら散布し、相手の通信索敵手段を奪ったのも大きく某国機業は頼みの綱であるISを破壊されたあとは然したる抵抗も出来ずただ破壊されていくのを見ることしか出来ない。

「エコーズ1から各機へ。潜入したチームがISコアの奪取に成功した。これより脱出支援の後処理を行う」

混乱を突き、エコーズ陸戦隊が装甲車両と共に基地内に潜入し激しい銃撃戦を潜り抜け各国から奪われたISコアを奪還する。

因みにスコールというISパイロットだが、格納庫から出撃しようとした時にバズーカの直撃を受け消炭となっていた。

エコーズ陸戦隊の脱出を確認したエコーズMS隊は最後の仕上げと

ばかりにある物を基地の中央部に投下し、闇夜に紛れて基地を離脱する。

某国機業の生き残りは何とか瓦礫の山から這いずり出てきて、生存者の救出や他のメンバーに本拠地襲撃を伝えようとするも、突如として基地中央部から閃光が迸り基地を包む。

気化弾頭爆弾

周囲の空気を一瞬で燃焼させ広範囲を跡形も無く吹き飛ばす。

その閃光を後ろ目に確認したエコーズは、夜陰に紛れその日のうちに国境を越え本国へと帰還する。

表向きは地中海での作戦で某国機業は壊滅したことになっていたが、ここ以外にも海外の拠点到地球連邦の特殊MS部隊が派遣され、世界の目が地中海に向いている間に地球連邦は不穏分子の抹殺を成し遂げ、こうして世界を騒がせたテログループはあっけなく崩壊した。

崩壊への序曲

西暦2XXX年

今年も世界IS委員会主導のもとIS国際会議がここIS学園において開かれていた。

この会議はアラスカ条約により年に一度開かれる事が明言され、ISコアの分配と平和利用における話し合いというのが表向きの名目である。

この会議の成否いかんで国家の存亡にかかわるISコアの分配が決まる以上、どの国家も凌ぎを削り交渉に明け暮れる。

今回の会議の主だって話し合われたのは近年頻発するISを用いたテロに対する対策だ。

無論ISはアラスカ条約において軍事利用を禁止されているが、各国はこの部分の一部緩和を求め、IS委員会はティターンスの存在を理由に拒否するという展開が続く。

実際ISを使用したテロというのはそのインパクトは強くとも回数には少ない。

精々篠ノ之束が起こしたテロ事件を含め（或いはそう見なされている）ここ十年で十件あるかどうか。

それでも地球連邦ゴッブ首相暗殺未遂テロや白騎士事件、更には某国企業におけるIS強奪事件を含めるとIS委員会でも無視できる

レベルを遥かに超えている。

この点をどうするかで揉めているのだが、実際某国企業はこの会議の前に壊滅が確認され、現在奪取されたと思われるISコアは全てティターンズが回収しIS委員会が保管管理している。

今回の会議の項目のうちに、そのうちのいくつかは元の保有国に返還されることになっているが、潜在的なテロの脅威は消えたわけではない。

その為軍拡に走る各国と歯止めをかけるIS委員会とで鬩ぎ合いが行われているさなか、それは起こった。

『ハロー世界の皆さん。東さんだよ』

間の抜けた声が突如として国際会議が開かれているアリーナのスピーカーから響く。

突然の声に混乱するのを他所に、声の主篠ノ之束は勝手に話続ける。

『今日は東さんの人質になってくれるために集まってくれて感謝するよん。でね実は今日東さんは世界の皆さんにお願いがあるので』
発生もとを逆探知しようとするもの、慌てて本国と通信を開くもの、その反応は様々であったが彼等の頭の中にはある一つの共通の単語があった。

このアリーナをまさかハイジャックするのではと、その恐怖に怯えていた。

『そのお願いとは、全ての国家及び組織はその主権を放棄し全ての私篠ノ之束に一任すること。次にISによる世界統治を認めること、これだけだよん』

あつげらかんとんでもない爆弾発言をする篠ノ之束に直さま会議場は怒声に包まれる。

そんな彼等の声をまるで知らないとはかりに勝手に話を進め、遂にはこんな事を言い出す。

『こんなをお願いしているのに駄目かな？それじゃあ仕方ありません。今よりここIS学園を束さんがいただきます。そして束さんランド建国を宣言します』

最早子供の悪戯かお遊びレベルの話だが、相手はあの天災篠ノ之束だ。

その言葉は一国の首相の発言より重みがある。

この放送は全校生徒にも瞬く間に知ることなり混乱に更なる拍車をかけ、遂にIS学園上空にそれらが現われる。

漆黒の全身装甲を纏った無人IS約五十機。

俗に言うゴーレムシリーズが一斉にIS学園へと侵入する。

突如として現われた国籍不明のISに驚いた学園は直さま待機していた教師陣を出撃させる。

その数凡そ二十三、所属不明機に対して数で劣るがIS学園の教師

は全て嘗て国家代表か或いはそれクラスの實力者ばかりだ。

彼女等の前では二倍程度の差など物の数ではなかった。

直さま上空でドッグファイトが展開され、ビームとミサイル、機銃が飛び交う戦場と化する。

直さま生徒会のメンバーと各国代表候補生もISを展開させ予備戦力として召集される中、海中から更に無人ISが出現し、IS学園と外を繋ぐ唯一に交通手段であるモノレールを破壊する。

崩れ落ちる鉄橋、IS学園の象徴である橋の崩落は生徒達や衛星からの中継で見ていた世界中の市民そして、アリーナに捉われた各国の重鎮達に衝撃を与えた。

地球連邦首都政府官邸

地球連邦首相ゴップは衛星からの中継と大使館経由での情報から地球連邦軍全軍に対して非常時体制の宣言を終え、現在ティターンズ総帥ジャミトフ・ハイマンとレーザー通信での会談を行っていた。

「申し訳ありませんゴップ首相。これも全てこちらの落ち度であります」

「いや、君のせいでもあるまい。無論責任は無いともいえないがそれよりも現状はどうだ？直にでもティターンズ全軍を出撃させられるかね」

「はい、国際条約に則りIS学園沖に展開していたバスク大佐とク
インズランズがIS学園に急行しています。それと日本、中国、
ロシア、アメリカ、カナダ、韓国が介入の動きを見せています」

「それは厄介だな。そちらは私の方で何とかしておこう。それより
も場合によってはアレの使用もありうるな」

「アレですか・・・少々時期が早すぎるのでは？」

「無論アレは万が一の保険だよ。今現在地球連邦太平洋艦隊からA
フォーテ
F戦隊を出撃させた。一時的に貴官が指揮を取れ」

「はっ、ありがとうございます。全力を尽くす所存であります」

通信を切ったゴップ首相は、直にまた電話をかけた。

「ああ、私だ。宇宙軍に繋いでくれ」

地球圏最大の軍事力が今IS学園に介入しようとしていた。

上空で史上空前のISによる空中戦が行われている最中、IS学園
から脱出しようとした船に海中から突如として無人ISが出現し、
次々と航行不能にしていく。

IS学園をぐるりと囲むように出現した無人IS群は港湾施設を破
壊しつつ真っ直ぐIS学園中央を目指していく。

学園もそれを阻止しようと各国代表候補生及び生徒会メンバーを非常招集して防衛線にあて、その他生徒達の中から優秀なものを選んで防衛戦に投入した。

この非常ともいえる判断はを迫られた時の理事長は自身の首をかけた。IS学園の生徒までも動員し総力を挙げた戦いへと突入していく。

後の第一次IS学園攻防戦の火蓋が切って落とされたのだ。

混乱する学園

篠ノ之束による建国宣言と同時に国連では今回の事態をどう対処するかの緊急会議が開催された。

既にティターンズ艦隊がIS学園を包囲しそれに各国から派遣された軍がIS部隊を展開させて加わりTV・ネット中継の画像が世界中にリアルタイム送信されていた。

「ふん、全く後から後からわらわらと。国連で今回の事件の一切をティターンズが取り仕切ると言うことを知らんのか」

ティターンズ艦隊旗艦クイーンズランス艦橋でバスク大佐は面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「そう言うなバスク。彼等にも体面というものがある。態々それを立ててやっている分今更波風を立てる必要はあるまい」

「はっ、ですがジャミトフ閣下。連邦から貸し出されたアレ本当に使ってよいのでしょうか？」

バスクはチラリとジャミトフの顔を見上げた。

「かまわん。既にゴップ閣下が手を打たれている。後は時間どろりに事を進めればよい」

ジャミトフはそういつて視線をモニターに映るIS学園へと移す。

学園が非常時に展開するアーリーナのシールド以上の出力を誇るシ

ールドがIS学園の人工島全体を覆っている。

外部からの侵入を一切拒絶するシールドだが展開されてから既に十六時間が経過し、そろそろエネルギーが切れる頃だろう。

構造上比較的弱いとされる海面から侵入しシールド発生装置を破壊しシールドを解除すれば後は空挺部隊と共にアレを投入すれば直に方が付く。

だが事はそう上手くは運ばなかった。

「!?!? IS学園から反応。これは……………無人ISです」

「何だと!?!」

オペレーターの緊張した声が艦橋に響く。

直さま警報を鳴らし、非常時体勢を取ったティターンズ及び各国軍はスクランブル機を飛ばしIS部隊も上空に展開を開始する。

「対空砲火各座開け!!それと宇宙軍との回線をオープンにしろ。情報が欲しい」

IS学園上空の軌道上に展開した地球連邦宇宙軍から送られてくる詳細な情報で直さま正確な数を把握したティターンズは各国軍に情報を添付し効果的な迎撃体勢を構築する。

「IS部隊はこちらの指揮下に入れ。それとアームズフォートフェルミ、ステイグロ、イクリプスを出撃させる。ギガベースは後方に援護射撃を要請」

「了解しました。ギガベース砲撃まであと三十秒」

後方の洋上で待機していたAFギガベース、アームズ・フォート双胴船の連結部分の上に巨大な箱型の砲塔が設置され、そこから放たれる砲弾が轟音を立て水平線の向こう側へと砲弾を飛ばす。

「ギガベース着弾まで五、三、二、一、着弾いま」

無人IS部隊を貫く砲弾が、衝撃波を撒き散らして彼方へと飛んでいく。

残念ながら撃墜機は無いがそれでも敵の陣形を崩せたのが大きい。

底に第二段第三弾の砲撃が叩き込まれ、今度は少なくない数のISが砲弾に巻き込まれながら海中へと没す。

「よし、砲撃を中止。IS部隊は上空から攻撃を開始しろ。イクリプス、フェルミはステイグロの突破を援護しろ」

上空では各国IS部隊と無人ISとのドッグファイトが展開されるのを横目で見て海上を超高速で航行するステイグロがIS学園目指して戦場を突破にかかる。

何機かの無人ISが阻止にかかるが上空に展開するフェルミ、イクリプスのレーザー砲撃とミサイルの弾幕を前に取り付く事が出来ない。

「いいぞ、そのまま弾幕を絶やすな。それと流れ弾も気にしなくていい、あれはISの絶対防御と同等だからな」

バスクがニヤリと笑いながらも攻撃の指示を出し、無人ISがジリと後退していく。

「ふむ、ちと脆すぎるな。バスクどう思う」

ジャミトフは戦術モニターに表示される状況から敵が本気では無いかと考えた。

実際各国IS部隊は皆選りすぐりのエリート達ばかりだがそれにしてもあまりに敵の攻撃が散発的であり何かしら別の意図を感じさせた。

「はっ、私もそう思います。ですがご心配には及びません、現にこちらにもまだ予備戦力と切札があります。如何に天災といえどもたかがテロリスト相手には些か過剰ですがな」

バスクは笑うがしかしジャミトフはそう安心してはいられない。

現にゴツプ閣下は一度ならず命を狙われ実際に生命の危機に瀕していた。

ならば自分たちがそうでないかどうかどうして言い切れる？

ジャミトフはそう心の中で呟いた。

回答者（アンサー）の降臨（前書き）

随分とお待たせいたしました。作者です。

どうも変な熱病のようなもので短編ばかりを書きなぐっていましたが、しかも統合性も何もないものばかりwww

一応あと四、五話で幕引きとさせたいと思います。

果たして束はゴップに勝てるのだろうか？

次回、機動戦士E.S.の逆襲の束をお楽しみ下さい（嘘）

回答者（アンサー）の降臨

パリーン

薄いガラスが割れるような幻聴が聞こえ。

それと同時にIS学園を覆っていたシールドが砕け散り、ステイグ口の活躍によって突破口が開けた途端勝手に戦線を離れた各国ISが真っ先に学園へと侵入し……。

突如出現した八機の無人ISに瞬殺される。

「ふん、馬鹿者共が。各機両翼を伸ばして新型ISを包囲。ギガベースには砲撃の中止を伝える。今撃つては学園を壊してしまうからな」

バスクは勝手に落とされたISに嫌悪感を隠そうともせず一言言いつつ。

次の瞬間にはまた視線を戦場へと移す。

「愚かな事だ。こんな茶番で死ぬとはな」

ジャミトフは呆れたように言うが、そもそも今回の作戦事態折衝案の塊のようなもので未だに面子やなにやらと拘っている世界の面々に失望を隠せないでいた。

（このような考えだから未だに人類は地球を離れる事が出来んのだ。やはり今一度連邦による統一と地球からの強制移民を行わなければ。

これ以上地球を汚させはせん)

「ジャミトフ閣下、そろそろ例のアレを投入する頃合ではないでしょうか」

「そうだなバスク。宇宙軍に連絡を入れろ、我々の回答を世界に示してやれ」

バスクはジャミトフの答えにニヤリと頬を歪めた。

IS学園沖合い上空

そこでは各国IS部隊が新たに現われた新型八機相手に苦戦を強いられていた。

「くそお、こいつ等早い硬い。それにシツコイ!!」

ラファールカスタムの拡張領域からアサルトライフルを出し、新型に向ける。

トリガーを引き絞ると同時に曳光弾の瞬きが夜の空を彩る。

黒色の全身装甲フルスキムで覆った細身の無人ISはアサルトライフルの弾を避けるまでもなく、両肩に装備されたパルスレーザーを放つ。

青白い球体が光速で放たれ途中から花火のように弾けライフルの弾を尽く打ち落とす。

出力が違いすぎるッ！！

パイロットは内心そう毒づく。

エネルギー兵器特化の銀色の福音、シルバリオ・ゴスペルでさえ出す事が出来ない高出力パルス兵器をいとも簡単に放ち。

しかもマツハ3を越える超音速機動の中での正確な射撃。

彼女が乗る第二世代ISでは性能に圧倒的なまでの開きがある。

「だけでも！！」

両手、両肩、両足、両肘に同時にマイクロミサイルランチャーを展開し一斉に放つ。

大小四十を越えるマイクロミサイルが無人数ISに四方八方から殺到し巨大な火球を出現させる。

だが、パイロットは直撃したのにも関わらず武器の構えを解かず、逆に銃口を向けたままだ。

突然、背中に悪寒が走り本能的に機体を右に急加速させると同時にさっきまで自分がいた地点に青い刃が通り過ぎた。

火球を切り裂くようにして放たれる刃をいなしつつも、彼女はハイパーセンサーで相手の姿を必死に探す。

「そこだ!!」

対IS用超長距離スナイパーライフルを両手で保持し、何も見えな
い虚空へと放つ。

本来ならば何もいはずの空間を通り過ぎるはずあった弾丸が何
かに防がれたようにして切られる。

その瞬間、確かにその地点の空間が不自然に揺らぐ。

彼女は何度も何度もライフルの弾を放ち、そのたびに何も無い空間
で弾丸が撫で切られていく。

途中で弾を変え榴弾を混ぜ同じ様に迎撃される当時に爆発したそこ
には、先程火球に包まれていたはずの無人ISが姿を現していた。

「光学迷彩、それにあの縮音性と空間への投影。厄介なものを作っ
てくれる」

無人ISと戦い続けて既に三十分以上が経過しているが、軍用に力
スタマイズされた彼女のラファールカスタムをこうまで追い詰める
篠ノ之束の技術に彼女は戦慄した。

その圧倒的機動力、装甲、そして何よりも豊富な武装。

どれをとっても現行の第三世代ISそしてIS学園に送られたとさ
れる第四世代ISを超えるものだ。

彼女が生き残れているのは単に偶然でしかない。

ISの出現によって女尊男卑に成ったとは言うが、生粋の軍人でありもと外人部隊出身の彼女にとってそもそも性別差などいいわけにもならない陳腐な事であった。

故に彼女は驕り高ぶることも、相手を見下すこともなく軍人として極めて優秀な兵士としての評価と実力を勝ち取っているのだ。

さて、話を戻そう。

突然彼女はふと違和感を覚えた。

戦場で敵から目を離すなど自殺行為にも等しいことだが、彼女はハイパーセンサーで捉えた光景に自分の目を疑った。

「なっ！！なんだあれは」

IS学園軌道上空

そこには本来宇宙には存在しないはずの人工物がいた。

閉じた傘のような物体が、管制官の声に導かれるままに微調整を行いそしてカウントダウン開始と共にゆっくりと軌道上から降下して

いく。

その様子を固唾を呑んで見守るクルーの中、ギレン・ザビは降下する人工物を一瞥しただけで直に興味を失ったかのように天井を仰ぎ見る。

「ふん、ゴツプ閣下も粹なことをする。だが、果たしてこれは誰に対する回答なのか。興味は尽きんな」

家族

上空の遙か彼方、そう大気圏外から降下してきた巨大な物体は、彗星の尾を引きながら学園の空を彩った。

「なんだあれは!!」

誰しもがそう思い、動きを止めた。

唯、ジャミトフとバスクを除いて。

「漸く、と言った所ですか？しかしゴッブ閣下も大胆な事をします」

「切り札は最初に見せる。見せるならば奥の手を持って。アレもそもそもは宇宙の肥やしになるはずの物だ。ここで使い潰しても惜しいとも思わん」

クイーンズランスのモニターに映し出された巨大な浮遊物体。

傘を広げたようなフォルムをしていて、IS学園の上空に浮かぶそれは知る者からはアンサラーと呼称されていた。

アンサラー

嘗て地球連邦が夢想した妄想の残骸。

軌道衛星上に巨大な核攻撃及び迎撃用のプラットフォームを建造し、

その第一号として開発されたアンサラーは、その途方も無い建造費と技術的な難しさから開発は当初から難航していた。

だが、それらを補って余りあるその性能。

純軍事的目的から、当時地球圏最高の人工知能を搭載し地球連邦の人類管理の一翼を担っていた。

連邦に反逆するものには容赦なく鉄槌を軌道衛星上から下し、常に人類の行動を監視し続ける審判の剣。

それこそがアンサラーの存在そのものである。

だが、地球連邦の崩壊と共にその存在は忘れ去られ、長らく放置されたままであった。

しかし、近年ゴツプの首相就任以前からこれの再起動が連邦で画策されその結果として核攻撃機能を廃止何とか実働にまで漕ぎ着ける事が出来たが、そこに現れたのがISの存在である。

ISはアンサラーと比べるとありとあらゆる面でその性能を凌駕し、折角再起動されたアンサラーは時代遅れの鉄屑と成り果てた。

大気圏突入でも燃え尽きる事のない巨大な残骸と、維持費用から言っても連邦にとって大きな負債であり、これの処理を巡って長らく連邦議会の方でも頭を悩ませていた。

そこでゴツプは簡単な応急処置を施し来るべき白騎士事件に備えこれを投入しようと目論んだ。

だがしかし、工事は遅れに遅れ時期を逸したこれは今度こそどうするかと流石のゴツプも頭を悩ませていた。

そこで、アンサラを攻撃用衛星としてではなく偵察情報収集用衛星としてテイターズに貸し出し、その管理費をIS委員会から半ば騙し取るような形で出させるなど結局のところめんどくさいから放り投げたと言っている。

それを現在、半ば廃品処理も兼ねてアンサラは投入されるに至ったのだ。

IS学園地下ドッグ。

ここは学園建設当初、資材を搬入する為に作られ今は忘れられた場所
所で彼女、篠ノ之束はいた。

だがその様子はいつもの人を食ったような姿ではなく、唯黙々と何かに取り付かれるように作業を続けていた。

.....大粒の涙を流しながら。

どうして、どうして誰も私を分かってくれないのだろう。

どうして、どうして誰も私を救ってくれないの。

信じていた友人には見放され、肉親からは拒絶され、世界で最も愛した人からは罵倒され。

一体私が何をしたの！！

全部アイツが悪いじゃない。

そう言うと、私が信じていた人たちはまるで哀れなものを見るような蔑みの目で私を見つめた。

だれもかれもが私を見捨てる。

世界中が私のことを嫌いなんだ。

そうだ、初めからそうだった。

産みの親は私を不気味がり、私が天才と分かると途端手のひらを変えて親面をする。

周囲の人間だってそうだ。

私を天才、天才と持て囃しながら内心では馬鹿にして、誰も私のことを認めようとしない。

それでよかった。

私は一人でよかったんだ。

でも、そんな私を唯一人姉として慕ってくれたあの子の存在。

それを知った時、もう私は一人ではいられない。

人の温もりを知って、独りの寂しさを知って私は途端恐怖した。

何時か、何時かこの子も他の人間の様に自分から離れていってしまうのではないか？

どこか遠くにいつてしまっうんじゃないか。

そう思うと夜も怖くて眠れずに、私は益々自分の世界だけにのめりこんだ。

でもまた私の前に一筋の光がさしこんだ。

真っ直ぐでちょっと頑固だけど、でも絶対に私を裏切らない人。

そしてその人が連れていたもう一つの光。

私にとってそれははじめての

天才である私は何でも出来た。

どんな物でも作れた。

でも唯一つ手に入らなかったものがある。

他の人が普通に当たり前のようについて、私には無かったそれを

やめよう、私は否定されたんだ。世界から、そして家族からも。

涙を服の袖で乱暴に拭い、準備を終えたそれをアタッシユケースに収める。

「バイバイ、私の家族、そして私の恋人」

家族（後書き）

作者です。だいぶ投稿が遅くなってすみません。

実はラストバトルの舞台をどうするか？

地球にするかそれとも月にするか。

どっちかである程度エンディングが決まるので悩んでいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489v/>

ISの世界に地球連邦をぶち込んでみた。

2011年12月24日12時08分発行